

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第279集

大里郡岡部町

熊野遺跡(A・C・D区)

岡部町岡中央団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

〈第2分冊〉

2002

埼玉県住宅供給公社
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目次

<第1分冊>

口絵

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要 1

1. 調査に至るまでの経過 1
2. 発掘調査と報告書作成の経過 2
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織 3

II 遺跡の立地と環境 4

1. 地理的環境 4
2. 歴史的環境 5

III 遺跡の概要 11

1. 調査の方法 11
2. 基本層序 11
3. 遺跡の概要 11

IV 熊野遺跡A区の調査 17

1. 竪穴住居跡(古代) 26
2. 竪穴状遺構(中世) 208
3. 掘立柱建物跡(古代) 226
4. 掘立柱建物跡(中世) 283

<第2分冊>

5. ビット列 295
6. 溝跡 297
7. 土壌 316
8. 井戸跡 371
9. 道路跡 374
10. 特殊遺構 384
11. A区ビット出土遺物 426
12. A区グリッド・表採出土遺物 427

V 熊野遺跡C区の調査 430

1. 竪穴住居跡(古代) 430

2. 竪穴状遺構(中世) 553
3. 掘立柱建物跡(古代) 554
4. 掘立柱建物跡(中世) 577
5. ビット列 582
6. 溝跡 583
7. 土壌 598
8. 土壌墓 609
9. 特殊遺構 609
10. ビット・グリッド出土遺物 611

<第3分冊>

VI 熊野遺跡D区の調査 613

1. 竪穴住居跡(古代) 614
2. 掘立柱建物跡(古代) 659
3. 掘立柱建物跡(中世) 671
4. ビット列 680
5. 溝跡 681
6. 土壌 682
7. 特殊遺構 686
8. ビット・グリッド出土遺物 686

VII その他の遺物 688

VIII 調査のまとめ 690

附編 723

写真図版

付図

(5)ピット列

ここでピット列としたものは、欄列、あるいは掘立柱建物跡の可能性がありながら柱穴の組合せが悪く、建物跡とするには根拠が弱いものである。2棟(基)抽出した。

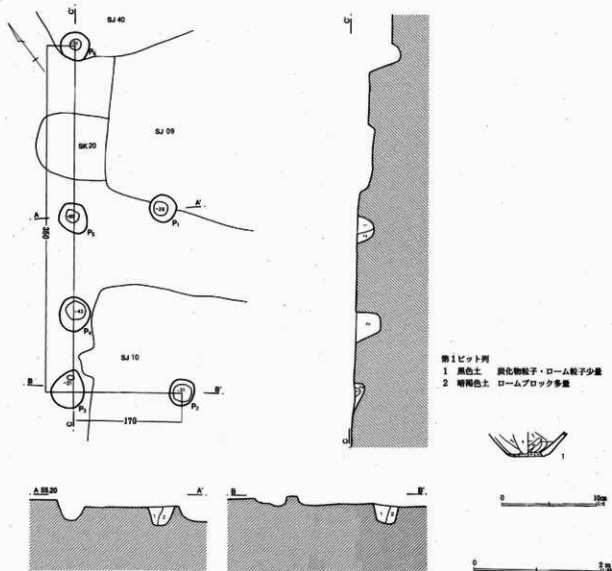
A区第1号ピット列(第241図)

A区第1号ピット列は47-9・10区に位置する。Pit 2とPit 3、Pit 3~Pit 6が直角に振れるが、建物と認識できなかったものである。柱穴心々間で測定すると、南北列が3.50m、東西が1.70mとなる。Pit 3~Pit 6を結ぶ線にはPit 5がほぼ中間に位置する。Pit 4は線には乗るが、柱間はずれている。第241図 A区第1号ピット列・出土遺物

Pit 1は伴うか否か不明であるが、第9号住居跡を切っていた。また、Pit 2も第10号住居跡を切って掘り込まれていた。Pit 6は町教育委員会調査区にある。深さは20cm~50cm前後と比較的浅い。

出土遺物は土師器瓶が1点、Pit 3から検出された(第241図)。1は土師器瓶底部片である。おそらく小型の瓶と思われ、推定孔径3.0cm。胴部はヘラケズリ、内面はナゲ及びヘラナゲ調整。胎土に石英、角閃石、白色粒子を含む。焼成は良好で褐色。約20%残存する。

時期は不明確であるが、古代の所産と思われる。



重複関係から熊野Ⅱ期以降という限定はできる。

A区第2号ピット列 (第242図)

A区第2号ピット列は45-10-11グリッドに位置する。中世の建物群の中にあり、おそらく建物の一部を構成する可能性はあるが、柱穴配置に規則性が乏しいものである。

Pit 1～Pit 3間は長さ5.40m。柱筋が通り、柱間も1.80m等間に揃う。この柱穴列の北側にはPit 4・Pit 5が平行する。Pit 3とPit 4間は1.80mで、柱間も揃うが、Pit 1とPit 7に対応する柱穴が欠ける。

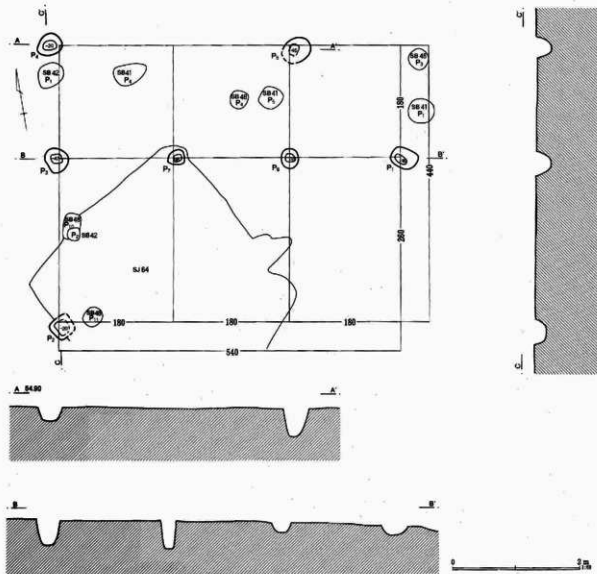
またPit 2～Pit 4を結ぶラインはPit 1・Pit 3を結ぶラインに直交するものの、Pit 2・Pit 3間が2.60mとなり、柱間が揃わない。

Pit 1～Pit 3に平行するPit 2のライン上には柱穴は検出されなかった。

柱穴は方形基調で、長径25～50cmと全体的に小規模である。深さは16～46cmである。

出土遺物は検出されなかった。時期は中世と推定されるが、それ以上の限定は難しい。

第242図 A区第2号ピット列



(6)溝跡

A区からは45条の溝跡が検出された。溝の時期を特定するのは難しいが、古代のものと中近世のものに2大別できる。確実に古代に遡る溝は第39号溝跡で、竪穴住居跡に切られていた。平行する第40号溝跡も覆土が同一で、古代と見て良からう。第3号溝跡は住居壁溝の可能性もある。また、第24号溝跡は上面に第1号道路跡に由来すると思われる硬化面が形成されており、道路跡に伴うかそれ以前の所産となる。古代のものと見て誤りない。他の溝跡の大半は中世、もしくは近世以降の所産と推定される。

A区第1号溝跡(第244図)

A区第1号溝跡は、調査区南端の48-7グリッドから東方向に約45m、直線的に延びている。溝幅は55cm-75cm、深さは20cm以下と浅い。重複する古代の住居跡を切っており、中世以降となるのは間違いない。覆土の状態から重複する第2・9・43号溝跡よりも古い。また、第4・7・8号溝跡は本溝跡から分岐するように見えるが、覆土は異なり、おそらく第2号溝跡に関連する可能性が高い。

埋土はローム粒子混じりの黒色土で、浅間A軽石の混入は確認できなかった。出土遺物は須恵器長頸瓶底部片が検出された(第255図1)。湖西産と思われるが、混入資料である。時期は不明確であるが、中世の所産と考えておきたい。少なくとも浅間A軽石降下以前である。

A区第2号溝跡(第244図)

A区第2号溝跡は調査区南部の47-7グリッドから東南東方向に直線的に延び、48-10グリッド付近で溝幅を広げ、第5・9・43号溝に分岐する。第9号溝跡は第2号溝の延長線上にあり、同溝の本流と思われる。

第9号溝跡まで含めた溝の規模は長さ約47m、幅0.70-1.00m、深さ0.10-0.20mである。埋土には灰白色の火山軽石(浅間A軽石と思われる)が多量に含まれていた。

出土遺物は須恵器長頸瓶と灰釉鉢がある(第255図

2・3)。須恵器長頸瓶は混入。灰釉鉢は瀬戸美濃系で、底部は削り出し高台である。内面には淡黄緑色の灰釉が掛かり、貫入がある。近世の所産と考えられる。

時期は出土遺物や埋土中の浅間A軽石(1783年降灰)から18世紀後半以降埋没したものと考えられる。A区第3号溝跡(第244図)

A区第3号溝跡は46・47-8グリッドに位置する。第6号住居跡と第5号掘立柱建物跡を結ぶように検出された。新旧関係は不明確であるが、両遺構よりも古い可能性がある。

直角近く屈曲し、規模は長さ2.60m、幅0.40m、深さ0.15mである。規模も小さく、第6号住居跡の形態が歪むことから、本溝跡は住居跡壁溝となる可能性もある。

出土遺物は検出されなかった。時期は不明確であるが、熊野Ⅷ期以前と思われる。

A区第4号溝跡(第244図)

A区第4号溝跡は調査区南端の48-9、49-9・10グリッドに位置する。第1号溝跡と重複し、本溝跡の方が新しいものと思われる。第7・8号溝跡とも関連する可能性がある。緩やかに屈曲し、途中と東端部に分岐溝がある。

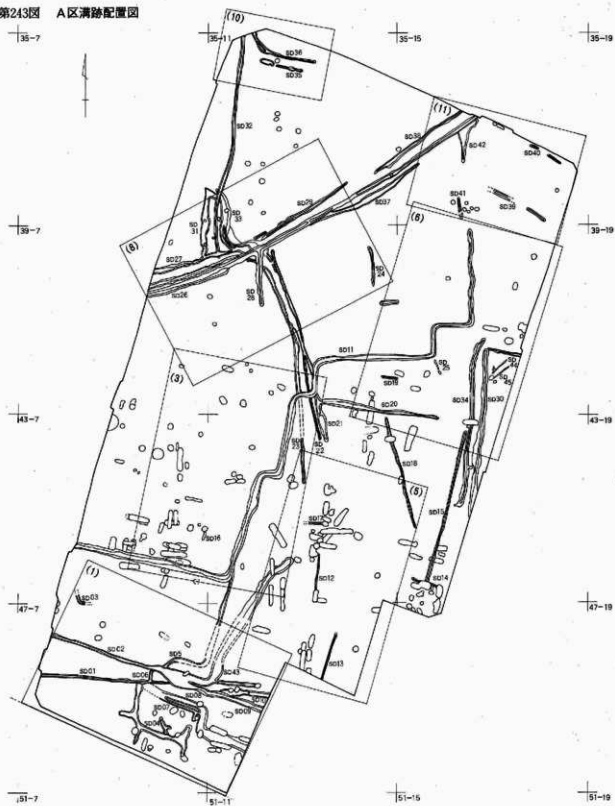
規模は長さ約18m、幅0.60-1.20m、深さ0.10-0.20mである。埋土には浅間A軽石が多量に含まれていた。

出土遺物は少なく、須恵器環と鉄滓が検出されている(第255図4・5)。4は底部削り出し高台の環で、群馬産。5は鍛冶滓である。出土土器は混入で、溝の時期は埋土の状態から近世後期以降埋没したものと考えられる。

A区第5号溝跡(第244図)

A区第5号溝跡は46-11グリッドから南下し48-10グリッド付近で西に折れ、第2号溝跡に取り付く。北端は第11号溝跡に繋がっている。第2号溝及び第11号溝跡と本溝跡は覆土が類似し、おそらく一体の

第243图 A区清跡配置图



ものと思われる。重複する遺構との新旧関係は本溝跡の方が新しい。

規模は総延長約30m、幅0.50～0.80m、深さ0.10～0.30mである。埋土には浅間A軽石が含まれていた。

出土土器は検出されなかった。掘削時期は不明だが、近世後期以降埋没したものと考えられる。

A区第6号溝跡 (第244図)

A区第6号溝跡は48-9グリッドに位置する。第1号溝跡と第2号溝跡を連結するように検出された。溝幅や覆土の状態から第1号溝跡よりも新しく、第2号溝跡、第7・8号溝跡と関連あるものと推定される。溝の規模を考えると、第5号溝跡と一体のものかもしれない。

規模は長さ2.0m、幅0.40～0.60m、深さ0.10mである。埋土には浅間A軽石が含まれていた。

出土遺物はない。掘削時期は不明であるが、埋土の状況などから近世後期以降埋没したものと考えられる。

A区第7・8号溝跡 (第244図)

A区第7・8号溝跡は48-9グリッド～49-11グリッドにかけて位置し、東端は調査区外に延びている。西端は第1号溝跡と重複するが、本溝跡の方が新しいものと考えられる。第7号溝跡と第8号溝跡は第12号住居跡の東方で2条に分岐するが、その東側では合流している。一体のものと考えて良からう。

規模は長さ25m、両溝を合わせた幅1.80～2.40m、深さ0.05～0.15mである。埋土には浅間A軽石が含まれていた。

出土遺物はなく、掘削時期は不明であるが、埋土の状況から近世後期以降埋没したものと考えられる。

A区第9号溝跡 (第244図)

A区第9号溝跡は48-10-11、49-11-12グリッドに位置する。第2号溝跡の東側延長線上にあり、おそらく同一溝跡と考えられる。第11号住居跡の東側が幅広になり、第43号溝跡が分岐している。

規模は長さ19m、合流部の最大幅2.0m、深さ0.10

～0.15mである。埋土には浅間A軽石が含まれていた。

出土遺物は須恵器環と平瓦、在地産の土師質盤がある(第255図6～9)。須恵器環と平瓦は明らかに混入。土師質盤は口縁部の小片である。13世紀後半～14世紀頃の資料と考えられる。

掘削時期は不明確であるが、土師質盤の存在から中世まで遡る可能性はある。埋没時期は近世後期以降と考えられる。

A区第10号溝跡 (第244図)

A区第10号溝跡は48-11-12グリッドに位置し、第9号溝跡から分岐している。土層観察からは第9号溝跡に切られていたが、本来同一溝跡と考えた方が良からう。

規模は長さ10.6m、幅1.0～1.6m、深さ0.05～0.25mである。埋土は暗褐色から黒褐色土を基調としており、火山灰も少量含まれていた。

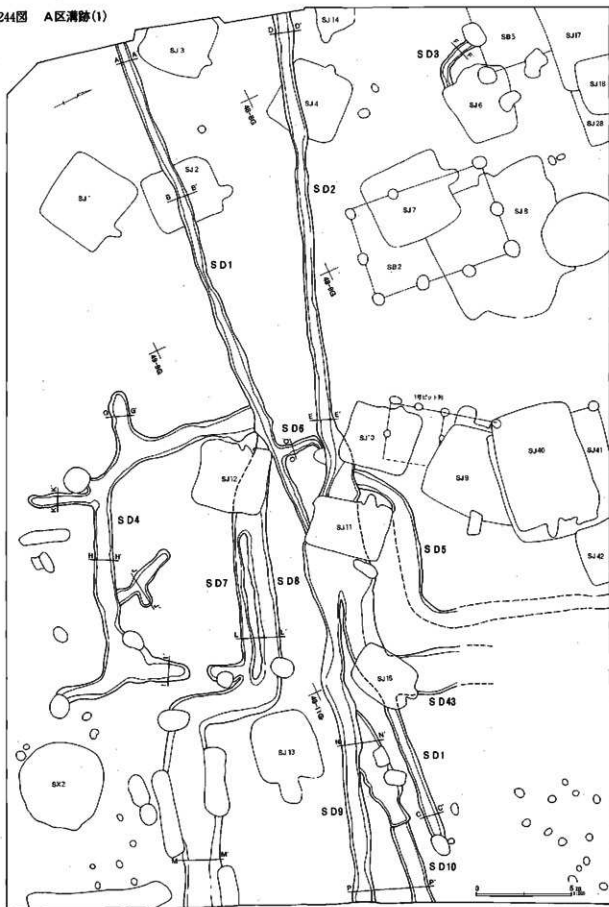
出土遺物はない。時期は不明確であるが、第9号溝跡とはほぼ同一段階であろう。埋没時期は本溝跡の方が早いものと考えられる。

A区第11号溝跡 (第246・249図)

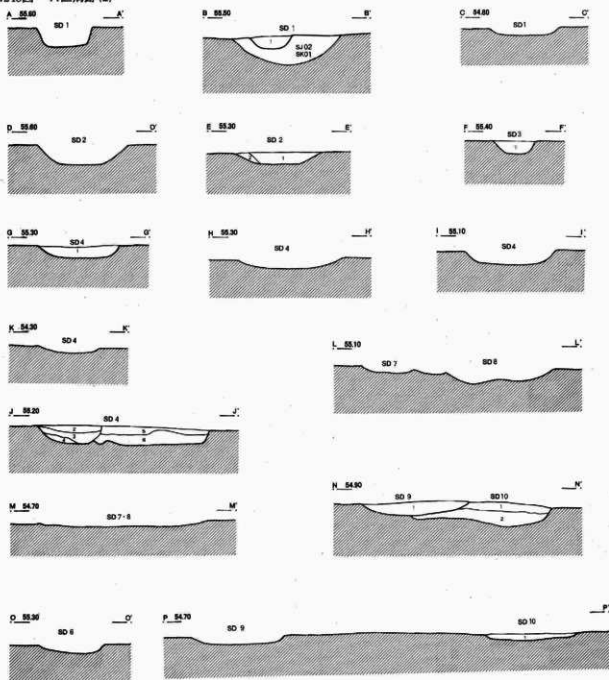
A区第11号溝跡は調査区西端の45-8グリッドから33.50m東に延び、46-11グリッドで北方に屈曲する。その後、8回屈曲しながら北流し39-16グリッドで途切れている。更に北方にある第41・42号溝跡はほぼ延長線上にあるが、同一溝か否かは不明である。46-11グリッドの屈曲部では第5号溝跡が合流していた。第21～23号溝跡との新旧関係は町調査区にあるため不明であるが、他の遺構との関係については、全て本溝跡の方が新しいことが判明した。

規模は総延長145.5mである。溝跡南辺は規模が大きく、上幅1.40m、下幅0.40m、深さ1.45m前後、断面箱菜研の堀といっても良い規模である。北に向かうに従い規模は小さくなり、北端では幅0.70m、深さ0.30m程度となる。明確な陸橋をもつというよりも徐々に浅くなり消滅する状況である。

第244图 A区清跡(1)



第245図 A区溝跡(2)



SD 01

1 黒色土 ローム粒子少量

SD 02

1 灰褐色土 火山灰(浅間A)多量
2 灰褐色土 ロームブロック・火山灰(浅間A)混入

SD 03

1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量

SD 04

1 灰褐色土 火山灰(浅間A)多量、ロームブロック少量
2 暗褐色土 黒色土粒子・ローム粒子少量
3 黒褐色土 ロームブロック全量多量
4 黄褐色土 ローム主体、黒色土混入
5 暗褐色土 ローム粒子微量
6 黒褐色土 炭化物粒子多量、ローム粒子少量

SD 08

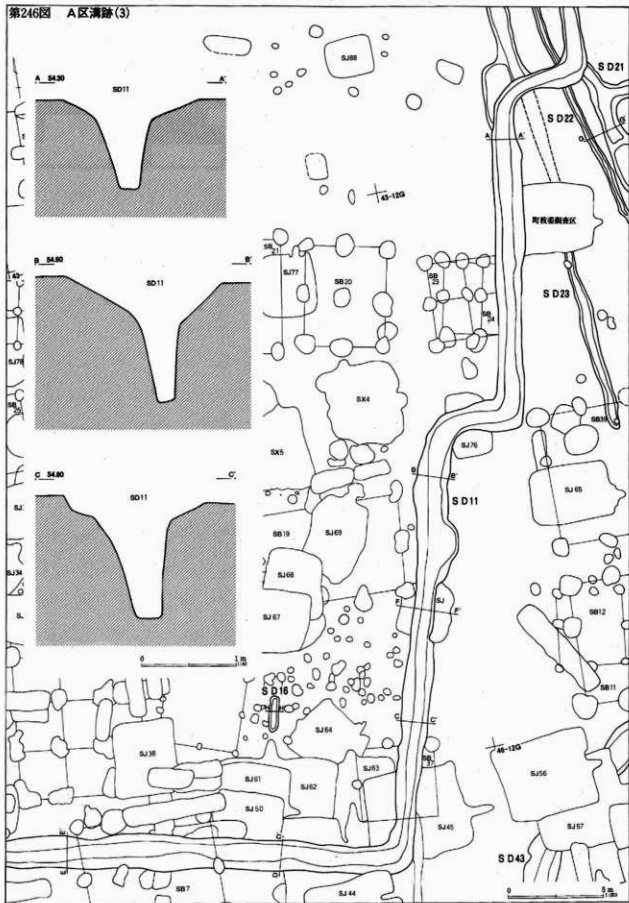
1 灰褐色土 火山灰(浅間A)・ローム粒子少量

SD 10

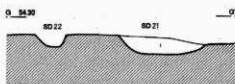
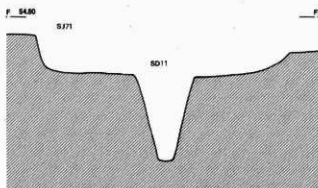
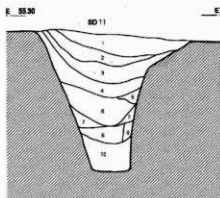
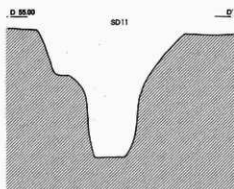
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(小粒)多量
2 黒褐色土 ローム粒子多量

0 1m
1:40

第246图 A区清淤(3)



第247図 A区溝跡(4)



SD16
1 黒褐色土 ローム粒子少量

SD21
1 灰褐色土、火山灰(浅間A)少量



- SD11
- 1 明褐色土 火山灰(浅間A) 混入
 - 2 褐色土 微細なローム粒子少量
 - 3 灰褐色土 ローム粒子少量
 - 4 褐色土 ローム粒子少量
 - 5 暗褐色土 ローム粒子少量
 - 6 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子やや多量
 - 7 黄褐色土 ローム粒子少量
 - 8 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子やや多量
 - 9 褐色土
 - 10 褐色土 ロームブロック混入

埋土はローム混じりの土で構成され、概ね自然堆積と考えて良いものである。最上層には浅間A軽石が多量に含まれていた。また、調査区西端での断面観察からは土塁の痕跡は見いだせなかった。

出土遺物は土師器暗文環、須恵器甕、灰軸陶器長頸瓶、香が、瀬戸灰軸平碗、播鉢等がある(第255図10~17)。12・17は播鉢。常滑系?。内面に7本単位の播り目が付く。13は器種不明。羽釜状の鐙が付いている。14は瀬戸袴腰形香伊。口縁部と脚部を欠く。外面鉛色釉が掛かる。15は瀬戸灰軸平碗。内外面に灰軸が掛かっている。16は灰軸陶器長頸瓶。外面に淡黄緑色の灰軸が掛かる。第50号住居跡出土例と酷似している。混入。

掘削時期は不明確であるが、出土遺物から15世紀代か。最終的に溝が埋没したのは浅間A軽石の降灰から18世紀以降となろう。

A区第12号溝跡(第248図)

A区第12号溝跡は45-47-13グリッドにかけて南北に延びている。重複する第52号住居跡、第75号土壇を切っていた。

規模は長さ15.60m、幅0.30m、深さ0.05~0.10m前後である。埋土はローム混じりの暗褐色土で、浅間A軽石は含まれていなかった。

時期は不明確であるが、中世の土壇を切っていたことから、中世後期以降、18世紀以前と考えられる。

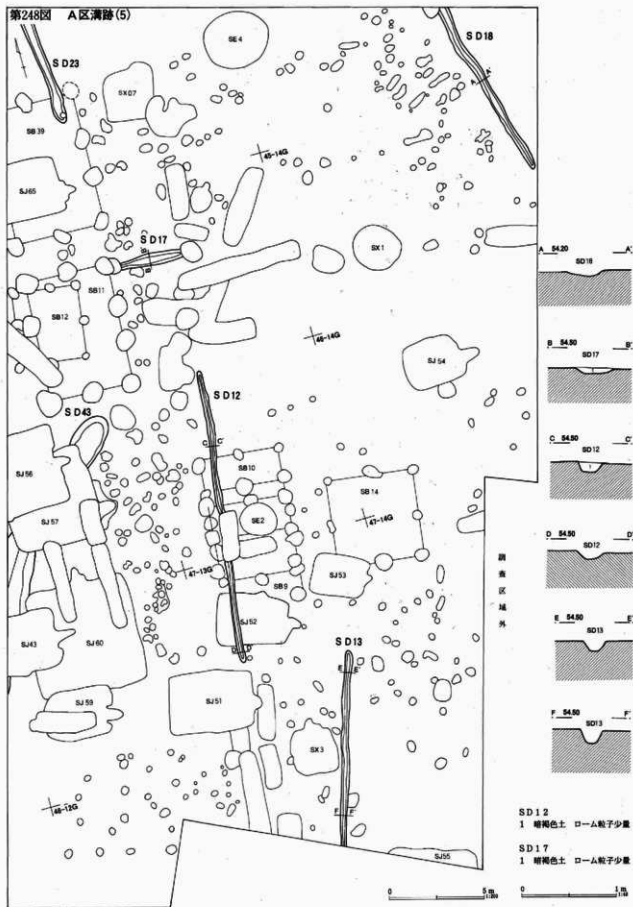
A区第13号溝跡(第248図)

A区第13号溝跡は47-48-13グリッドに位置する。南北方向に直線的に延び、南端は調査区外に続く。

規模は長さ10.20m、幅0.30m、深さ0.05~0.15mである。南に行くに従い、徐々に深くなる傾向がある。

出土遺物はなく時期は不明確である。中世~近世

第248図 A区溝跡(5)



の所産であろう。

A区第14号溝跡 (第243図)

A区第14号溝跡は調査区東端の46-15グリッドに位置する。第15号溝跡の南端部にほぼ直交するように取り付く。重複する第91・92号土壌を切っていた。

規模は長さ5.60m、幅0.25~0.35m、深さ0.15mである。埋土は灰褐色土を基調としており、火山灰(浅間A軽石か)を含む。

出土遺物はなく時期は不明確であるが、近世後期以降埋没した可能性がある。

A区第15号溝跡 (第249図)

A区第15号溝跡は43-16から46-15グリッドにかけて位置する。南端は第14号溝跡に取り付いている。重複する94・96号土壌を切っていた。

規模は長さ約33m、幅0.40m、深さ0.20~0.30mである。

出土遺物はなく、時期は不明確であるが、第14号溝跡と同時期となる可能性がある。

A区第16号溝跡 (第246図)

A区第16号溝跡は45-10グリッドに位置する。

規模は長さ1.90m、幅0.35m、深さ0.10mである。埋土はローム混じりの黒褐色土である。

出土遺物はなく時期は不明確である。

A区第17号溝跡 (第248図)

A区第17号溝跡は45-13グリッドに位置する。両端は第11号掘立柱建物跡と第114号土壌と重複するが、新旧関係は不明である。

規模は長さ3.30m、幅0.25~0.50m、深さ0.05mである。埋土はローム粒子混じりの暗褐色土である。出土遺物はなく時期は不明である。

A区第18号溝跡 (第248図)

A区第18号溝跡は43-14-45-15グリッドにかけて北西から南東方向に延びている。第159・160号土壌と重複し、平面観察により土壌の方が新しいことが判明した。

規模は長さ24.0m、幅0.25~0.40m、深さ0.05~0.15mである。

出土遺物はなく時期は不明確であるが、土壌が中世~近世初期の所産と推定されることから溝跡はそれ以前となる。第18号溝跡の西側には波板状圧痕と思われる小ピットが溝に沿って連続し、あるいは道路状遺構の側溝となる可能性も想定される。

A区第19号溝跡 (第249図)

A区第19号溝跡は42-14グリッドに位置する。ほぼ東西方向に延び、規模は長さ3.60m、幅0.30~0.35m、深さ0.35m前後である。埋土は上層に暗灰褐色の粘質土が乗り、その下層に灰色粘土が繻状に堆積していた。

出土遺物は須恵器の横瓶が検出された(第255図18)。時期は不明である。

A区第20号溝跡 (第249図)

A区第20号溝跡は42-13-15グリッドに位置する。西端は第21号溝跡に取り付き、東方に延びている。重複する第141号土壌を切っていた。

規模は長さ25m、幅0.40~1.20m、深さ0.15~0.25mである。埋土には浅間A軽石が多量に含まれていた。

出土遺物は検出されなかった。時期は不明確であるが、近世後期(18世紀)以降埋没したものと考えられる。

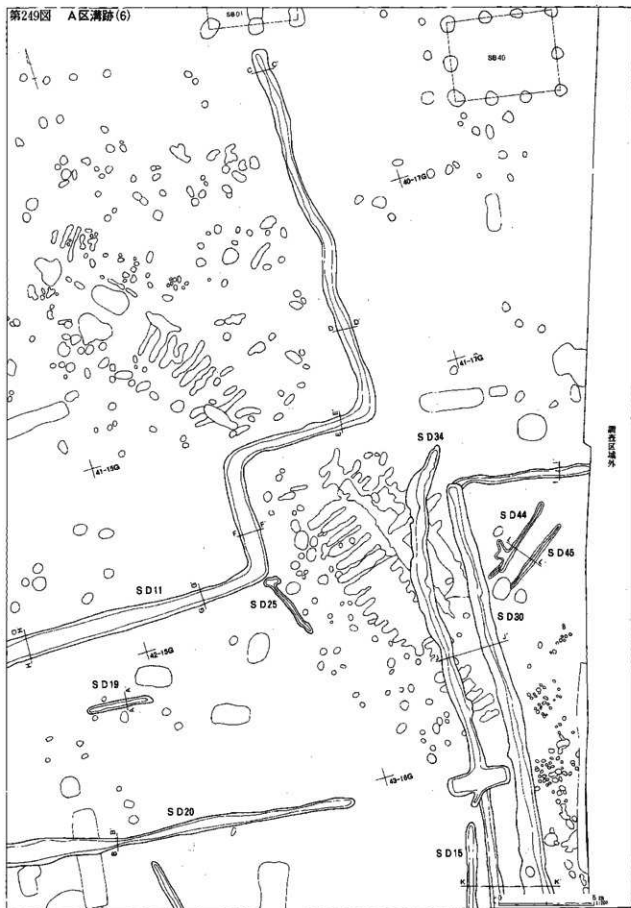
A区第21号溝跡 (第251図)

A区第21号溝跡は39-12-43-13グリッドにかけて北北西から南南東に延び、途中第22号溝跡が分岐する。北端は第26号溝跡付近にあり、直接切り合わないが、その北にある第33号溝跡に連続する可能性もある。また、第11号溝跡とも重複するが、町教育委員会調査区にあたり、新旧関係は不明である。

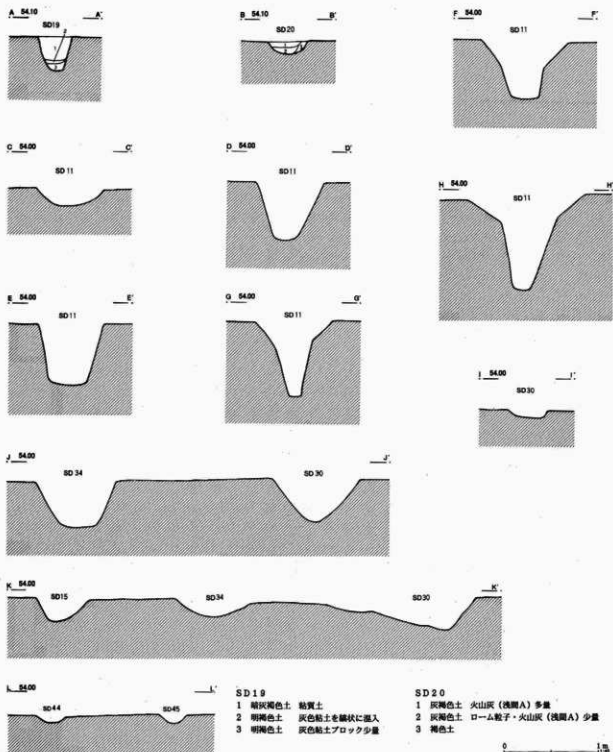
規模は長さ42m、幅0.30~1.80m、深さ0.10~0.30mである。埋土には浅間A軽石と思われる火山灰が多量に含まれていた。

出土遺物は検出されておらず、時期は不明確であるが、埋土中の火山灰の存在から近世後期(18世紀)以降埋没したものと考えられる。

第249图 A区清跡(6)



第250図 A区溝跡(7)



A区第22号溝跡 (第246図)

A区第22号溝跡は41-13-43-13グリッドにかけ
て位置する。第21号溝跡から分岐する溝である。

規模は長さ18m、幅0.30~0.40m、深さ0.05~

0.15mである。埋土には浅間A軽石と思われる火山
灰が多量に含まれていた。

出土遺物はなく、時期は不明確であるが第21号溝
跡とほぼ同様な時期と考えられる。

A区第23号溝跡 (第246・251図)

A区第23号溝跡は39-12-44-13グリッドに位置する。第21・22号溝跡の西側にほぼ平行して延びる溝跡で、北端は第28号溝跡に取り付くように見えるが、更にその北の第33号溝跡に続く可能性がある。

規模は長さ46.5m、幅0.30-0.60m、深さ0.10-0.20mである。埋土には浅間A軽石と思われる火山灰が多量に含まれていた。

出土遺物は検出されず、時期は不明確であるが近世後期(18世紀)以降埋没したものと考えられる。

A区第24号溝跡 (第251図)

A区第24号溝跡は39-40-14グリッドに位置する。規模は長さ8.6m、幅0.60m、深さ0.05m前後である。埋土上面には灰色粘質土を主体とする硬化面が乗っていた。この硬化面は第1号道路跡に伴うものと見るのが妥当で、溝跡は道路跡に伴うかそれ以前のものと考えられる。

出土遺物は検出されなかった。時期は硬化面の存在から第1号道路跡が機能したと思われる7世紀後半-9世紀の範囲に収まると推定される。

A区第25号溝跡 (第249図)

A区第25号溝跡は41-42-15グリッドに位置する。規模は長さ3.9m、幅0.30m、深さ0.15m前後である。埋土は褐色土を基調としていた。

出土遺物はなく、時期は不明確であるが、東側に平行する第1号道路跡と関連する可能性もある。

A区第26・27・29・37・38号溝跡 (第243・251・254図)

A区第26・27・29・37・38号溝跡は調査区西端の39-40-9グリッドから北端の36-16グリッドにかけて調査区を斜めに抜けている。大きく見ると第26号溝とその北側に平行する第27・29・38号溝から構成され、第37号溝跡は第26号溝跡から分岐する。

重複する第21・23・31-33号溝跡は埋土の状況から本溝跡よりも新しい時期の所産と思われる。また、第28号溝跡も同様である。第32号溝跡は本溝跡に関連する可能性がある。第1号道路跡は本溝跡によって確実に切られていた。

規模は長さ80m、平行する2本の溝は心々間の幅2.5-4.0mである。深さは第26号溝跡が深く、0.20-0.60mである。西端付近が最も深く、北東に向かうに従って浅くなる。北側に平行する第27・29・38号溝跡は0.05-0.10程度の深さしかない。

埋土は第26号溝跡が特徴的で、溝のテラス部分から溝覆土中にかけて、非常に堅く締まった灰色の粘質土が堆積していた。灰色硬化粘土の堆積が見られない部分についても、テラス面の底面はバリバリに硬化しており、道路として使用されたことは確実である。2条の溝が元来道路側溝として機能したのか否かは不明であるが、溝がある程度埋没した段階で道路部分として取り込まれたものであろう。

出土遺物は第26号溝跡から須恵器長頸瓶と平瓦が検出された(第255・256図19-21)が、いずれも混入である。また、同溝跡から馬の頭骨と歯の一部が発見されたが遺存状態は極めて悪かった。

時期に関しては、古代の遺構を切り、近世後期の溝跡に切られていること、溝埋没後に浅間A軽石が堆積していることから中世-近世初期に機能していた可能性が高いものと考えられる。

A区第28号溝跡 (第251図)

A区第28号溝跡は39-40-12グリッドに位置する。第26号溝跡から分岐するように見えるが、覆土の状態から本溝跡の方が新しいものと考えられる。おそらく第21・23号溝跡と共に第33号溝跡に続くものと推定される。

規模は長さ11.0m、幅0.70-1.20m、深さ0.10-0.20mである。埋土には浅間A軽石が多量に含まれている。

出土遺物はなく時期は不明確であるが、埋土の状況から近世後期(18世紀)以降埋没したものと考えられる。

A区第30・34号溝跡 (第249図)

A区第30・34号溝跡は41-16-17グリッドから45-16グリッドにかけて南北に平行して延びている。第30号溝跡は北端で東に屈曲し、調査区外に抜ける。

重複する第1号道路跡、第184号土壌を切っていた。

規模は長さ40mに渡って南北に延び、第30号溝は2m東方に屈曲する。幅は0.40～2.00m、深さは0.05～0.45mである。埋土には浅間A軽石が多量に含まれていた。

出土遺物は第30号溝跡から袴腰形香炉(第256図22)、第34号溝跡から瀬戸碗と瀬戸折縁深皿が検出されている(30・31)。30の碗は内外面淡黄色の釉が掛かる。31は内面に鉄絵具で文様が描かれている。17世紀頃のものか。時期は出土遺物から近世中期頃としておきたい。埋没は近世後期(18世紀)以降と考えられる。

A区第31号溝跡(第251図)

A区第31号溝跡は38-10・11、39-10グリッドに位置する。第27号溝跡から北側に14.4m延び、東に折れる。第32号溝跡を介して第33号溝跡に連結するものと思われる。重複する第27・32号溝跡の上部に被っていた。

規模は長さ14.4m、幅0.80～1.60m、深さ0.05～0.10mである。埋土には浅間A軽石が多量に含まれていた。

出土遺物は在地系の鉢がある(第256図23)。鉢は口縁部小片であるが、須恵質に堅く焼き上がっている。内面は使用による磨滅が著しい。時期は不明確であるが、おそらく近世以降のものであろう。埋没は浅間A軽石の存在から近世後期(18世紀)以降と考えられる。在地系鉢は直接伴うものではない。

A区第32号溝跡(第251図)

A区第32号溝跡は35～39-11グリッドに位置する。ほぼ南北方向に延び、南端は第27号溝跡に取り付き、北端は調査区外に抜けていた。

規模は長さ44.6m、幅0.50～1.00m、深さ0.06～0.30mで、北に向かうに従い徐々に深くなる。

埋土はローム粒子とロームブロックを少量含む黒褐色土である。北側調査区際の断面観察によれば、埋土の上には硬化面が形成され、溝埋没後、溝脇から溝上面にかけて道路として使用されたことが判

明した。

出土遺物は須恵器蓋が検出された(第256図24)。内面にかえりの付くもので、やや異形である。時期は中世以降近世後期以前と考えられる。

A区第33号溝跡(第251図)

A区第33号溝跡は38-39-11グリッドに位置する。北端は第31号溝跡に連結し、南端は第26・27号溝跡上部を通り第21・23号溝跡に連なるものと推定される。全体にS字状に屈曲している。

規模は幅1.20～1.80m、深さ0.20m前後である。埋土には浅間A軽石が多量に含まれていた。

出土遺物は天目茶碗、碗、搦鉢、火舎、不明製品がある(第256図25～29)。25は瀬戸天目茶碗。内面に鉄釉、外面は露胎。底部は削り出し高台。17世紀代か。26は瀬戸碗か。内外面にやや黄色を帯びた透明釉がかかり、貫入がある。27は信楽焼きの搦鉢。内面に掻り目が付く。17世紀代か。28は不明土製品。円柱状で上下両面が浅く窪む。29は火舎脚部か。楕円形の脚上部に接合用の突起を設けている。溝の時期は近世(17世紀頃)と思われる。埋没時期は近世後期(18世紀)以降である。

A区第35・36号溝跡(第253図)

A区第35・36号溝跡は35-11・12グリッドに位置する。東西方向に平行して延びるが、第36号溝跡は西端でやや北に向きを変える。

規模は第35号溝跡が長さ9.6m、第36号溝跡が14.6mである。幅は0.35～1.40mと一定しない。深さは0.08～0.15mである。埋土はローム粒子混じりの暗褐色土を基調としていた。

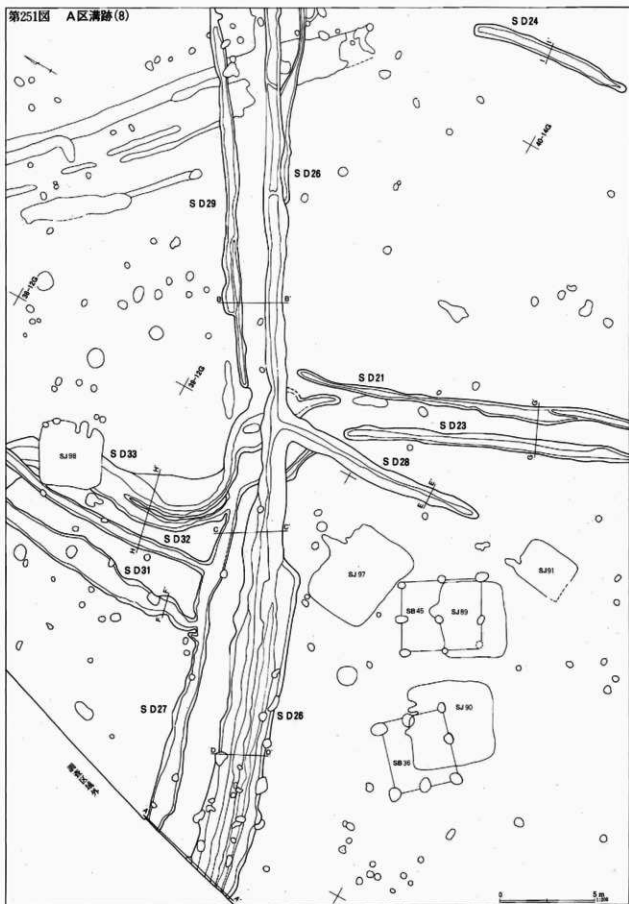
出土遺物はない。時期は不明確であるが、近世後期以前であることは誤りない。東方延長線上に第40号溝跡があり、あるいは古代に遡る可能性もある。

A区第39号溝跡(第254図)

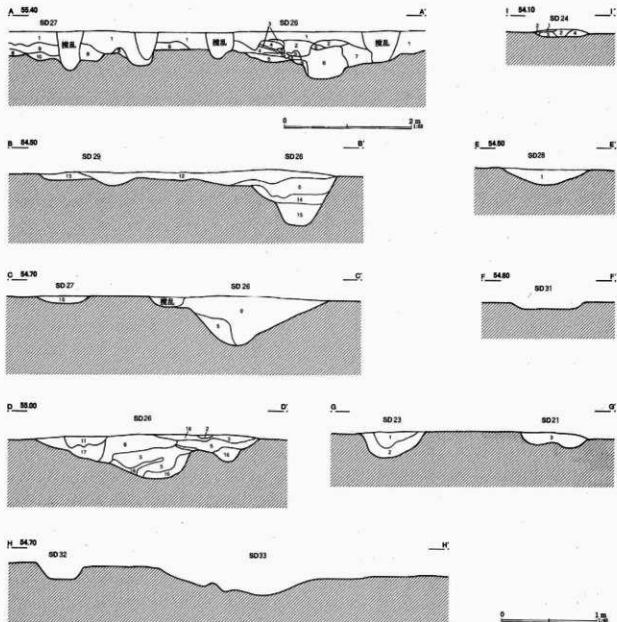
A区第39号溝跡は38-16～18グリッドに位置する。第58-66号住居跡と重複し、本溝跡が切られていることが判明した。

規模は途中切れる部分があるが、長さ12.4m、幅

第251图 A区沟迹(8)



第252図 A区溝跡(9)



SD 21・23

- 1 暗褐色土 白色粘土粒子微量。火山灰(洗層A?)多量
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量。火山灰(洗層A?)混入
- 3 暗褐色土 ローム粒子混入。火山灰(洗層A?)多量

SD 24

- 1 灰色粘土 礫化面
- 2 褐色土 ローム粒子やや多量
- 3 褐色土 ロームブロック混入
- 4 褐色土 ローム質土

SD 26~29

- 1 灰褐色土 火山灰(洗層A)多量
- 2 明灰褐色土 砂質土
- 3 褐色土 砂質土。黒色帯びた砂質多量
- 4 明灰褐色土 砂質土
- 5 灰色土 粘質土。ロームブロック混入。礫化面
- 6 褐色土 ローム粒子多量
- 7 褐色土 ローム粒子・ロームブロック
- 8 暗褐色土 ロームブロック混入

- 9 暗褐色土 ローム粒子・粘土微量
- 10 暗褐色土 ローム粒子やや多量
- 11 明灰褐色土 砂質土。火山灰(洗層A)混入
- 12 灰褐色土 粘質土。火山灰(洗層A)少量
- 13 暗褐色土 ロームブロックやや多量
- 14 暗褐色土 ローム粒子混入
- 15 暗褐色土 ローム主体。ロームブロック混入
- 16 暗褐色土 ローム粒子多量
- 17 暗褐色土 ローム粒子混入
- 18 暗褐色土 ロームブロックやや多量

0.40~0.70m、深さ0.25~0.40mである。埋土は2~4層に分かれ、最上層は暗褐色土で埋没していた。

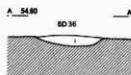
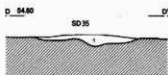
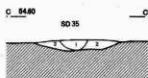
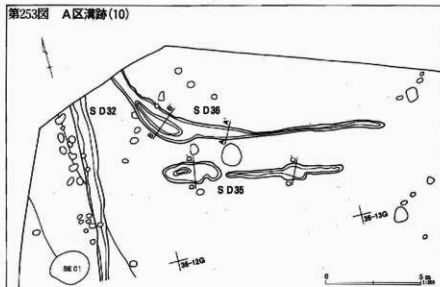
出土遺物は検出されなかった。時期は重複住居跡との関係から熊野Ⅱ期、またはそれ以前となり、熊

野Ⅰ期に遡る可能性が高いものと推定される。

A区第40号溝跡(第254図)

A区第40号溝跡は調査区北端の36-17、37-17-18グリッドに位置する。西端は第137号土壌に切られて

第253図 A区溝跡(10)



S D 35・36

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
- 2 褐色土 ロームブロック多量



いた。

東西方向に途切れながら続き、規模は長さ18.4m、幅0.40~0.50m、深さ0.05~0.20mである。埋土は黒褐色土を基調としていた。

出土遺物はなく、時期は不明確であるが、近世後期以前である。南側に12m隔たって第39号溝跡が平行する点は注意して良い。埋土や溝の規模も類似しており、あるいは両者は関連する可能性もある。古代に遡る溝となるかもしれない。

A区第41号溝跡(第254図)

A区第41号溝跡は38-16グリッドに位置する。第1号掘立柱建物跡柱穴上面を切っていた。

規模は長さ2.80m、幅0.40~0.70m、深さ0.05mである。埋土は灰褐色土を基調としていた。

出土遺物はない。時期は不明確であるが、近世以降に降る可能性がある。

A区第42号溝跡(第254図)

A区第42号溝跡は調査区北端の36-37-16グリッドに位置する。第26-38号溝跡の上面を削平していた。

ほぼ南北に伸び、南に下がるに従い幅を減じる。

規模は長さ9.20m、最大幅2.40m、深さ0.05mである。埋土には浅間A軽石が多量に含まれていた。

出土遺物はない。時期は不明確であるが、中世~近世と推定される。埋没時期は埋土の状況から近世後期(18世紀)以降と考えられる。

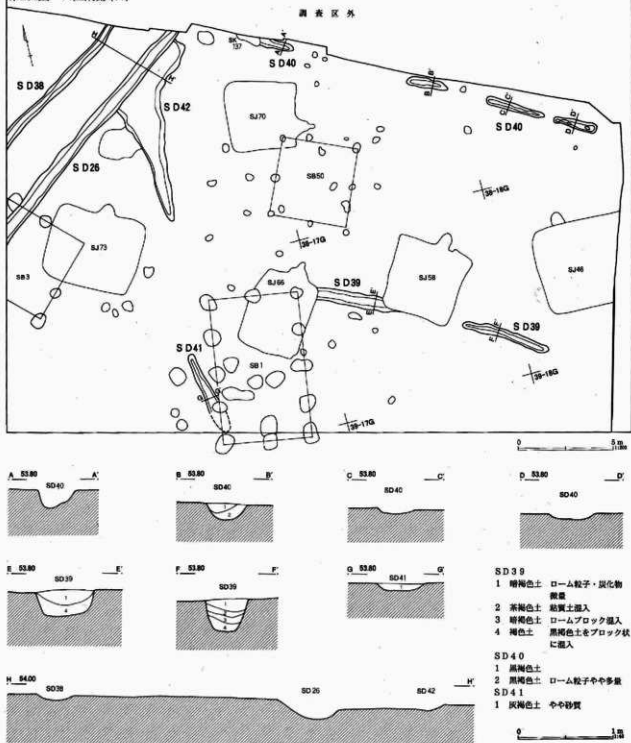
A区第43号溝跡(第248図)

A区第43号溝跡は48-10グリッドから45-12グリッドにかけて北西方向に伸びている。第2号溝跡から分岐し、6m東流し、その後北に向きを変える。重複する第15-43・56・57号住居跡を切っていた。また、途中町教育委員会調査区に掛かっている。

規模は総延長約36m、幅1.60~2.20m、深さ0.05~0.30mである。埋土には浅間A軽石が多量に含まれていた。

出土遺物は須恵器皿・甕、瀬戸灰釉小皿、平瓦がある(第256図33~36)。須恵器皿・甕、平瓦は混入である。灰釉小皿は15世紀後半頃のもので、遺構に伴う可能性はある。時期は中世~近世と考えられる。

第254図 A区溝跡(11)



埋没時期は近世後期(18世紀)以降となる。

A区第44・45号溝跡(第249図)

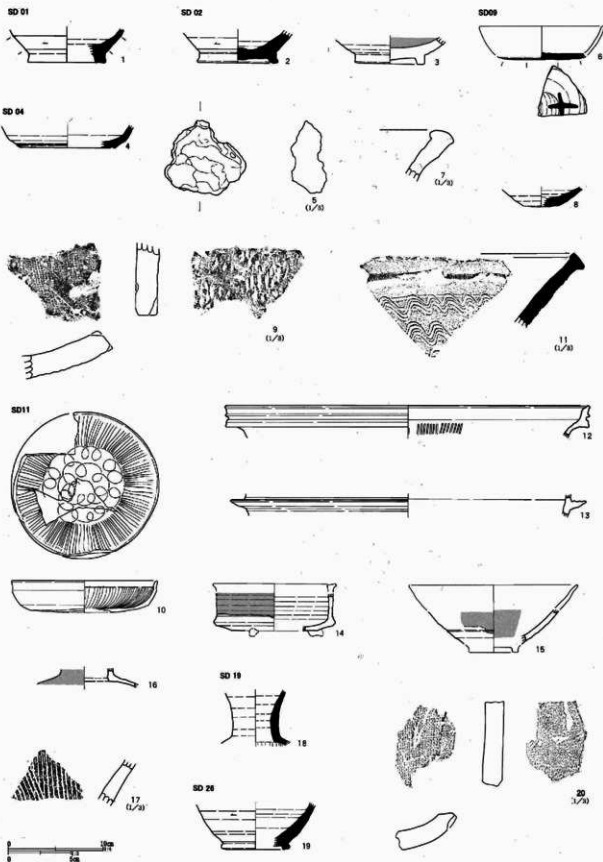
A区第44・45号溝跡は調査区東端の42-16-17グリッドに位置する。南西から北東方向にかけて2条平

行して延びている。

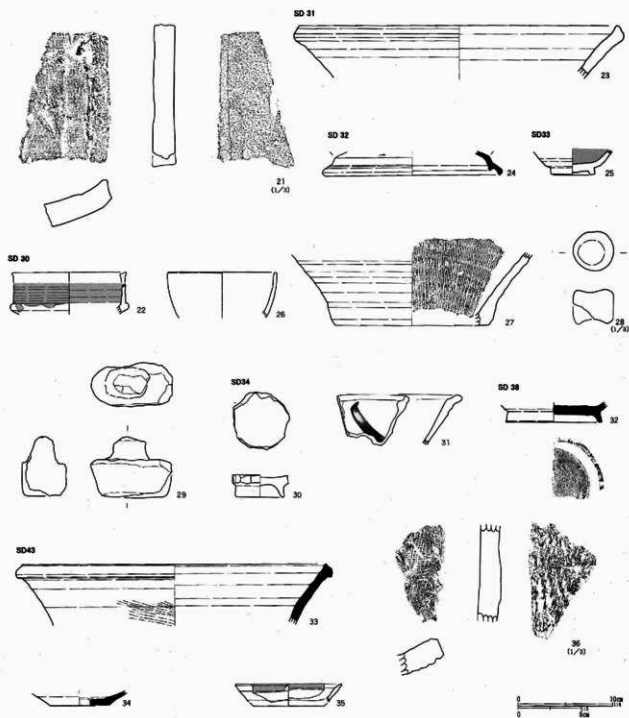
規模は長さ4.80m、幅0.20~0.30m、深さ0.08~0.15mである。

出土遺物はなく時期は不明である。

第255图 A区清跡出土遺物(1)



第256図 A区溝跡出土遺物(2)



第115表 A区溝跡出土遺物観察表(第255-256図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵長頸瓶		3.5	(8.0)	B	A	灰色	15%	SD 1 (48-9G), 湖西産か
2	須恵長頸瓶		3.4	(8.0)	B	A	明灰色	35%	SD 2, 産地不明
3	灰輪鉢		2.9	7.0	B	A	灰白色	70%	SD 2 No.1, 瀬戸焼き。
4	須恵坏		2.4	(10.0)	B D	C	淡灰褐色	5%	SD 4 覆土, 群馬(碓氷産か?)。底部削り出し高台
5	鉄洋	長径5.7cm, 短径5.6cm, 厚さ2.8cm, 重さ117.7g, 茶褐色。SD 4 (49-9G)							
6	須恵坏		0.7	(8.0)	針	A	淡青灰色	25%	SD 9 覆土, 南比企産。底部外面磨き「十」

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
7	土師質盤		5.0		A B	A	淡黄褐色	5%	S D9 覆土。口径40cm前後か
8	須恵環		2.1	(3.8)	B	A	灰色	20%	S D9 覆土。湖西産。環Hか 外面回転ヘラケズリ
9	平瓦				B C片	B	黄灰色		S D9 (48-10G)。外面叩き。内面布目
10	土師咄文環	15.2	3.3		A B D	A	赤褐色	70%	S D11(45-8G)。内面放射十線装文
11	須恵環		5.5		B C	A	暗灰色		S D11(46-11G)。未野産か。襷指波文3段施文
12	播鉢	(38.0)	3.4		B	A	茶褐色	5%	S D11(44-12G)。常滑系。内面7本単位の襷り目
13	不明製品		2.5		A D	B	淡黄褐色	5%	S D11(46-10G)。羽笠状の跡が付く
14	袴腰形香炉		3.9		B	A	黄灰色	20%	S D11(46-11G)。瀬戸。体部外面胎色の輪掛かる
15	灰輪平碗		3.7		B	A	黄灰色	10%	S D11(46-11G)。瀬戸。内面と外面中位以上灰輪
16	灰輪瓶		2.0		F	B	黄灰白色	20%	S D11(46-10G)。讃岐〜三河産。外面淡黄緑色の灰輪
17	播鉢		3.7		B	A	黄灰色		S D11(46-16G)。常滑系。内面襷り目
18	須恵横瓶		5.9		B F	B	紫灰色	50%	S D19覆土。産地不明(非湖西)。素地土や粗い
19	須恵長頸瓶		4.9	5.9	B	A	淡灰色	20%	S D26(39-12G)。湖西産
20	平瓦				A B	B	茶褐色		S D26。凹面布目。凸面横方向ナデ。襷巻作りか
21	平瓦				B C	A	灰色		S D26。凹面布目後部分的にナデ凸面はナデ。襷巻作り
22	袴腰形香炉		3.2		B	A	黄灰色	15%	S D30。瀬戸。体部外面胎色の輪掛かる
23	在地系鉢	(33.4)	5.6		B	A	青灰色	5%	S D31 No.1 (38-10G)。内面磨減 須恵質
24	須恵蓋	(18.2)	2.5		B片	A	青灰色	10%	S D32 No.3 (39-11G)。未野産
25	天目茶碗		2.7	4.7	C	A	乳白色	50%	S D33(38-11G)。瀬戸。内面鉄輪 外面磨蝕
26	茶碗	(11.2)	4.9		C	A	乳白色	10%	S D33(38-11G)。内外面黄色の透明釉。貫入あり
27	播鉢			(16.0)	C E H	A	淡灰色	20%	S D33 No.1。窯裏焼
28	円柱状土製品	S D33 直径3.2cm 高さ2.7cm。上下両端が強く窪む							
29	土師質六倉				D	A	淡褐色		S D33(39-11G)。火倉脚部か
30	碗		2.3	4.8	B	A	明白色	95%	S D34(41-16G)。瀬戸。内外面淡黄色の釉
31	折縁深皿		5.3		H	A	黄白色		S D34。瀬戸。内面に鉄輪具で文様描出
32	須恵高台鉢		2.2	(10.0)	B C片	A	灰色	30%	S D38No.1 (37-14G)。未野産。底部回転ヘラケズリ
33	須恵壺	(32.0)	6.4		針	A	青灰色	10%	S D43(46-11・12G)。南比企産
34	須恵皿		1.5	(6.2)	B片	A	茶褐色	20%	S D43(48-10G)。未野産
35	灰輪小皿	(11.0)	1.9		B C	A	黄灰色	10%	S D43(45-12・46-12G)。瀬戸
36	平瓦				B片	A	青灰色		S D43(45-12・46-12G)。凸面叩き。凹面布目

(7) 土壌

A区からは210基の土壌が検出された。形態的には円形、楕円形、方形、長方形、超長方形、不整形に分かれる。時期的には古代、中世、近世以降に大分される。

特徴的な土壌として長方形または超長方形土壌を挙げることができる。超長方形土壌は概ね短辺に対する長辺の比率が1:4を超えるものを宛てたが、これらの土壌は群集する傾向があり、互いに平行または直交する例が多い。埋土は底面直上に黒色土の薄い層が堆積し、その上部はロームブロックが混在する埋め戻し土で構成されるものが多い。浅間A軽石を多量に含むものではなく、中世の竪穴状遺構に切られるものと切るものの両者が認められた。おそらく、竪穴状遺構の存続時期と重なるものと推定され

る。機能的に従来竪穴、あるいは墓塚ではないかといわれたものであるが、墓塚との証拠は得られず、用途は不明である。

A区第1号土壌(第275図)

A区第1号土壌は、46・47-7グリッドに位置し、重複する第5号住居跡を切っている。

調査区外に掛かるため平面形態は不明であるが、長方形を意識した形態となろう。残存規模は長径1.20m、短径0.90m、深さ0.67mである。埋土は第1~3層がローム粒子混じりの褐色土、第4層がロームブロックと褐色土の混土层である。掘立柱建物跡埋土に類似するが、建物との確認は得られなかった。出土遺物はない。時期は不明であるが、古代と思われる。

A区第2号土壌 (第257図)

A区第2号土壌は、47-8グリッドに位置する。平面形態は円形で、規模は長径1.40m、短径1.20m、深さ0.10mである。埋土はローム粒子を多量に含む黒褐色土単層である。

出土遺物はない。時期は不明である。

A区第3号土壌 (第263図)

A区第3号土壌は49-10グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径1.70m、短径1.32m、深さ0.26mである。主軸方位はN-60°-Eを示す。埋土は第1層が浅間A軽石を多量に含む灰褐色土、第2層がローム混じりの黄褐色土である。

出土遺物はない。時期は近世以降と考えられる。

A区第4号土壌 (第261図)

A区第4号土壌は49-10グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径1.25m、短径0.70m、深さ0.10mである。主軸方位はN-0°を示す。埋土はローム混じりの黒褐色土単層である。

出土遺物はない。時期は不明確であるが古代の可能性がある。

A区第5号土壌 (第267図)

A区第5号土壌は49-9グリッドに位置する。平面形態は長楕円形で、規模は長径2.55m、短径0.55m、深さ0.15mである。主軸方位はN-18°-Eを示す。埋土は浅間A軽石混じりの灰褐色土である。出土遺物はない。時期は近世以降と思われる。

A区第6号土壌 (第264図)

A区第6号土壌は49-9グリッドに位置し、重複する第7号土壌よりも新しい。

平面形態は長方形で、規模は長径1.20m、短径0.43m、深さ0.16mである。主軸方位はN-88°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は近世以降であろう。

A区第7号土壌 (第261図)

A区第7号土壌は49-9グリッドに位置し、重複する第6号土壌に切られていた。

平面形態は不整形で、規模は長径0.78m、短径0.53

m、深さ0.13mである。埋土はローム粒子を少量含む黒褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが中世以前と考えられる。

A区第8号土壌 (第275図)

A区第8号土壌は45-10グリッドに位置し、第41・49号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形態は不整形で、規模は長径1.10m、短径0.96m、深さ0.08mである。

出土遺物はない。時期は不明である。

A区第9号土壌 (第275図)

A区第9号土壌は44-12グリッドに位置する。第39号掘立柱建物跡と第182号土壌と重複するが、大半は町教育委員会調査区にあり、新旧関係は不明。

平面形態は不整形で、規模は長径1.75m、短径1.26m、深さ0.75mである。

出土遺物はなく、時期は不明である。

A区第10号土壌 (第275図)

A区第10号土壌は46-7グリッドに位置し、重複する第5号住居跡よりも新しい。

平面形態は不整形で、規模は長径0.78m、短径0.58m、深さ0.77mである。埋土は第3・4層が第1号土壌と共通、第5・6層はローム粒子・黒色土ブロック混じりの褐色土である。

遺物は土師器坏(第282図161-164)と須恵器甕(165)が出土しているが、第5号住居跡からの混入と見るべきかもしれない。時期は熊野I期以降と考えられる。

A区第11号土壌 (第257図)

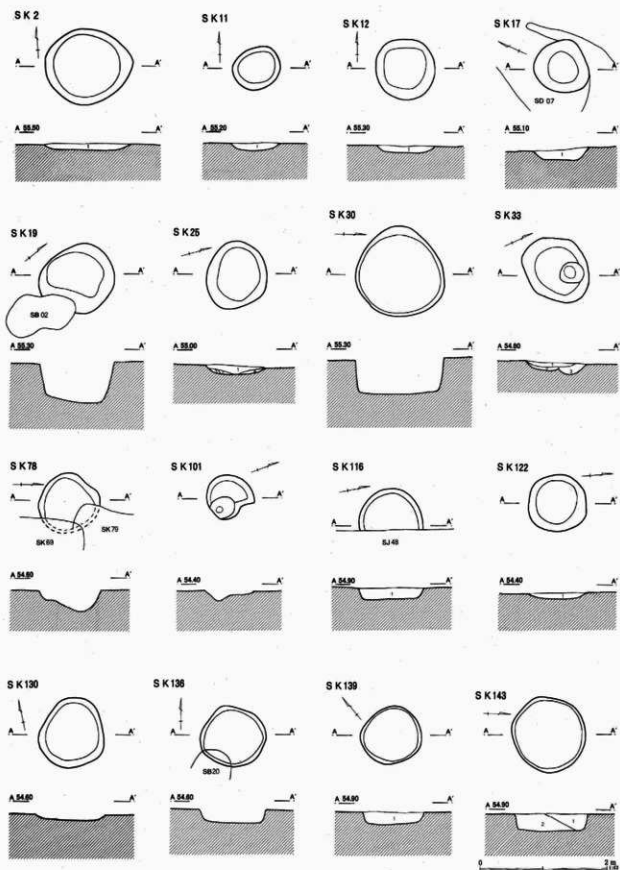
A区第11号土壌は49-10グリッドに位置する。平面形態は円形で、規模は長径0.80m、短径0.70m、深さ0.10mである。埋土は黒色土とロームブロック混じりの褐色土である。

出土遺物はなく、時期は不明である。

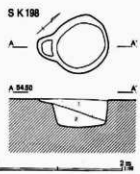
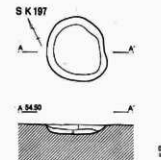
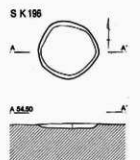
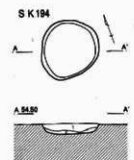
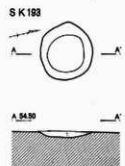
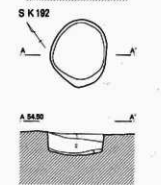
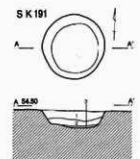
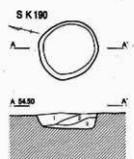
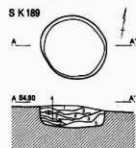
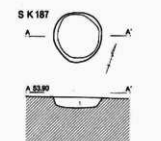
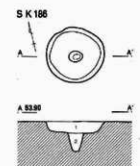
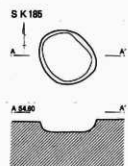
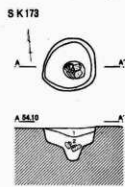
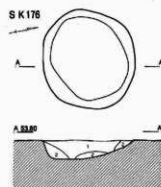
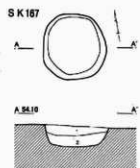
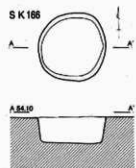
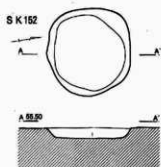
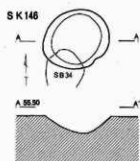
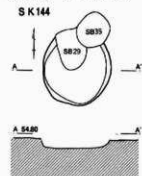
A区第12号土壌 (第257図)

A区第12号土壌は49-9グリッドに位置する。

第257图 A区土壤(1)



第258图 A区土壤(2)



0 2m

平面形態は円形で、規模は長径0.95m、短径0.90m、深さ0.10mである。埋土は浅間A軽石を多量に含む灰褐色土である。

出土遺物はない。時期は近世以降と考えられる。

A区第13号土壌 (第262図)

A区第13号土壌は49-10グリッドに位置し、重複する第4号溝よりも古い。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.18m、短径0.75m、深さ0.23mである。主軸方位はN-69°-Eを示す。埋土は第1層が炭化物粒子を多量に含む黒褐色土、第2層が黄褐色土である。

出土遺物はない。時期は近世後期以前である。

A区第14号土壌 (第259図)

A区第14号土壌は37-14グリッドに位置し、重複する第26号溝よりも新しい。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.12m、短径0.72m、深さ0.10mである。主軸方位はN-57°-Eを示す。

出土遺物は底面よりもやや浮いた位置に礫が敷き詰められたような状況で出土した。時期は近世以降と推定される。

A区第15号土壌 (第259図)

A区第15号土壌は39-11グリッドに位置し、重複する第33号溝よりも新しい。

平面形態は円形で、規模は長径0.62m、短径0.62m、深さ0.17mである。

出土遺物は第14号土壌と同様礫が出土した。時期は近世後期以降と考えられる。

A区第16号土壌 (第260図)

A区第16号土壌は48-49-10グリッドに位置し、第8号溝跡に上面を削平されていた。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.16m、短径0.98m、深さ0.40mである。主軸方位はN-15°-Eを示す。

出土遺物は天目茶碗(第276図1)小片が出土している。時期は近世後期以前、16世紀中心か。

A区第17号土壌 (第257図)

A区第17号土壌は49-10グリッドに位置し、第7号溝跡に切られている。平面形態は円形で、規模は長径0.86m、短径0.82m、深さ0.16mである。埋土はローム・焼土粒子混じりの黒褐色土である。

出土遺物はない。時期は不明確であるが、近世後期以前である。

A区第18号土壌 (第261図)

A区第18号土壌は49-11グリッドに位置する。第13号住居跡カマド上面を削平していた。平面形態は楕円形で、規模は長径2.16m、短径0.90m、深さ0.15mである。主軸方位はN-78°-Wを示す。

出土遺物は須恵器蓋(第276図2)が出土しているが、混入であろう。時期は熊野V期後半~VI期以降と考えられる。

A区第19号土壌 (第257図)

A区第19号土壌は47-8グリッドに位置し、第7号住居跡よりも新しく、第2号掘立柱建物跡との関係は不明である。平面形態は円形で、規模は長径1.20m、短径1.12m、深さ0.64mである。

遺物は土師器環(第276図3)が出土しているが、第7号住居跡からの混入であろう。時期は熊野III期以降と考えられる。

A区第20号土壌 (第261図)

A区第20号土壌は47-9-10グリッドに位置し、重複する第9号住居跡よりも新しい。平面形態は楕円形で、規模は長径1.10m、短径1.04m、深さ0.25mである。主軸方位はN-52°-Wを示す。

遺物は肥前系の兵器手碗(第276図5)が出土している。内外面及び底部にも釉が掛かる。時期は出土遺物から17世紀頃と考えられる。

A区第21号土壌 (第264図)

A区第21号土壌は47-10グリッドに位置し、第9号住居跡を切っている。平面形態は長方形で、規模は長径1.10m、短径0.58m、深さ0.15mである。主軸方位はN-55°-Eを示す。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土である。

出土遺物はない。時期は熊野II期以降と考え

られる。

A区第22号土壌 (第270図)

A区第22号土壌は49-11グリッドに位置し、重複する第7・8号溝跡よりも古い。平面形態は長方形で、規模は長径3.70m、短径1.08m、深さ0.21mである。主軸方位はN-66°-Wを示す。埋土は白色粒子・ロームブロック混じりの暗褐色土である。

遺物は須恵器高台碗が出土している。(第276図6・7)が、第23号土壌から出土した可能性もある。時期は不明確であるが、中世以降のものか。

A区第23号土壌 (第270図)

A区第23号土壌は49-11グリッドに位置し、重複する第7・8号溝跡よりも古い。平面形態は超長方形で、規模は長径4.50m、短径0.90m、深さ0.27mである。主軸方位はN-75°-Wを示す。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土である。

出土遺物は須恵器環と高台皿(第276図8・9)が出土しているが混入の可能性がある。時期は中世段階と推定される。

A区第24号土壌 (第262図)

A区第24号土壌は49-11グリッドに位置し、重複する第25号土壌に切られていた。平面形態は楕円形で、規模は長径1.65m、短径0.95m、深さ0.15mである。主軸方位はN-83°-Wを示す。埋土はロームブロックと炭化物を含む黒色土である。

出土遺物はない。時期は不明であるが近世後期以前と思われる。

A区第25号土壌 (第257図)

A区第25号土壌は49-11グリッドに位置し、重複する第24号土壌を切っていた。

平面形態は円形で、規模は長径1.10m、短径0.95m、深さ0.14mである。埋土は第1・2層がローム粒子混じりの暗褐色土、第3層が暗褐色土ブロック混じりの褐色土である。

出土遺物はない。時期は近世後期以前と思われる。

A区第26号土壌 (第262図)

A区第26号土壌は49-10グリッドに位置し、重複

する第7・8号溝跡に上面を削平されていた。平面形態は楕円形で、規模は長径1.75m、短径1.15m、深さ0.20mである。主軸方位はN-22°-Eを示す。

出土遺物はない。時期は近世後期以前である。

A区第27号土壌 (第267図)

A区第27号土壌は49-11グリッドに位置し、東半は調査区外に延びている。重複する第7・8号溝跡に上面を削平されている。平面形態は長方形で、規模は長径1.96m、短径0.68m、深さ0.28mである。主軸方位はN-72°-Wを示す。

出土遺物はない。時期は近世後期以前、おそらく中世段階のものであろう。

A区第28号土壌 (第264図)

A区第28号土壌は48-10グリッドに位置し、重複する第43号溝跡に上面を削平されていた。平面形態は不整長方形で、規模は長径1.56m、短径0.64m、深さ0.19mである。主軸方位はN-28°-Eを示す。埋土はローム粒子を少量含む黒褐色土である。

遺物は土師器環(第276図10)と土師器甕(11)が出土している。時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

A区第29号土壌 (第267図)

A区第29号土壌は調査区南東端部の50-11グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径2.47m、短径1.20m、深さ0.19mである。主軸方位はN-6°-Eを示す。

出土遺物はない。時期は不明であるが、中世以降と推定される。

A区第30号土壌 (第257図)

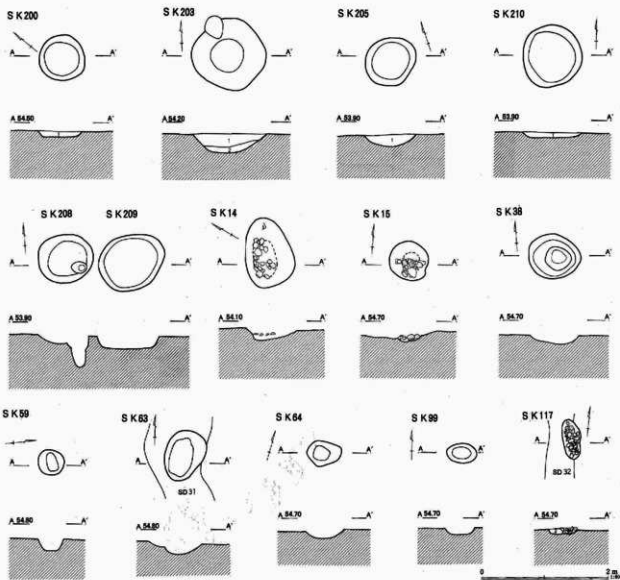
A区第30号土壌は49-9グリッドに位置し、重複する第4号溝跡よりも古い。平面形態は円形で、規模は長径1.45m、短径1.41m、深さ0.60mである。埋土は黒色土ブロック混じりの暗褐色土である。

出土遺物はない。時期は近世後期以前である。

A区第31号土壌 (第264図)

A区第31号土壌は48-11グリッドに位置し、重複する第10号溝跡との新旧関係は不明である。平面形態は方形で、規模は長径0.94m、短径0.80m、深さ

第259図 A区土壌(3)



0.42mである。主軸方位はN-90°-Wを示す。埋土はロームブロックを少量含む黒褐色土である。

出土遺物はキセル吸口(第276図12)が出土している。時期は近世以降と考えられる。

A区第32号土壌 (第264図)

A区第32号土壌は48-11グリッドに位置し、重複する第10号溝跡との新旧関係は上面に攪乱があり明確にできなかった。平面形態は長方形で、規模は長径1.06m、短径0.74m、深さ0.26mである。主軸方位はN-22°-Eを示す。埋土は第1層が暗褐色土、第2層が黒褐色土でいずれもロームブロックを少量含む。

出土遺物はない。時期は不明である。

A区第33号土壌 (第257図)

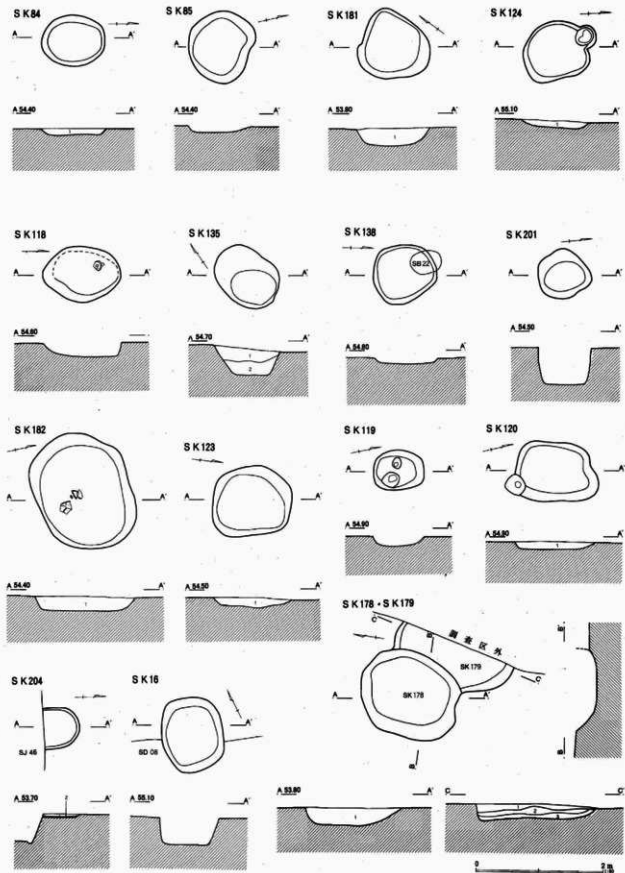
A区第33号土壌は48-11-12グリッドに位置し、重複する第1号溝跡を切っていた。平面形態は円形で、規模は長径1.15m、短径0.96m、深さ0.18m。埋土は第1層がロームブロック混じりの黒褐色土、第2・3層がローム粒子を少量含む褐色から明褐色土である。

出土遺物はない。時期は中世以降と推定される。

A区第34号土壌 (第271図)

A区第34号土壌は45-8-9グリッドに位置し、重複する第23-24号住居跡より新しく、第11号溝よりも

第260图 A区土壤(4)



古い。平面形態は超長方形で、規模は長径5.34m、短径1.06m、深さ0.32mである。N-8°-Eを示す。埋土はロームブロックと黒色土ブロックが霜降り状に混じる暗褐色土で、明らかに埋め戻されたものである。

遺物は土師器環・須恵器環(第276図13~16)が検出されたが、混入である。時期は中世と考えられる。

A区第35号土壌 (第263図)

A区第35号土壌は43-9-10グリッドに位置し、重複する第25号掘立柱建物跡より新しい。平面形態は隅丸方形で、規模は長径2.30m、短径2.10m、深さ0.40mである。主軸方位はN-82°-Wを示す。

底面は平坦で堅く締まっており、竪穴状遺構に類似する。埋土は第1層が黒褐色土、第2層はロームブロックを多量に含む暗褐色土で、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は片口鉢、軒平瓦、土鍾(第276図17~19)が出土している。片口鉢は風化が著しい。軒平瓦は型挽き三重弧文。曲線頸で凹面は布目後、ナデ。凸面は平行叩き、部分的にナデ調整が加わる。軒平瓦は7世紀末~8世紀初頭頃に位置付けられるもので混入資料である。時期は片口鉢の特徴から14世紀前半頃と考えておきたい。

A区第36号土壌 (第270図)

A区第36号土壌は46-9グリッドに位置する。

平面形態は超長方形で、規模は長径4.20m、短径1.08m、深さ0.37mである。主軸方位はN-83°-Wを示す。埋土はロームブロックと黒色土ブロック混じりの褐色土(第2層)埋没後、浅間A軽石を含む暗褐色土が切り込んでいた。

出土遺物はない。時期は中世と推定される。

A区第37号土壌 (第267図)

A区第37号土壌は46-10グリッドに位置する。北側には第66号土壌が主軸を揃えて隣接する。

平面形態は超長方形で、規模は長径2.64m、短径0.73m、深さ0.67mである。主軸方位はN-16°-Eを示す。埋土は底面直上に黒色土が薄く堆積(第2

層)、その後、ロームブロックと黒色土ブロック混じりの褐色土(第1層)で埋め戻されている。

出土遺物はない。時期は中世と推定される。

A区第38号土壌 (第259図)

A区第38号土壌は38-10グリッドに位置する。第31号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形態は円形で、規模は長径0.84m、短径0.70m、深さ0.14mである。

出土遺物は須恵器高台盤(第277図20)と甕(第282図160)が出土しているが伴うか否か不明である。時期は不明である。

A区第39号土壌 (第273図)

A区第39号土壌は45-10グリッドに位置し、第38号住居跡よりも新しく第47・52号土壌を切っている。平面形態は長方形で、規模は長径2.34m、短径1.00m、深さ1.02mである。主軸方位はN-61°-Wを示す。底面は2段に掘り込まれていた。埋土は4層に分かれ、第1・2層は浅間A軽石を多量に含む灰褐色土と暗褐色土、第3・4層はロームブロックを多量に含む黒褐色土で、浅間A軽石は少量含まれていた。

出土遺物はない。時期は近世後期以降となろう。

A区第40号土壌 (第269図)

A区第40号土壌は45-9グリッドに位置する。第44号土壌と平行し、重複する第41・45号土壌を切っている。

平面形態は長方形で、規模は長径2.22m、短径0.64m、深さ0.12mである。主軸方位はN-80°-Wを示す。埋土はロームブロック混じりの褐色土で人為的に埋め戻されている。

出土遺物はない。時期は中世と考えられる。

A区第41号土壌 (第269図)

A区第41号土壌は45-9グリッドに位置する。重複する第24号住居跡よりも新しく、第40・44号土壌及び第11号溝跡に切られていた。

平面形態は長方形で、規模は長径2.82m、短径1.00m、深さ0.24mである。主軸方位はN-12°-E

を示す。

遺物は須恵器高台碗(第277図21)が出土しているが、混入である。時期は中世と考えられる。

A区第42号土壌(第272図)

A区第42号土壌は45-9グリッドに位置し、重複する第43・54号土壌よりも新しい。

平面形態は超長方形で、規模は長径4.48m、短径1.00m、深さ0.44mである。主軸方位はN-78°-Wを示す。埋土は底面直上に黒色土が堆積し(第2層)、その上部はロームブロック混じりの暗褐色土で埋め戻されていた。

遺物は須恵器環・須恵器高台碗・長頸瓶(第277図22-24)が出土したがいずれも混入である。時期は中世と考えられる。

A区第43号土壌(第272図)

A区第43号土壌は45-9グリッドに位置する。重複する第24号住居跡を切り、第42号土壌に切られている。

平面形態は長方形と推定される。残存規模は長径1.50m、短径0.86m、深さ0.15mである。

出土遺物はなかった。時期は中世と推定される。

A区第44号土壌(第269図)

A区第44号土壌は45-9グリッドに位置し、直交して重複する第41・45号土壌を切っていた。

平面形態は長方形で、規模は長径2.50m、短径0.84m、深さ0.37mである。主軸方位はN-87°-Wを示す。埋土は底面直上に黒色土が堆積し(第2層)、その上部はロームブロック混じりの暗褐色土で埋め戻されていた(第1層)。

遺物は土師器有段口縁環が出土している(第277図25)が混入である。時期は中世と考えられる。

A区第45号土壌(第269図)

A区第45号土壌は45-9グリッドに位置する。重複する第40・44号土壌に切られていた。

平面形態は長方形で、規模は長径2.40m、短径0.70m、深さ0.14mである。主軸方位はN-5°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と推定される。

A区第46号土壌(第273図)

A区第46号土壌は45-10グリッドに位置し、長方形土壌群を構成する。重複する第50号住居跡、第62号土壌を切って構築されていた。

平面形態は超長方形で、規模は長径5.48m、短径0.90m、深さ0.84mである。主軸方位はN-86°-Wを指す。埋土は底面直上に黒色土(第8層)、その上部はロームブロック混じりの暗褐色土(第7層)で埋め戻されていた。

遺物は須恵器環・須恵器高盤・砥石(第277図26-28)が出土しているが、いずれも混入である。時期は中世と考えられる。

A区第47号土壌(第273図)

A区第47号土壌は45-10グリッドに位置する。重複する第38号住居跡・第52号土壌を切り、第39号土壌に切られていた。

平面形態は超長方形で、規模は長径4.50m、短径0.92m、深さ0.45mである。埋土は底面直上に黒色土(第6層)、その上部はロームブロック混じりの暗褐色土(第5層)で埋め戻されていた。

出土遺物は第47・52号土壌から須恵器高台皿・長頸瓶、鉄片(第277図29-31)が検出された。高台皿と長頸瓶は混入である。時期は中世と考えられる。

A区第48号土壌(第267図)

A区第48号土壌は47-11・12グリッドに位置する。重複する第59号住居跡を切っている。

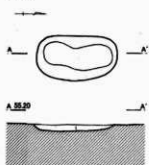
平面形態は長方形で、規模は長径3.10m、短径1.00m、深さ0.24mである。主軸方位はN-77°-Wを示す。埋土は第1~6層は土壌埋没後の掘り込みと見た方がよいであろう。第7層はローム粒子を多量に含む暗褐色土である。

出土遺物は須恵器環・皿・高台碗(第277図32-34)が検出された。32の坯内面には「X」の線刻が刻まれている。遺物は第59号住居跡からの混入であろう。時期は中世以降の可能性が高い。

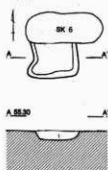
A区第49号土壌(第271図)

第261图 A区土壤(5)

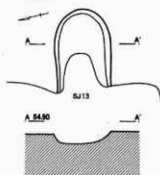
SK 4



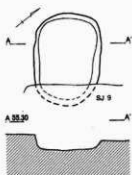
SK 7



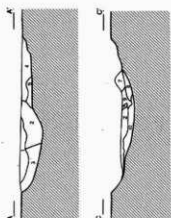
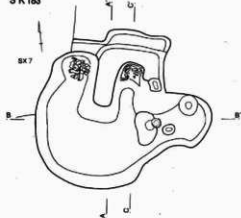
SK 18



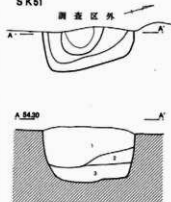
SK 20



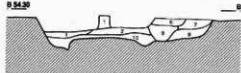
SK 183



SK 51



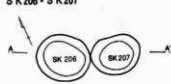
SJ 24



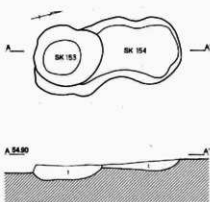
SK 145



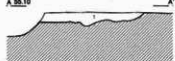
SK 206 - SK 207



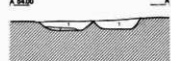
SK 153 - SK 154



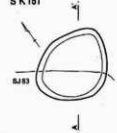
A. SJ 10



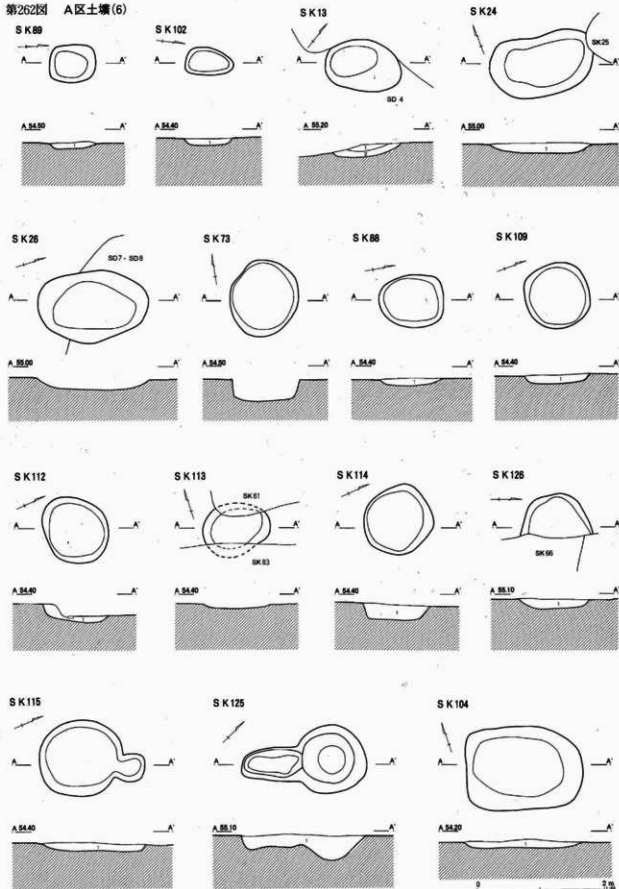
A. SJ 90



SK 151



第262图 A区土壤(6)



A区第49号土壌は46-12グリッドに位置する。重複する第57・60号住居跡を切っていた。

平面形態は超長方形で、規模は長径4.40m、短径0.80m、深さ0.38mである。主軸方位はN-3°-Eを示す。埋土はロームブロック・焼土粒子混じりの暗褐色土単層(第1層)で、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物は須恵器環・高台碗・蓋・皿・長頸瓶、土師器台付甕、土錘(第277図35-42)が検出されているが、混入である。時期は中世と考えられる。

A区第50号土壌(第270図)

A区第50号土壌は46-47-12グリッドに位置する。重複する第60号住居跡、第53号土壌を切っている。第53号土壌は主軸を揃えて直列する。

平面形態は超長方形で、規模は長径4.80m、短径0.90m、深さ0.42mである。主軸方位はN-0°を示す。側壁はややオーバーハング気味に立ち上がる。埋土は底面直上に黒色土(第2層)、その上部はロームブロック混じりの暗褐色土(第1層)で人為的に埋め戻されたものと思われる。

出土遺物は土師器環・暗文環・小型鉢、須恵器環・高台碗・皿・蓋・甕、片口鉢(第277・278図43-55)が検出された。土師器・須恵器は混入。片口鉢は常滑系と考えられ、13世紀代の所産と推定される。時期は中世、出土遺物から13世紀頃と考えておきたい。

A区第51号土壌(第261図)

A区第51号土壌は調査区西端の45-8グリッドに位置し、西半は調査区外に延びている。第20号住居跡と接しており、新旧関係は不明確であるがほぼ同時期かやや古い。第20号住居跡の一部となる可能性もあろうか。

平面形態は方形と推定され、残存規模は長径1.56m、短径0.60m、深さ0.80mである。

出土遺物は土師器甕、須恵器無台碗?(第278図56-57)が出土している。時期は熊野IV-V期が相当と考えられる。

A区第52号土壌(第273図)

A区第52号土壌は45-10グリッドに位置する。重複する第38号住居跡、第62号土壌を切り、第39-42号土壌に切られている。

平面形態は超長方形で、規模は長径5.55m、短径1.02m、深さ0.47mである。主軸方位はN-82°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第53号土壌(第270図)

A区第53号土壌は46-12グリッドに位置する。重複する第57号住居跡を切り、第50号住居跡に切られていた。第50号土壌は主軸を揃えて直列する。

平面形態は長方形で、規模は長径2.28m、短径0.94m、深さ0.70mである。主軸方位はN-0°を示す。

出土遺物は土師器杯、須恵器環・高台碗・蓋・壺・長頸瓶、土錘(第278図58-64)があるが、いずれも混入である。時期は中世と考えられる。

A区第54号土壌(第272図)

A区第54号土壌は45-9グリッドに位置する。重複する第42号土壌に切られていた。

平面形態は長方形と推定され、規模は長径2.15m、短径0.72m、深さ0.11mである。主軸方位はN-72°-Wを指す。

出土遺物はない。時期は中世と考えられる。

A区第55号土壌(第267図)

A区第55号土壌は45-9・10グリッドに位置する。重複する第6号掘立柱建物跡を切っていた。

平面形態は長方形で、規模は長径2.20m、短径0.62m、深さ0.28mである。主軸方位はN-17°-Eを指す。

出土遺物はない。時期は中世と考えられる。

A区第56号土壌(第270図)

A区第56号土壌は44-45-10グリッドに位置する。重複する第6号掘立柱建物跡、第58号土壌を切り、第37号住居跡に切られていた。

平面形態は超長方形で、規模は長径3.92m、短径0.78m、深さ0.50mである。主軸方位はN-0°を

指す。

出土遺物は須恵器蓋・甕・壺がある(第278図65～67)が、いずれも混入である。時期は中世、第37号住居跡との関係から14世紀またはそれ以前となる。

A区第57号土壌(第270図)

A区第57号土壌は44・45-10グリッドに位置する。第56号土壌の東側に平行し、第6号掘立柱建物跡、第58号土壌を切り、第37号住居跡に切られていた。

平面形態は超長方形で、規模は長径3.30m、短径0.70m、深さ0.30mである。主軸方位はN-3°-Eを指す。

出土遺物は須恵器皿がある(第278図68)が、混入である。時期は中世、第37号住居跡との関係から14世紀またはそれ以前となる。

A区第58号土壌(第270図)

A区第58号土壌は45-10グリッドに位置する。重複する第6号掘立柱建物跡を切り、第56-57号土壌に切られている。

平面形態は長方形で、規模は長径3.00m、短径1.05m、深さ0.30mである。主軸方位はN-87°-Wを指す。

出土遺物は須恵器皿がある(第278図69)が、混入である。時期は中世と推定され、第56-57号土壌との関係から14世紀以前となろう。

A区第59号土壌(第259図)

A区第59号土壌は39-11グリッドに位置する。第27号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形態は円形で、規模は長径0.42m、短径0.40m、深さ0.20mである。

出土遺物は土師器の皿(第278図70)と瓦質の壺(第282図159)がある。瓦質の壺は14世紀代に否定される。時期は中世と考えられる。

A区第60号土壌(第264図)

A区第60号土壌は44-10グリッドに位置する。第61号土壌が北側に軸を揃えて直列する。

平面形態は長方形で、北壁際の底面が一段深く掘り込まれている。規模は長径1.28m、短径0.80m、

深さ0.42mである。主軸方位はN-3°-Wを指す。

出土遺物はない。時期は不明確であるが、中世と考えられる。

A区第61号土壌(第271図)

A区第61号土壌は43・44-10グリッドに位置し、第60号土壌の北側に直列する。重複する17号掘立柱建物跡・第131号土壌を切っていた。

平面形態は超長方形で、規模は長径4.98m、短径0.94m、深さ0.40mである。主軸方位はN-1°-Wを指す。

出土遺物はない。時期は中世と考えられる。

A区第62号土壌(第273図)

A区第62号土壌は45-10グリッドに位置する。長方形土壌群の一角にあり、第39・46・52号土壌に切られていた。

平面形態は長方形と推定される。残存規模は長径0.80m、短径0.60m、深さ0.34mである。主軸方位はほぼ座標北を指す。

出土遺物はない。時期は中世と考えられる。

A区第63号土壌(第259図)

A区第63号土壌は39-10グリッドに位置する。第31号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.84m、短径0.60m、深さ0.16mである。

出土遺物は在地系の片口鉢がある(第282図158)。遺物の時期は中世であるが、伴うか否か不明である。

A区第64号土壌(第259図)

A区第64号土壌は39-10グリッドに位置する。第31号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.52m、短径0.40m、深さ0.14mである。

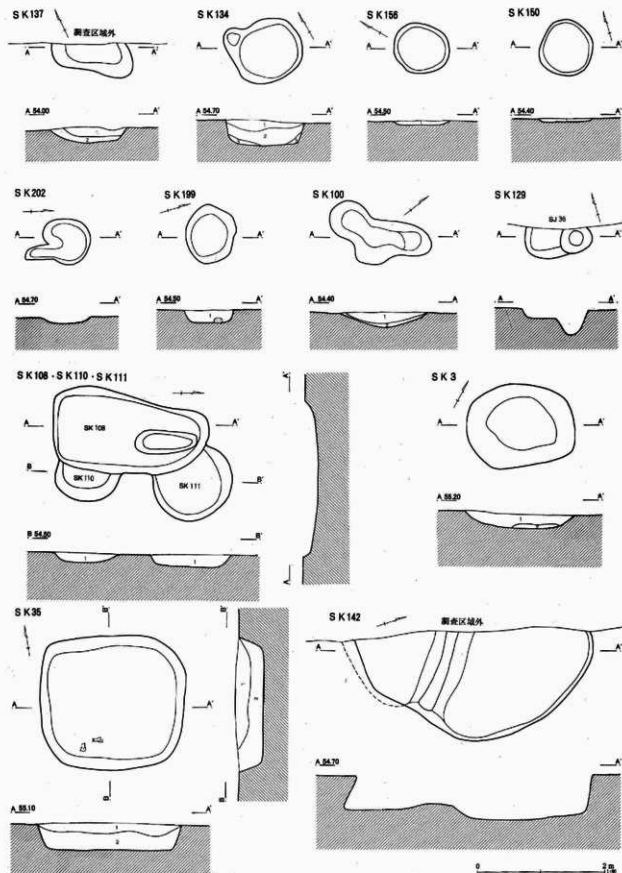
出土遺物はない。時期は中世と考えられる。

A区第65号土壌(第273図)

A区第65号土壌は45・46-10グリッドに位置する。重複する第66・68号土壌を切り、第11号溝跡に切られていた。

平面形態は超長方形で、規模は長径5.15m、短径

第263图 A区土坑(7)



1.00m、深さ0.52mである。主軸方位はN-83°-Wを指す。

出土遺物は須恵器高台碗がある(第278図71)が、混入である。時期は中世と考えられる。

A区第66号土壌 (第273図)

A区第66号土壌は45・46-10グリッドに位置する。重複する第46・65号土壌、第11号溝跡に切られていた。

平面形態は超長方形で、規模は長径3.60m、短径0.80m、深さ0.79mである。主軸方位はN-15°-Eを指す。

出土遺物は常滑焼きの甕胴部片(第278図72)と片口鉢(73)がある。常滑甕は外面に叩き痕が残る。片口鉢は土師質で、内面が黒ずんでいる。14世紀前半頃と推定される。時期は出土遺物から14世紀頃と推定される。

A区第67号土壌 (第264図)

A区第67号土壌は44-10グリッドに位置する。重複する第6号掘立柱建物跡を切り、第37号住居跡に切られていた。

平面形態は方形と推定され、残存規模は長径0.80m、短径0.62m、深さ0.27mである。

出土遺物はない。時期は不明であるが、第37号住居跡との関係から14世紀以前になる。

A区第68号土壌 (第273図)

A区第68号土壌は45・46-10グリッドに位置する。重複第65・66号土壌、第11号溝跡に切られていた。

平面形態は長方形で、規模は長径2.52m、短径0.95m、深さ0.57mである。主軸方位はN-86°-Wを指す。

出土遺物はない。時期は中世と考えられる。

A区第69号土壌 (第274図)

A区第69号土壌は47・48-12・13グリッドに位置する。重複する第78・79号土壌を切っている。南端は調査区外に延びている。

平面形態は超長方形で、規模は長径4.20m、短径0.95m、深さ0.16mである。主軸方位はN-6°-Eを指す。埋土は床面に堅く締まった黒色土が堆積し、

その上部はローム混じりの暗褐色土で埋め戻されていた(第1層)。

出土遺物は須恵器環・高台環、土鍾(第278図74-77)が検出されたが混入である。時期は中世と考えられる。

A区第70号土壌 (第274図)

A区第70号土壌は48-13グリッドに位置し、南部は調査区外に掛かっている。

平面形態は長方形と推定され、残存規模は長径1.22m、短径1.10m、深さ0.20mである。主軸方位はN-11°-Eを指す。埋土は第69号土壌と同様である。

出土遺物は須恵器高台碗と高台皿がある(第279図78・79)が、混入である。時期は中世と考えられる。

A区第71号土壌 (第274図)

A区第71号土壌は47・48-13グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径2.32m、短径0.96m、深さ0.10mである。主軸方位はN-8°-Eを指す。埋土は第69号土壌と同一である。

出土遺物は須恵器高台碗がある(第279図80)が、混入である。時期は中世と考えられる。

A区第72号土壌 (第274図)

A区第72号土壌は47-13グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径2.94m、短径0.80m、深さ0.11mである。主軸方位はN-12°-Eを指す。埋土は第69号土壌と同一である。

出土遺物は須恵器高台皿がある(第279図81)が、混入である。時期は中世と考えられる。

A区第73号土壌 (第262図)

A区第73号土壌は47-14グリッドに位置する。平面形態は円形で、規模は長径1.18m、短径1.02m、深さ0.36mである。

出土遺物はない。時期は不明である。

A区第74号土壌 (第264図)

A区第74号土壌は46・47-14グリッドに位置し、東部は調査区外に延びている。

平面形態は長方形と推定され、規模は長径1.30m、

短径0.82m、深さ0.14mである。主軸方位はN-90°-Wを指す。

出土遺物はない。時期は中世と考えられる。

A区第75号土壌 (第268図)

A区第75号土壌は46-13グリッドに位置する。重複する第76号土壌を切り、第12号溝跡に上部を削平されていた。

平面形態は長方形で、規模は長径2.54m、短径0.92m、深さ0.20mである。主軸方位はN-12°-Eを指す。埋土は第1層がローム混じりの暗褐色土、第2層が黒色土である。

出土遺物は須恵器高台盤がある(第279図82)が、混入である。時期は中世と考えられる。

A区第76号土壌 (第268図)

A区第76号土壌は46-13グリッドに位置する。重複する第75号土壌に切られていた。

平面形態は長方形で、規模は長径2.06m、短径0.96m、深さ0.26mである。主軸方位はN-85°-Wを指す。埋土は第3・4層がロームブロック混じりの暗褐色土、第5層が黒色土で基本的に第75号土壌と類似した土層である。

出土遺物はない。時期は中世と考えられる。

A区第77号土壌 (第267図)

A区第77号土壌は45-46-12グリッドに位置する。重複する第56-57号住居跡を切り、第43号溝跡に上面を削平されていた。

平面形態は超長方形で、規模は長径3.75m、短径0.88m、深さ0.42mである。主軸方位はN-3°-Wを指す。埋土は底面直上に堅く締まった黒色土(第2層)、その上層はローム混じりの暗褐色土が堆積していた(第1層)。

遺物は土師器環・暗文環・甕、須恵器環・高台碗・皿・蓋・長頸瓶・鉢・高盤がある(第279図83-99)が、混入資料である。時期は中世と考えられる。

A区第78号土壌 (第257図)

A区第78号土壌は47-12グリッドに位置する。重複する第69-79号土壌に切られていた。

平面形態は円形で、残存規模は長径0.96m、短径0.80m、深さ0.32mである。

出土遺物はない。時期は不明確であるが、古代に遡る可能性がある。

A区第79号土壌 (第274図)

A区第79号土壌は47-12-13グリッドに位置する。重複する78号土壌を切り、第69号土壌に切られている。

平面形態は長方形で、規模は長径1.56m、短径0.86m、深さ0.20mである。主軸方位はN-10°-Eを指す。埋土は上層にロームブロックを微量含む黒褐色土、下層に暗茶褐色土が堆積していた。

出土遺物はない。時期は中世またはそれ以前と考えられる。

A区第80号土壌 (第272図)

A区第80号土壌は45-13グリッドに位置し、土壌群の一角にある。重複する第82号土壌を切っていた。

平面形態は長方形で、規模は長径3.46m、短径1.04m、深さ0.18mである。主軸方位はN-81°-Wを指す。

遺物は須恵器高台碗と甕がある(第279図100-101)が、混入と思われる。時期は中世と考えられる。

A区第81号土壌 (第272図)

A区第81号土壌は45-13-14グリッドに位置し、重複する第82-113号土壌を切っていた。

平面形態は超長方形で、規模は長径6.72m、短径1.00m、深さ0.25mである。主軸方位はN-90°-Wを指す。

出土遺物は須恵器皿がある(第279図102)が混入である。時期は中世と考えられる。

A区第82号土壌 (第272図)

A区第82号土壌は45-13グリッドに位置する。重複する第83-112号土壌を切り、第80-81号土壌に切られていた。

平面形態は長方形と推定され、規模は長径2.14m、短径0.86m、深さ0.20mである。主軸方位はN-38°

一Eを指す。埋土は第1層がローム混じりの黒褐色土、第2層が堅く締まった黒色土である。

出土遺物はない。時期は中世と考えられる。

A区第83号土壌 (第272図)

A区第83号土壌は45-13グリッドに位置する。重複する112号土壌を切り、第82号土壌に切られていた。

平面形態は長方形で、規模は長径3.04m、短径1.30m、深さ0.22mである。主軸方位はN-76°-Wを指す。埋土は第3層が砂質の強い暗褐色土、第4層がロームブロック混じりの暗褐色土、第5層が黒褐色土である。

出土遺物は須恵器高台碗が検出された(第279図103)が、混入である。時期は中世と考えられる。

A区第84号土壌 (第260図)

A区第84号土壌は46-14グリッドに位置する。重複する第54号住居跡を切っている。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.98m、短径0.78m、深さ0.10mである。主軸方位はN-0°を指す。埋土はローム粒子と炭化物粒子を含む黒褐色土である。

出土遺物はない。時期は不明確であるが、中世の可能性はある。

A区第85号土壌 (第260図)

A区第85号土壌は46-15グリッドに位置する。重複する第86号土壌との関係は不明である。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.12m、短径1.08m、深さ0.11mである。

出土遺物はない。時期は不明である。

A区第86号土壌 (第264図)

A区第86号土壌は46-15グリッドに位置する。重複する第85号土壌との新旧関係は不明である。

平面形態は不整形で、規模は長径0.80m、短径0.76m、深さ0.11mである。埋土は第1層が暗褐色土混じりの黒褐色土、第2層がローム混じりの黒褐色土である。

出土遺物はない。時期は不明である。

A区第87号土壌 (第264図)

A区第87号土壌は46-15グリッドに位置し、南部は調査区外に延びている。

平面形態は不整形で、規模は長径1.24m、短径0.65m、深さ0.08mである。埋土は第86号土壌と同様である。

出土遺物はない。時期は不明である。

A区第88号土壌 (第262図)

A区第88号土壌は46-15グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.00m、短径0.80m、深さ0.09mである。埋土はローム混じりの暗褐色土である。

出土遺物は須恵器高台碗(第279図104)があるが伴うか否か不明である。時期は不明である。

A区第89号土壌 (第262図)

A区第89号土壌は46-15グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.70m、短径0.58m、深さ0.10mである。主軸方位はN-2°-Eを示す。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土である。

出土遺物はない。時期は不明である。

A区第90号土壌 (第268図)

A区第90号土壌は46-15グリッドに位置する。北側には第91号土壌が軸を描いて直列している。

平面形態は長方形で、2基の攪乱によって上面を削平されていた。規模は長径3.32m、短径1.00m、深さ0.20mである。主軸方位はN-12°-Eを示す。

出土遺物はない。時期は中世と考えられる。

A区第91号土壌 (第268図)

A区第91号土壌は46-15グリッドに位置する。重複する第14号溝跡よりも古い。

平面形態は長方形で、規模は長径3.65m、短径0.95m、深さ0.16mである。主軸方位はN-11°-Eを示す。

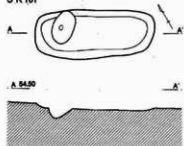
出土遺物はない。時期は中世と考えられる。

A区第92号土壌 (第266図)

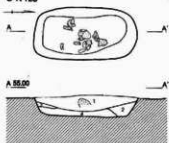
A区第92号土壌は46-15グリッドに位置する。重

第265图 A区土壤(9)

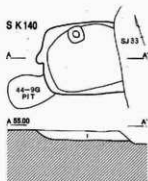
S K 107



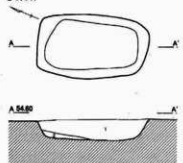
S K 128



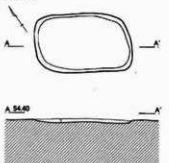
S K 140



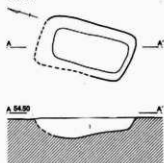
S K 147



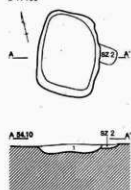
S K 149



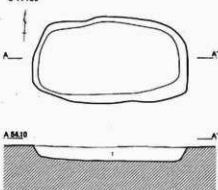
S K 157



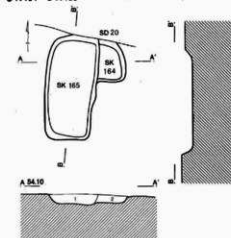
S K 159



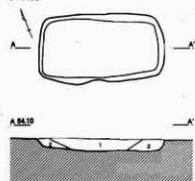
S K 160



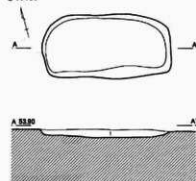
S K 164 S K 165



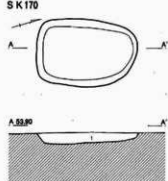
S K 168



S K 169



S K 170



0 3 m

複する第14号溝、第93号土壌よりも古い。

平面形態は長方形で、規模は長径2.46m、短径1.10m、深さ0.35mである。主軸方位はN-66°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第93号土壌 (第266図)

A区第93号土壌は46-15グリッドに位置する。重複する第92号土壌を切っていた。

平面形態は長方形で、規模は長径2.00m、短径1.14m、深さ0.28mである。主軸方位はN-71°-Wを示す。

出土遺物は鉄滓(第279図105)がある。時期は中世と考えられる。

A区第94号土壌 (第267図)

A区第94号土壌は45-46-15グリッドに位置し、重複する第15号溝に切られている。

平面形態は長方形で、規模は長径2.90m、短径1.00m、深さ0.19mである。主軸方位はN-72°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第95号土壌 (第264図)

A区第95号土壌は45-15グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長径1.20m、短径0.75m、深さ0.06mである。主軸方位はN-75°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第96号土壌 (第268図)

A区第96号土壌は45-15グリッドに位置し、重複する第15号溝に切られていた。

平面形態は長方形と推定され、規模は長径2.00m、短径1.05m、深さ0.05mである。主軸方位はN-86°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第97号土壌 (第267図)

A区第97号土壌は45-15グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長径2.54m、短径0.96m、深さ0.40mである。主軸方位はN-68°-W

を示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第98号土壌 (第268図)

A区第98号土壌は45-14グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長径3.38m、短径1.08m、深さ0.28mである。主軸方位はN-80°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第99号土壌 (第259図)

A区第99号土壌は39-11グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.46m、短径0.32m、深さ0.10mである。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第100号土壌 (第263図)

A区第100号土壌は46-15グリッドに位置する。

平面形態は不整形で、規模は長径1.66m、短径0.70m、深さ0.24mである。埋土は暗褐色土を基調とし、第2層にローム粒子が多量に含まれていた。出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第101号土壌 (第257図)

A区第101号土壌は46-15グリッドに位置する。

平面形態は不整形で、規模は長径0.75m、短径0.70m、深さ0.18mである。埋土はローム粒子混じりの暗褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第102号土壌 (第262図)

A区第102号土壌は46-15グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.75m、短径0.42m、深さ0.12mである。主軸方位はN-6°-Wを示す。埋土はローム粒子と黒色土混じりの暗褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第103号土壌 (第274図)

A区第103号土壌は45-12グリッドに位置する。重複する第11・12号掘立柱建物跡よりも新しい。

平面形態は超長方形で、規模は長径5.70m、短径1.10m、深さ0.39mである。主軸方位はN-35°-W

を示す。埋土は底面直上に黒色土、その上部はロームブロック混じりの暗褐色土が堆積していた。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第104号土壌 (第262図)

A区第104号土壌は45-14グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.82m、短径1.32m、深さ0.12mである。主軸方位はN-71°-Wを示す。埋土はロームブロックを少量含む暗褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明であるが中世の可能性はある。

A区第105号土壌 (第271図)

A区第105号土壌は44-45-13グリッドに位置する。第82号土壌の北東側に軸を揃えて直列する。

平面形態は超長方形で、規模は長径4.44m、短径1.10m、深さ0.40mである。主軸方位はN-35°-Eを示す。

遺物は須恵器高台椀、鉄滓(第280図106・107)が出土している。時期は中世と考えられる。

A区第106号土壌 (第268図)

A区第106号土壌は44-45-13グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長径3.05m、短径0.85m、深さ0.38mである。主軸方位はN-6°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第107号土壌 (第265図)

A区第107号土壌は45-13グリッドに位置し、内部にピットが重複していた。

平面形態は長方形で、規模は長径1.85m、短径0.76m、深さ0.12mである。主軸方位はN-60°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第108号土壌 (第263図)

A区第108号土壌は45-13グリッドに位置する。重複する第110・111号土壌よりも新しい。

平面形態は長方形で、規模は長径2.45m、短径1.20m、深さ0.23mである。主軸方位はN-3°-E

を示す。

出土遺物は須恵器高台椀がある(第280図108)が混入であろう。時期は中世と考えられる。

A区第109号土壌 (第262図)

A区第109号土壌は45-13グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.04m、短径1.02m、深さ0.16mである。埋土はローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第110号土壌 (第263図)

A区第110号土壌は45-13グリッドに位置し、重複する第108号土壌に切られている。

平面形態は不整形で、規模は長径1.02m、短径0.64m、深さ0.16mである。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第111号土壌 (第263図)

A区第111号土壌は45-13グリッドに位置し、重複する第108号土壌に切られている。

平面形態は円形で、規模は長径1.25m、短径0.96m、深さ0.20mである。

出土遺物はなかった。時期は不明であるが、古代の可能性はある。

A区第112号土壌 (第262図)

A区第112号土壌は45-13グリッドに位置する。重複する第80・82・83号土壌よりも古い。

平面形態は円形で、規模は長径1.14m、短径0.98m、深さ0.29mである。

出土遺物は須恵器甕(第280図109)がある。時期は中世以前、古代の可能性もある。

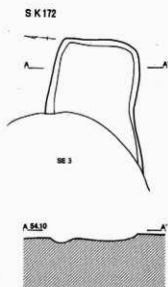
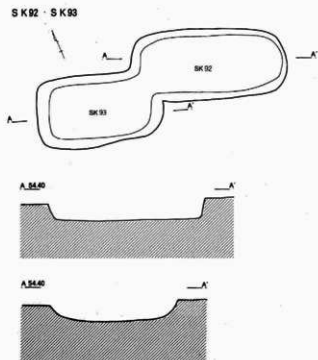
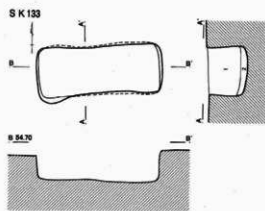
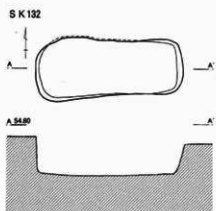
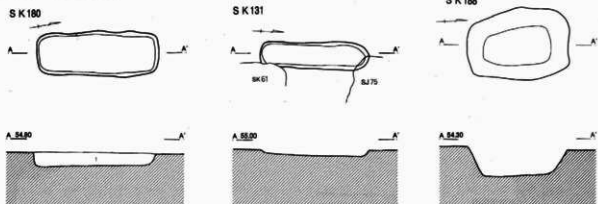
A区第113号土壌 (第262図)

A区第113号土壌は45-13グリッドに位置する。重複する第81・83号土壌に切られている。

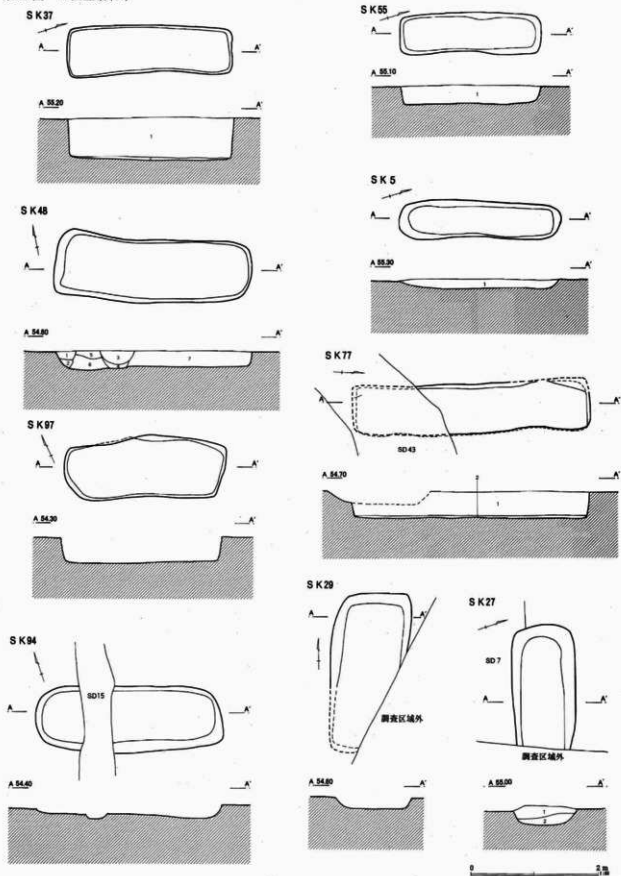
平面形態は円形で、規模は長径1.05m、短径0.40m、深さ0.08mである。

出土遺物はなかった。時期は中世以前、古代の可能性もある。

第266图 A区土壤(10)



第267图 A区土壤(11)



A区第114号土壌 (第262図)

A区第114号土壌は45-13グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.12m、短径1.12m、深さ0.26mである。

出土遺物はなかった。時期は古代の可能性はある。

A区第115号土壌 (第262図)

A区第115号土壌は44-45-13グリッドに位置する。

平面形態は不整形で、規模は長径1.65m、短径1.20m、深さ0.12mである。

出土遺物はなかった。時期は古代の可能性はある。

A区第116号土壌 (第257図)

A区第116号土壌は46-10グリッドに位置する。重複する第48号住居跡上面を削平している。

平面形態は円形で、規模は長径1.00m、短径0.65m、深さ0.20mである。埋土はローム粒子を含む暗褐色土である。

出土遺物は灰釉陶器長頸瓶(第280図110)がある。

時期は熊野Ⅵ～Ⅶ期と考えられる。

A区第117号土壌 (第259図)

A区第117号土壌は39-11グリッドに位置する。重複する第32号溝跡を切っている。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.64m、短径0.30m、深さ0.08mである。主軸方位はN-18°-Wを示す。

出土遺物は小礫が多量に詰まっていた。時期は近世以降と推定される。

A区第118号土壌 (第260図)

A区第118号土壌は46-12グリッドに位置する。重複する第56号住居跡覆土上につくられていた。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.20m、短径0.92m、深さ0.22mである。主軸方位はN-0°を示す。

出土遺物は土師器暗文環・甕、須恵器高台碗・皿(第280図111～114)が出土している。時期は須恵器高台碗と皿から熊野Ⅵ～Ⅶ期と考えておきたい。

A区第119号土壌 (第260図)

A区第119号土壌は45-10グリッドに位置する。重

複する第13号掘立柱建物跡よりも古い。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.80m、短径0.62m、深さ0.16mである。主軸方位はN-12°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世以前、古代の可能性はある。

A区第120号土壌 (第260図)

A区第120号土壌は45-10グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.32m、短径0.94m、深さ0.14mである。主軸方位はN-15°-Eを示す。埋土は焼土粒子を多量に含む褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明確である。

A区第121号土壌 (第264図)

A区第121号土壌は48-14グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長径0.80m、短径0.40m、深さ0.08mである。主軸方位はN-18°-Eを示す。

出土遺物は古銭が5点(第280図115～119)出土している。古銭は北宋銭が2枚、遼銭?が1枚、明銭が2枚である。出土状態は不明確であるが、伴うとすれば墓塚の可能性があろう。時期は15世紀以降である。

A区第122号土壌 (第257図)

A区第122号土壌は45-13グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.90m、短径0.90m、深さ0.08mである。埋土はローム粒子と焼土粒子を少量含む褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第123号土壌 (第260図)

A区第123号土壌は45-46-12グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.24m、短径1.10m、深さ0.12mである。主軸方位はN-18°-Wを示す。埋土は焼土粒子をやや多く含む暗褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが古代の可能性はある。

A区第124号土壌 (第260図)

A区第124号土壌は45-9グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.22m、短径0.94m、深さ0.10mである。主軸方位はN-20°-Wを示す。埋土はローム粒子と焼土粒子を少量含む暗褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが古代の可能性もある。

A区第125号土壌 (第262図)

A区第125号土壌は45-9グリッドに位置する。

平面形態は不整形(鍵穴状)で、規模は長径1.95m、短径1.10m、深さ0.40mである。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土である。

出土遺物は須恵器フラスコ瓶と甕(第280図120・121)が出土している。時期は不明確であるが古代の可能性もある。

A区第126号土壌 (第262図)

A区第126号土壌は46-10グリッドに位置する。重複する第11号溝跡と第66号土壌に切られている。

平面形態は不整形で、規模は長径1.10m、短径0.70m、深さ0.16mである。埋土はローム粒子と火山灰?を少量含む灰褐色土である。

出土遺物はなかった。埋土の状態から時期は中世の可能性もある。

A区第127号土壌 (第268図)

A区第127号土壌は44-10グリッドに位置する。

平面形態は超長方形で、規模は長径3.55m、短径0.65m、深さ0.24mである。主軸方位はN-81°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第128号土壌 (第265図)

A区第128号土壌は43-44-10グリッドに位置する。重複する第16号掘立柱建物跡よりも新しい。

平面形態は長方形で、規模は長径1.60m、短径0.82m、深さ0.34mである。主軸方位はN-0°を示す。埋土は第1層がロームブロックをやや多く含む褐色土、第2・4層はローム粒子を少量含む暗褐色土である。第3層は砂質の強い明褐色土である。

出土遺物は第1層を中心に円礫や片岩、角礫が10

数点まとまって出土した。墓塚の可能性もあるが確証は得られなかった。時期は中世と推定される。

A区第129号土壌 (第263図)

A区第129号土壌は44-10グリッドに位置する。重複する第36号住居跡よりも新しい。

平面形態は不整形で、規模は長径1.02m、短径0.46m、深さ0.16mである。底面にピットが掘り込まれているが、ピットの方が古い。土壌埋土には火山灰が含まれていた。

出土遺物はない。時期は近世以降と考えられる。

A区第130号土壌 (第257図)

A区第130号土壌は35-12グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.10m、短径1.02m、深さ0.09mである。

出土遺物は土師器環・暗文環、須恵器皿・蓋、砥石(第280図122~129)が出土している。時期は不明確であるが、須恵器皿の存在から熊野VI-VII期以降と考えられる。

A区第131号土壌 (第266図)

A区第131号土壌は43-10グリッドに位置する。重複する第75号住居跡を切り、第61号土壌に切られていた。

平面形態は超長方形で、規模は長径1.70m、短径0.40m、深さ0.10mである。主軸方位はN-0°を示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第132号土壌 (第266図)

A区第132号土壌は44-11グリッドに位置し、東側に軸をほぼ揃えて第133号土壌が隣接する。重複する第15号掘立柱建物跡、第5号特殊遺構よりも新しい。

平面形態は長方形で、規模は長径2.32m、短径0.85m、深さ0.62mである。主軸方位はN-88°-Eを示す。

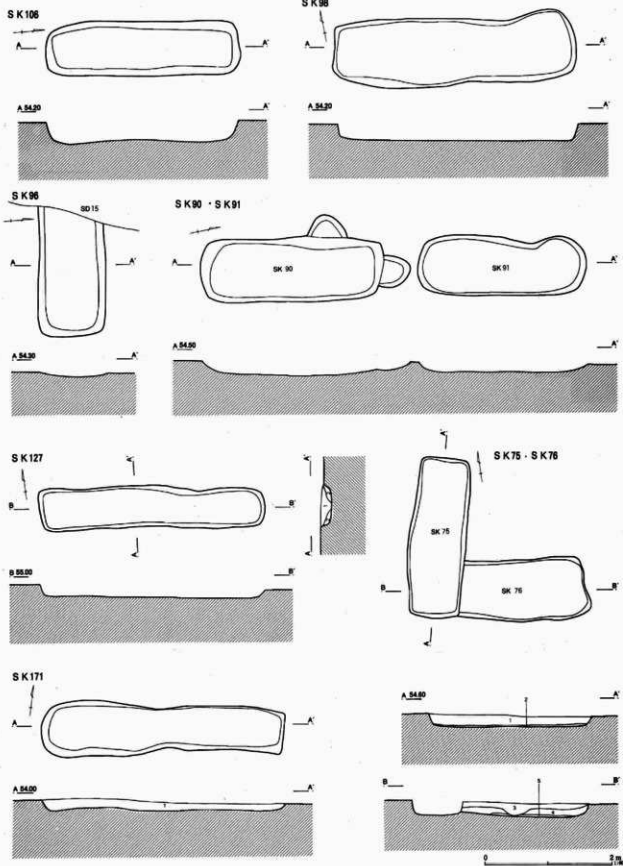
出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第133号土壌 (第266図)

A区第133号土壌は44-11グリッドに位置する。

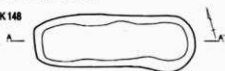
平面形態は長方形で、規模は長径1.98m、短径

第268図 A区土壕(12)

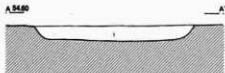


第269图 A区土壤(13)

S K 148



A 94.80



S K 162



A 94.10



S K 163



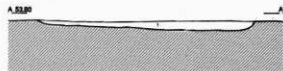
A 94.20



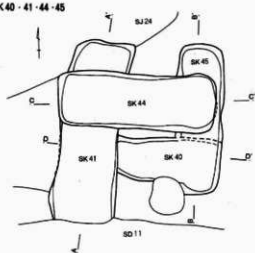
S K 174



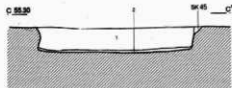
A 93.80



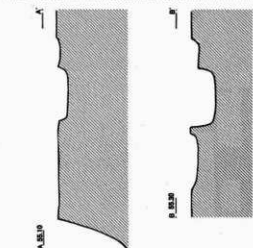
S K 40 - 41 - 44 - 45



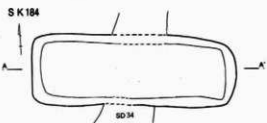
C 95.20



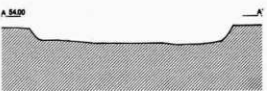
D 95.20



S K 184



A 94.00



0.80m、深さ0.52mである。主軸方位はN-89°-Eを示す。

出土遺物は土師器環(第280図130・131)があるが、混入である。時期は中世と考えられる。

A区第134号土壌(第263図)

A区第134号土壌は44-11グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.27m、短径1.06m、深さ0.40mである。埋土は黒褐色土で、第1層にはロームブロックが多量に含まれていた。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが、古代の可能性もある。

A区第135号土壌(第260図)

A区第135号土壌は44-11グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.10m、短径0.80m、深さ0.45mである。主軸方位はN-13°-Wを示す。埋土は第1層がロームブロック・焼土粒子を多量に含む黒褐色土で、第2層は焼土を少量含む暗褐色土である。

出土遺物は土師器環・小型甕(第280・281図132~134)が出土している。時期は古代の可能性もある。

A区第136号土壌(第257図)

A区第136号土壌は43-11グリッドに位置する。重複する第20号掘立柱建物跡よりも新しい。

平面形態は円形で、規模は長径1.05m、短径0.95m、深さ0.24mである。

出土遺物は須恵器蓋または皿(第281図135)がある。時期は不明確であるが古代の可能性もある。

A区第137号土壌(第263図)

A区第137号土壌は調査区北端の36-16グリッドに位置し、第40号溝跡を切っている。

平面形態は不整形で、規模は長径1.30m、短径0.40m、深さ0.21mである。埋土は第1層が褐色土、第2層はローム混じりの暗褐色土である。

出土遺物は土師器甕、須恵器横瓶がある(第282図156.157)。時期は不明確であるが、古代の可能性もある。

A区第138号土壌(第260図)

A区第138号土壌は43-10グリッドに位置する。重複する第22号掘立柱建物跡よりも新しい。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.00m、短径0.95m、深さ0.10mである。主軸方位はN-27°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが古代の可能性もある。

A区第139号土壌(第257図)

A区第139号土壌は43-9グリッドに位置する。第85号住居跡覆土上部に掘り込まれていた。

平面形態は円形で、規模は長径0.95m、短径0.90m、深さ0.20mである。埋土はローム粒子をやや多く含む黒褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は能野I期以降である。

A区第140号土壌(第265図)

A区第140号土壌は44-9グリッドに位置し、重複する第33号住居跡に切られている。

平面形態は長方形で、規模は長径1.30m、短径1.14m、深さ0.16mである。主軸方位はN-73°-Eを示す。埋土はロームブロックを多量に含む褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は中世の可能性もある。

A区第141号土壌(第271図)

A区第141号土壌は42-14グリッドに位置する。重複する第20号溝跡に切れ、第3号井戸跡よりも新しい。

平面形態は超長方形で、規模は長径5.28m、短径1.26m、深さ0.36mである。主軸方位はN-10°-Eを示す。埋土はロームブロックを多量に含む暗褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第142号土壌(第263図)

A区第142号土壌は42-43-9グリッドに位置する。重複する第85号住居跡床面を掘り下げていた。

平面形態は不整形で、底面は一定しない。側壁はオーバーハングしている部分が認められた。規模は長径3.95m、短径1.73m、深さ0.72mである。埋土

はロームブロック混じりの黒褐色土を基調としており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。住居廃絶後、粘土採掘を目的として再掘削されたものと推定される。

出土遺物は土師器環、須恵器環(第281図136・137)が出土している。時期は須恵器環から熊野Ⅱ期頃と考えておきたい。

A区第143号土壌(第257図)

A区第143号土壌は43-10グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.20m、短径1.16m、深さ0.30mである。埋土は黒褐色土で、第1層にはロームは少なく、第2層には多量に含まれていた。堆積状態はやや不自然である。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが古代の可能性もある。

A区第144号土壌(第258図)

A区第144号土壌は43-10グリッドに位置する。重複する第29・35号掘立柱建物跡よりも新しい。

平面形態は円形で、規模は長径1.20m、短径1.06m、深さ0.16mである。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが古代の可能性もある。

A区第145号土壌(第261図)

A区第145号土壌は43-9グリッドに位置し、重複する第26号住居跡に切られている。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.70m、短径0.68m、深さ0.22mである。主軸方位はN-17°-Eを示す。埋土は焼土粒子を多量に含む黒褐色土である。

出土遺物は土師器環・台付甕、須恵器環・蓋(第281図138-143)が出土している。時期は熊野Ⅲ期頃と考えられる。

A区第146号土壌(第258図)

A区第146号土壌は42-9グリッドに位置し、重複する第34号掘立柱建物跡よりも新しい。

平面形態は円形で、規模は長径1.02m、短径0.92m、深さ0.25mである。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第147号土壌(第265図)

A区第147号土壌は42-11グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長径1.75m、短径1.00m、深さ0.32mである。主軸方位はN-22°-Eを示す。埋土は第1層がロームブロックを多量に含む黒褐色土、第2層がローム混じりの暗褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが、古代の可能性もある。

A区第148号土壌(第269図)

A区第148号土壌は41-42-11グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長径2.54m、短径0.80m、深さ0.26mである。主軸方位はN-73°-Wを示す。埋土はロームブロックを多量に含む暗褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが中世またはそれ以前と考えられる。

A区第149号土壌(第265図)

A区第149号土壌は42-12グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長径1.54m、短径0.95m、深さ0.07mである。主軸方位はN-56°-Eを示す。埋土はローム粒子を少量含む黒褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが中世またはそれ以前と推定される。

A区第150号土壌(第263図)

A区第150号土壌は42-12グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.90m、短径0.82m、深さ0.05mである。埋土は夾雑物をあまり含まない黒褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが中世またはそれ以前と推定される。

A区第151号土壌(第261図)

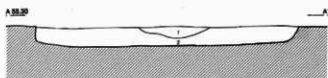
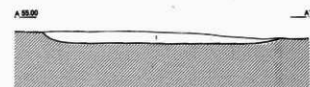
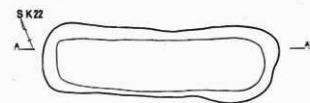
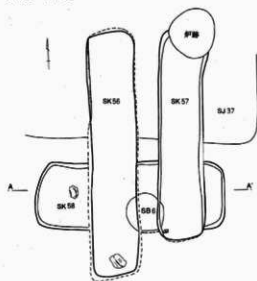
A区第151号土壌は43-9グリッドに位置する。

重複する第83号住居跡よりも新しい。

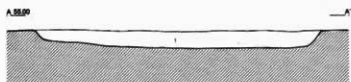
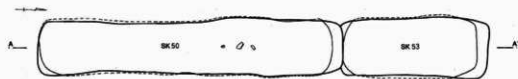
平面形態は不整形円形で、規模は長径1.30m、短径1.06m、深さ0.25mである。埋土はロームブロック

第270图 A区土坑(14)

S K 56 · 57 · 58

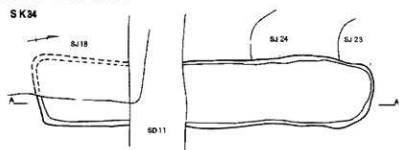


S K 50 · S K 53

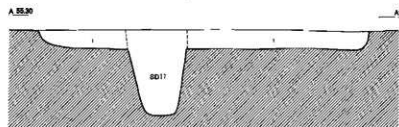


第271图 A区土壤(15)

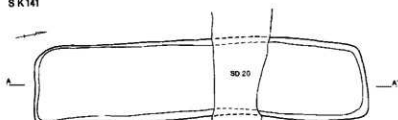
S K 34



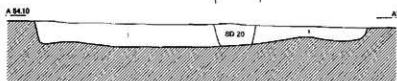
A 55.20



S K 141



A 54.10



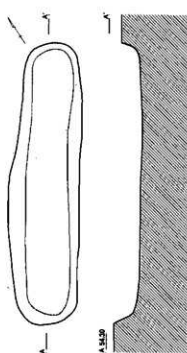
S K 61



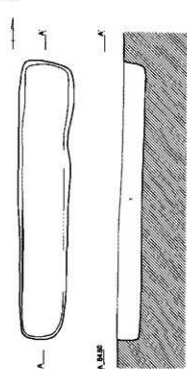
A 55.10



S K 105



S K 48



混じりの暗褐色土で、人為的に埋め戻されたものと思われる。

出土遺物はなかった。時期は熊野Ⅰ期以降となるが詳細は不明である。

A区第152号土壌 (第258図)

A区第152号土壌は43-9グリッドに位置し、第27号住居跡と接している。

平面形態は円形で、規模は長径1.35m、短径1.32m、深さ0.16mである。埋土はローム粒子を少量含む暗褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが古代の可能性もある。

A区第153号土壌 (第261図)

A区第153号土壌は42-9グリッドに位置する。重複する第154号土壌よりも新しい。

平面形態は円形で、規模は長径1.08m、短径1.10m、深さ0.28mである。埋土はロームブロックと焼土を少量含む褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第154号土壌 (第261図)

A区第154号土壌は42-9グリッドに位置する。重複する第153号土壌に切られている。

平面形態は不整形円形で、規模は長径2.34m、短径1.03m、深さ0.12mである。主軸方位はN-8°-Eを示す。埋土はローム粒子を多量に含む暗褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第155号土壌 (第258図)

A区第155号土壌は41-42-11グリッドに位置する。平面形態は円形で、規模は長径0.75m、短径0.70m、深さ0.06mである。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第156号土壌 (第263図)

A区第156号土壌は41-11グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.90m、短径0.82m、深さ0.08mである。埋土はロームブロック混じりの黒褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第157号土壌 (第265図)

A区第157号土壌は42-11グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長径1.48m、短径0.82m、深さ0.30mである。主軸方位はN-2°-Eを示す。埋土はローム粒子と炭化物量子を少量含む暗褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第158号土壌 (第264図)

A区第158号土壌は41-10グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長径1.00m、短径0.52m、深さ0.58mである。主軸方位はN-77°-Eを示す。埋土は火山灰(浅間A軽石)を多量に含む灰褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は近世以降である。

A区第159号土壌 (第265図)

A区第159号土壌は44-15グリッドに位置し、重複する第18号溝跡よりも新しい。

平面形態は長方形で、規模は長径1.32m、短径0.96m、深さ0.11mである。主軸方位はN-20°-Eを示す。埋土はローム粒子とロームブロックを少量含む黒褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は近世後期以前、おそらく中世の所産と推定される。

A区第160号土壌 (第265図)

A区第160号土壌は43-14グリッドに位置し、重複する第18号溝跡を切っていた。

平面形態は長方形で、規模は長径2.45m、短径1.40m、深さ0.24mである。主軸方位はN-88°-Eを示す。埋土はロームブロック混じりの黒褐色土である。

出土遺物は平瓦(第281図144)がある。須恵質で焼きは良い。凸面は平行叩き、凹面は丁寧なナデ、模骨痕が残る。模骨痕部分には布目が見える。側端と凹面側の端部はヘラで調整している。平瓦は7世紀後半～8世紀前半のものと思われ、伴う可能性は低い。時期は不明確であるが、近世後期以前、おそらく

く中世の可能性が高い。

A区第161号土壌 (第274図)

A区第161号土壌は43-15グリッドに位置する。

平面形態は超長方形で、規模は長径5.40m、短径1.30m、深さ0.36mである。主軸方位はN-18°-Eを示す。埋土はロームの多寡により8層に分層されたが、基本的に暗褐色土から黒褐色土で、ロームブロックを多量に含んでいた。不自然な堆積で、明らかに人為的に埋め戻されたことを示している。また、底面には黒色土が薄く堆積していた。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第162号土壌 (第269図)

A区第162号土壌は43-14グリッドに位置する。

平面形態は長楕円形で、規模は長径3.08m、短径0.92m、深さ0.14mである。主軸方位はN-10°-Eを示す。

出土遺物は青磁碗(第281図145)がある。青磁碗は龍泉窯系で、蓮弁が見える。13世紀後半頃のものであろう。時期は中世と考えて良からう。

A区第163号土壌 (第269図)

A区第163号土壌は43-14グリッドに位置する。

平面形態は長楕円形で、規模は長径2.90m、短径0.95m、深さ0.25mである。主軸方位はN-4°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第164号土壌 (第265図)

A区第164号土壌は42-14グリッドに位置する。重複する第20号溝、第165号土壌に切られている。

平面形態は不整形で、規模は長径0.44m、短径0.64m、深さ0.12mである。埋土はロームブロックを多量に含む黒褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第165号土壌 (第265図)

A区第165号土壌は42-14グリッドに位置する。重複する第164号土壌を切り、第20号溝跡に切られている。

平面形態は長方形で、規模は長径1.66m、短径

0.80m、深さ0.16mである。主軸方位はN-6°-Eを示す。埋土はロームブロックを少量含む黒色土である。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第166号土壌 (第258図)

A区第166号土壌は42-14グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.06m、短径1.06m、深さ0.45mである。埋土はロームブロックを多量に含む黒色土である。

出土遺物はなかった。時期は中世と推定される。

A区第167号土壌 (第258図)

A区第167号土壌は42-14グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.04m、短径1.00m、深さ0.35mである。埋土は2層に分層されるが、基本的にロームブロックを多量に含む黒色土を基調としていた。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第168号土壌 (第265図)

A区第168号土壌は41-14、42-14・15グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長径1.96m、短径1.08m、深さ0.18mである。主軸方位はN-67°-Wを示す。埋土は第1層がロームブロックを多量に含む黒色土、第2層がロームを少量含む黒色土である。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第169号土壌 (第265図)

A区第169号土壌は42-15グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長径2.02m、短径1.00m、深さ0.11mである。主軸方位はN-74°-Wを示す。埋土はローム粒を少量含む黒色土である。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

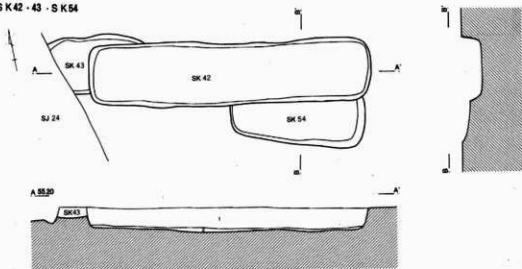
A区第170号土壌 (第265図)

A区第170号土壌は42-15グリッドに位置する。

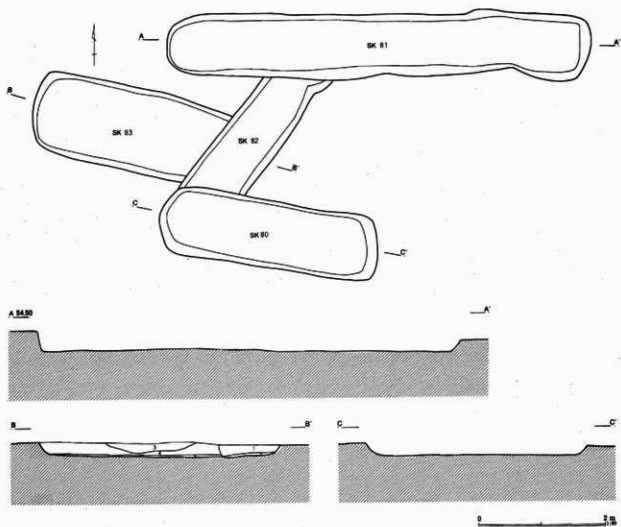
平面形態は長方形で、規模は長径1.60m、短径1.06m、深さ0.09mである。主軸方位はN-15°-Eを示す。埋土はロームを多量に含む黒色土である。

第272图 A区土坑(16)

S K 42 · 43 · S K 54

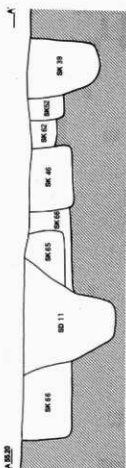
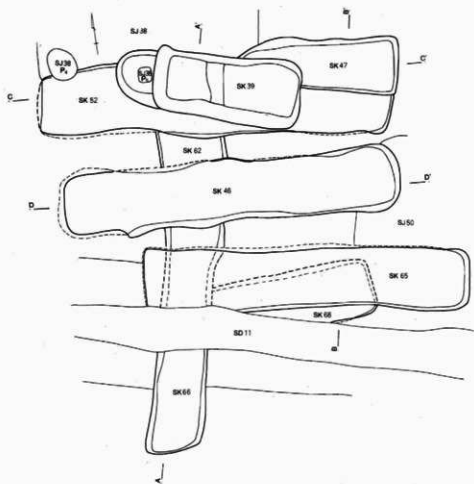


S K 80 · 81 · 82 · 83

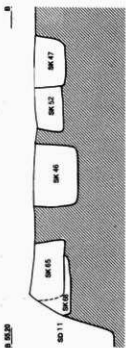


第273图 A区土壤(17)

S K 39 46 47 52 62 65 66 68

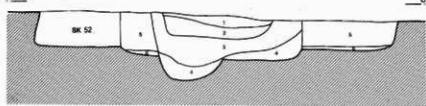


A-A

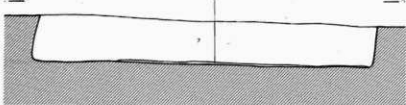


B-B

C 55.10



D 55.20



0 2m

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第171号土壌 (第268図)

A区第171号土壌は40-14グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長径3.85m、短径0.70m、深さ0.16mである。主軸方位はN-85°-Eを示す。埋土はローム粒子と白色砂粒子を多量に含む黒褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は中世以降と推定される。

A区第172号土壌 (第266図)

A区第172号土壌は43-14グリッドに位置する。重複する第3号井戸跡に切られている。

平面形態は長方形で、規模は長径1.90m、短径1.35m、深さ0.13mである。主軸方位はN-87°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世またはそれ以前と考えられる。

A区第173号土壌 (第258図)

A区第173号土壌は43-14グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.94m、短径0.88m、深さ0.53mである。埋土は第1層が火山灰と焼土粒子を含む暗褐色土、第2層がロームブロックを多量に含む黒色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが、近世後期以降まで降る可能性もある。

A区第174号土壌 (第269図)

A区第174号土壌は41-16-17グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長径3.40m、短径1.04m、深さ1.02mである。主軸方位はN-11°-Eを示す。埋土はローム混じりの黒褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第175号土壌 (第264図)

A区第175号土壌は41-17グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長径0.88m、短径0.50m、深さ0.10mである。主軸方位はN-86°-Wを示す。埋土はローム粒子を少量含む黒褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第176号土壌 (第258図)

A区第176号土壌は41-17グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.60m、短径1.48m、深さ0.29mである。埋土は黒色土で、第1層はロームが少なく、第2層には多量含まれていた。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第177号土壌 (第264図)

A区第177号土壌は41-17グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長径0.96m、短径0.50m、深さ0.14mである。主軸方位はN-15°-Eを示す。埋土はロームブロックを多量に含む黒色土である。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第178号土壌 (第260図)

A区第178号土壌は41-17グリッドに位置し、重複する第179号土壌よりも新しい。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.64m、短径1.32m、深さ0.28mである。主軸方位はN-20°-Eを示す。埋土はロームブロックを多量に含む黒色土である。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第179号土壌 (第260図)

A区第179号土壌は41-17グリッドに位置する。重複する第178号土壌に切られていた。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.90m、短径0.48m、深さ0.30mである。主軸方位はN-15°-Eを示す。埋土はローム粒子混じりの黒色土で、下層ほどロームの含有量が多い。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第180号土壌 (第266図)

A区第180号土壌は40-17グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長径1.92m、短径0.70m、深さ0.22mである。主軸方位はN-10°-Eを示す。埋土はローム粒子を多量に含む黒色土である。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第181号土壌 (第260図)

A区第181号土壌は39-17グリッドに位置し、第40号掘立柱建物跡の内部に収まっている。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.12m、短径1.05m、深さ0.28mである。埋土はローム粒子を少量含む黒色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明であるが、中世またはそれ以前と推定される。

A区第182号土壌 (第260図)

A区第182号土壌は44-12グリッドに位置する。重複する第9号土壌との新旧関係は不明である。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.90m、短径1.50m、深さ0.25mである。主軸方位はN-84°-Eを示す。埋土はローム粒子と焼土粒子を少量含む暗褐色土である。

出土遺物は土師器壺(第281図146)がある。時期は熊野Ⅲ期以前と考えられる。

A区第183号土壌 (第261図)

A区第183号土壌は44-13グリッドに位置する。重複する第7号特殊遺構を切っていると捉えたが、一体のものかもしれない。

平面形態は不整形で、底面も一定しない。規模は長径2.80m、短径2.60m、深さ0.52mである。埋土は10層に分かれるが、大きく3つの土壌が複合したような体積状態である。第1~3・10層と第4・5層にはロームの混入が多く、第6~9層には焼土と炭化物が多く含まれていた。

出土遺物は土師器暗文・壺、須恵器坏(第281・282図147-154)が出土している。時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

A区第184号土壌 (第269図)

A区第184号土壌は43-16グリッドに位置する。重複する第34号溝に切られている。

平面形態は長方形で、規模は長径3.22m、短径1.10m、深さ0.30mである。主軸方位はN-85°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

A区第185号土壌 (第258図)

A区第185号土壌は40-11グリッドに位置する。重複する第89号住居跡覆土中に掘り込まれていた。

平面形態は円形で、規模は長径0.90m、短径0.80m、深さ0.21mである。

出土遺物はなかった。時期は中世と思われる。

A区第186号土壌 (第258図)

A区第186号土壌は40-15・16グリッドに位置する。平面形態は円形で、規模は長径0.92m、短径0.88m、深さ0.48mである。埋土はロームブロックと黒色土を多量に含む灰褐色土である。底面にはビット状の掘り込みがあり、ロームの混入が目立つ。

出土遺物はない。時期は不明である。

A区第187号土壌 (第258図)

A区第187号土壌は42-16・17グリッドに位置する。重複する第1号道路状遺構との関係は不明。

平面形態は円形で、規模は長径0.80m、短径0.78m、深さ0.19mである。埋土はロームと黒色土ブロックを含む灰褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第188号土壌 (第266図)

A区第188号土壌は46-11グリッドに位置する。重複する第45号住居跡を切っている。

平面形態は長方形で、規模は長径1.58m、短径1.10m、深さ0.48mである。主軸方位はN-8°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第189号土壌 (第258図)

A区第189号土壌は40-11グリッドに位置する。平面形態は円形で、規模は長径1.06m、短径0.98m、深さ0.32mである。埋土は火山灰と黒色土ブロックを含む暗褐色土である。

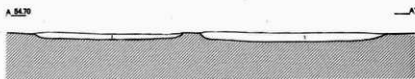
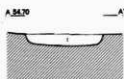
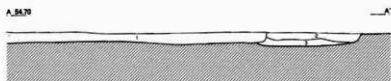
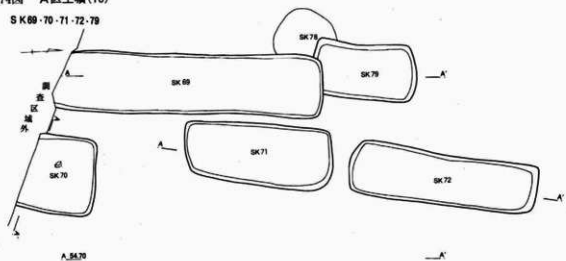
出土遺物はなかった。時期は近世後期以降と推定される。

A区第190号土壌 (第258図)

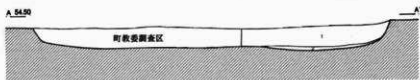
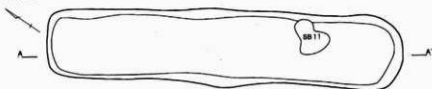
A区第190号土壌は38-11グリッドに位置する。平面形態は円形で、規模は長径0.95m、短径0.85m、

第274图 A区土壤(18)

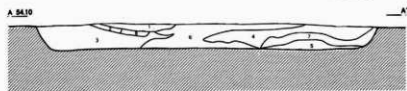
S K 69·70·71·72·79



S K 103



S K 161



深さ0.24mである。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土で第1層にロームが多く含まれていた。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第191号土壌 (第258図)

A区第191号土壌は37-11グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.02m、短径0.96m、深さ0.28mである。埋土は底面直上にローム混じりの黒色土、その上部に褐色土が堆積していた。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第192号土壌 (第258図)

A区第192号土壌は36-37-12グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.04m、短径0.88m、深さ0.36mである。埋土の様相は第191号土壌と同様である。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第193号土壌 (第258図)

A区第193号土壌は36-12グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.90m、短径0.80m、深さ0.08mである。埋土は黒色土とロームブロック混じりの暗褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第194号土壌 (第258図)

A区第194号土壌は36-12グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.98m、短径0.90m、深さ0.16mである。埋土は第1層が焼土混じりの褐色土、第2層が黒色土混じりの暗褐色土である。

出土遺物は土師器模倣坏(第282図155)があるが、伴うか否か不明。時期は不明である。

A区第195号土壌 (第264図)

A区第195号土壌は39-10グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長径1.08m、短径0.46m、深さ0.18mである。主軸方位はN-10°-Eを示す。埋土はローム粒子を多量に含む暗褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は中世の可能性がある。

A区第196号土壌 (第258図)

A区第196号土壌は36-37-12グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.95m、短径0.90m、深さ0.06mである。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第197号土壌 (第258図)

A区第197号土壌は37-12グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.06m、短径0.97m、深さ0.16mである。埋土はローム粒子を多量に含む暗褐色土で、下層により多く含まれていた。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第198号土壌 (第258図)

A区第198号土壌は37-12グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.12m、短径0.95m、深さ0.43mである。埋土は全体にロームブロックが多く含まれ、第1層は褐色土、第2層は暗褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第199号土壌 (第263図)

A区第199号土壌は38-12グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.92m、短径0.76m、深さ0.20mである。埋土は黒色土とロームブロック混じりの褐色土である。

出土遺物は底面から円礫が検出されたのみである。時期は不明である。

A区第200号土壌 (第259図)

A区第200号土壌は38-12グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.72m、短径0.70m、深さ0.05mである。埋土はロームブロックを少量含む暗褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第201号土壌 (第260図)

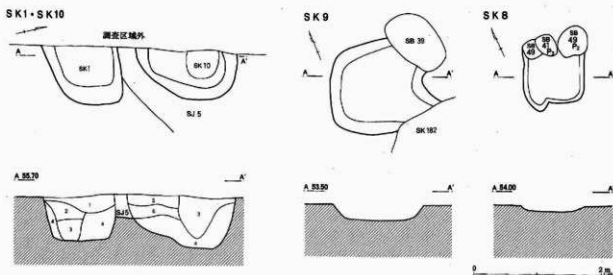
A区第201号土壌は41-10-11グリッドに位置する。

重複する第90号住居跡を切っていた。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.83m、短径0.82m、深さ0.60mである。

出土遺物はなかった。時期は熊野I期以降である。

第275図 A区土壌(19)



A区第202号土壌 (第263図)

A区第202号土壌は38-11グリッドに位置する。

平面形態は不整形で、規模は長径1.10m、短径0.74m、深さ0.11mである。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第203号土壌 (第259図)

A区第203号土壌は37-14・15グリッドに位置する。平面形態は円形で、規模は長径1.14m、短径1.10m、深さ0.30mである。埋土は第1層が暗褐色土、第2層が褐色土で、いずれもロームブロックを多量に含んでいた。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第204号土壌 (第260図)

A区第204号土壌は38-18グリッドに位置する。重複する第46号住居跡に切られている。

平面形態は楕円形と推定され、規模は長径0.64m、短径0.58m、深さ0.06mである。埋土は第1層が焼土粒子を含む暗褐色土、第2層が褐色土である。調査当初は第46号住居跡カマドの可能性も想定したが、断面観察の結果否定された。

出土遺物はなかった。時期は熊野Ⅲ期以前と考えられる。

A区第205号土壌 (第259図)

A区第205号土壌は38-16グリッドに位置し、第1

号掘立柱建物跡内に収まる。

平面形態は円形で、規模は長径0.84m、短径0.72m、深さ0.19mである。埋土はロームブロック混じりの褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第206号土壌 (第261図)

A区第206号土壌は38-16グリッドに位置し、第1号掘立柱建物跡内に収まる。第207号土壌と接している。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.80m、短径0.72m、深さ0.16mである。埋土は第1層がローム混じりの暗褐色土、第2層が褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第207号土壌 (第261図)

A区第207号土壌は38-16グリッドに位置する。第1号掘立柱建物跡内に収まり、第206号土壌と接している。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.78m、短径0.62m、深さ0.16mである。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第208号土壌 (第259図)

A区第208号土壌は38-16グリッドに位置し、第1号掘立柱建物跡内に収まる。

平面形態は円形で、規模は長径0.85m、短径0.78

m、深さ0.52mである。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第209号土壌 (第259図)

A区第209号土壌は38-16グリッドに位置し、第1号掘立柱建物跡に収まる。

平面形態は円形で、規模は長径1.07m、短径0.90

m、深さ0.20mである。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

A区第210号土壌 (第259図)

A区第210号土壌は38-16グリッドに位置する。

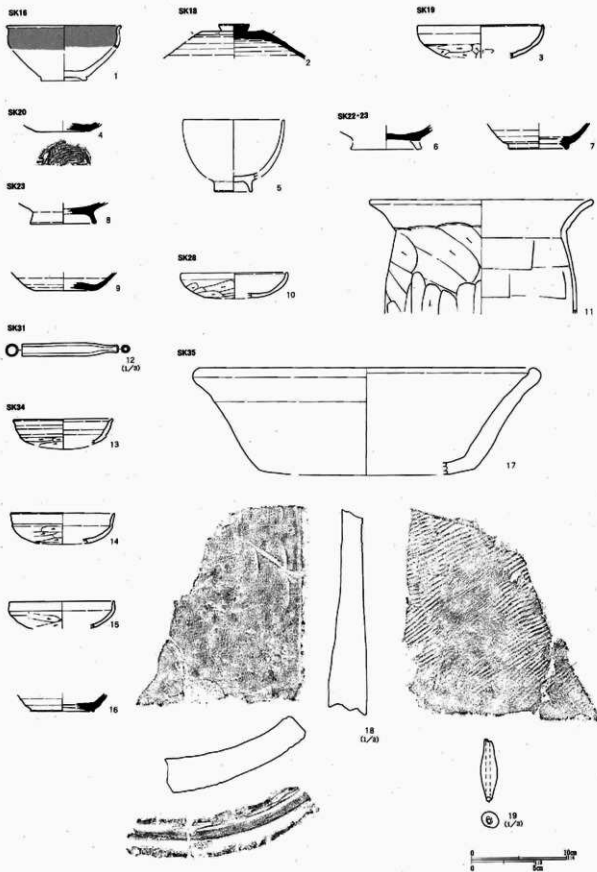
平面形態は円形で、規模は長径1.00m、短径0.92m、深さ0.08mである。埋土はローム粒子を少量含む黒褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

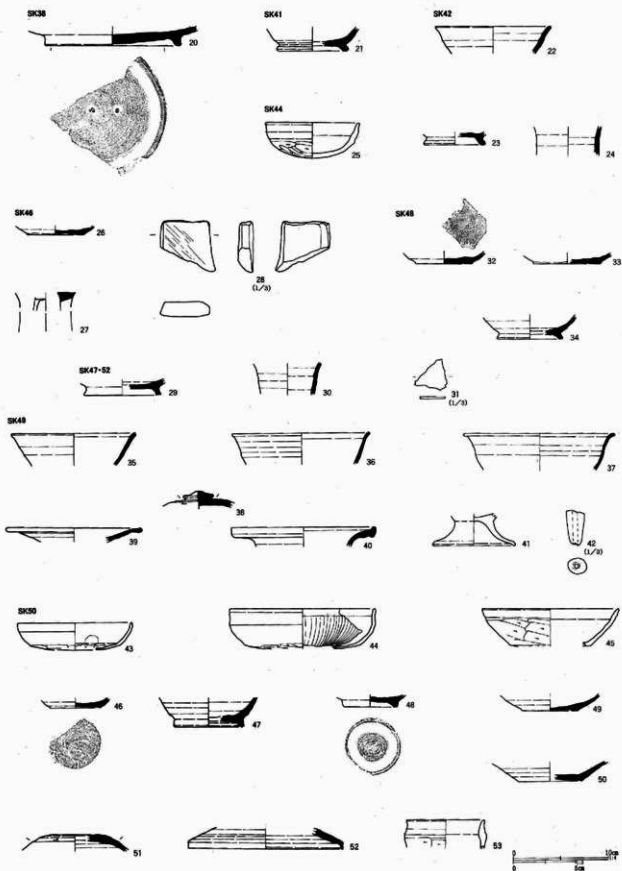
第116表 A区土壌出土遺物観察表(第276~282図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	天目高瀬	(11.8)	2.4			B	淡褐色	5%	SK16 覆土。瀬戸、口縁部両面に鉄粉撒かる
2	須恵蓋		3.8		BCD片	D	灰褐色	70%	SK18 No.1。未野産。天井部回転糸切り後周辺ヘラケズリ
3	土師坏	(13.2)	3.4		ABC	A	淡褐色	15%	SK19 覆土。内外面黒斑あり
4	須恵皿		0.9	(5.6)	BC片	B	明灰色	40%	SK20 No.1。未野産。底部B0手法
5	呉器手皿		2.0	3.8	A	B	黄灰色	90%	SK20 No.4。瀬戸美濃。高台端部砂目積み痕
6	須恵高台輪		1.6		BC片	B	灰色	20%	SK22-23 覆土。未野産。回転糸切り後高台貼付け
7	須恵高台輪		2.6	(6.0)	B片	A	灰色	20%	SK22-23 覆土。未野産。回転糸切り後高台貼付け
8	須恵高台皿		2.2	(6.8)	BD片	D	灰褐色	30%	SK23 覆土。未野産。底部回転糸切り後高台貼付け
9	須恵坏		1.9	(6.0)	B片	A	灰色	30%	SK23 覆土。未野産。底部B0手法
10	土師坏	(11.2)	2.7		BC	A	褐色	30%	SK28 覆土
11	土師甕	23.0	12.0		BC	B	暗褐色	50%	SK28 覆土
12	キセル吸口	SK31 長さ7.6cm。径1.0cm。銅製							
13	土師坏	(10.4)	2.7		BCD	A	明褐色	20%	SK34 覆土
14	土師坏	(10.8)	3.2		BCD	A	明褐色	10%	SK34 覆土
15	土師坏	(11.0)	2.8		ABC	A	明褐色	10%	SK34 覆土
16	須恵坏		1.9	(6.5)	B	A	灰褐色	25%	SK34 覆土。産地不明。底部B0手法
17	片口鉢	(35.2)	11.4		BCD	D	淡褐色	15%	SK35 No.1-No.2。床底。在産片口鉢 内外面剥離
18	軒平瓦				B	A	淡茶褐色		SK35 覆土。三重弧文。瓦当面型挽きと思われる
19	土師	SK35 覆土。長さ4.9cm。最大径1.3cm。重さ6.36g。胎土ABC。焼成A。淡褐色							
20	須恵高台盤		2.1	(14.2)	BD片	D	灰褐色	40%	SK38 覆土。未野産。底部回転ヘラケズリ+高台貼付け
21	須恵高台輪		2.5	(7.2)	BD片	D	褐色	25%	SK41 覆土。未野産。底部回転糸切り後高台貼付け
22	須恵坏	(12.0)	2.9		BC片	B	灰色	5%	SK42 覆土。未野産
23	須恵高台輪		1.4	(6.2)	BD片	D	暗褐色	35%	SK42 覆土。未野産。底部回転糸切り後高台貼付け
24	須恵長頸瓶		3.2		B	A	灰色	15%	SK42 覆土。秋田産か。内外面自然降灰
25	土師坏	(9.8)	3.8		ABCD	A	褐色	45%	SK44 覆土。
26	須恵坏		1.0	(6.0)	B片	B	灰色	10%	SK46 覆土。未野産。底部B0手法
27	須恵高盤		2.0		片	D	褐色	30%	SK46 覆土。未野産。脚部のみ3方透かし
28	磁石	SK46 覆土。長さ4.0cm。重さ26.4g							
29	須恵高台輪		1.3	(7.0)	BC片	B	灰色	20%	SK47-52 未野産。底部回転糸切り後高台貼付け
30	須恵長頸瓶		3.5		B針	A	暗灰色	20%	SK47-52 覆土。南北企業
31	不明鉄製品	SK47-52 残長1.6cm 厚さ0.1cm。板状鉄片							
32	須恵坏		1.4	(6.0)	B片	B	灰色	25%	SK48 覆土。未野産。底部B0手法。内面線刻「X」
33	須恵皿		1.2	(6.8)	B片	B	灰色	25%	SK48 覆土。未野産。底部回転糸切り
34	須恵高台輪		2.6	(6.2)	BC片	C	灰褐色	25%	SK48 覆土。未野産。底部回転糸切り後高台貼付け
35	須恵高台輪	(13.0)	3.4		B片	A	灰色	10%	SK49 覆土。未野産
36	須恵高台輪	(14.4)	3.3		B片	A	灰色	5%	SK49 覆土。未野産
37	須恵高台輪	(15.5)	3.9		B片	A	灰色	5%	SK49 覆土。未野産
38	須恵蓋		1.9		B片	A	灰色	40%	SK49 覆土。未野産。つまみ径3.2cm
39	須恵皿	(14.0)	1.5		B片	A	灰色	5%	SK49 覆土。未野産
40	須恵長頸瓶	(15.0)	2.0		B片	A	黒灰色	15%	SK49 覆土。未野産

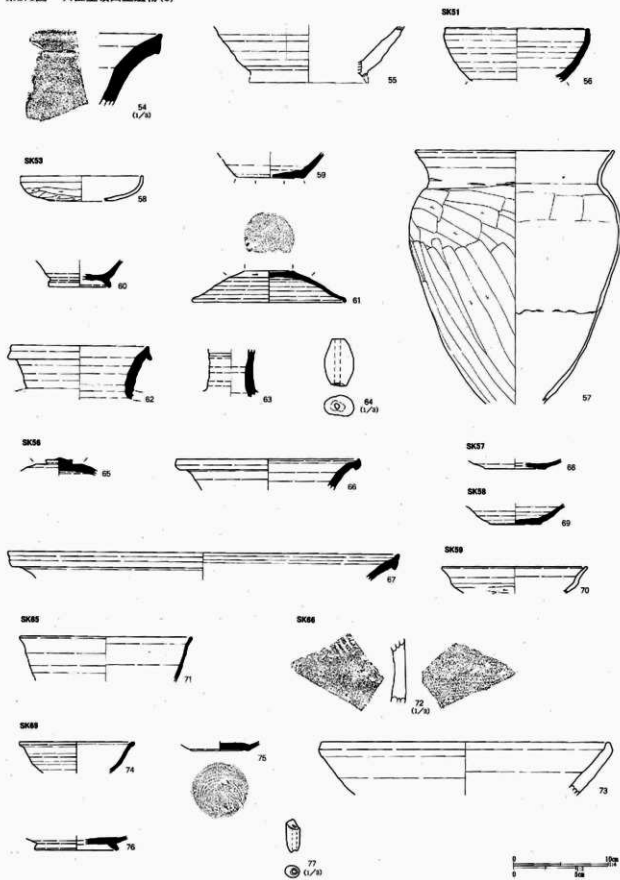
第276图 A区土坑出土遗物(1)



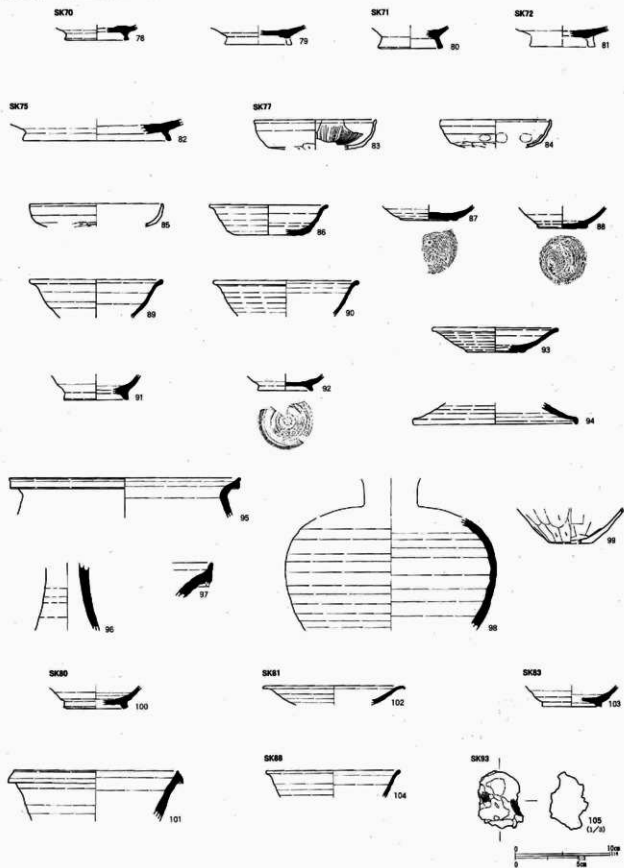
第277图 A区土壤出土遗物(2)



第278图 A区土坑出土遗物(3)

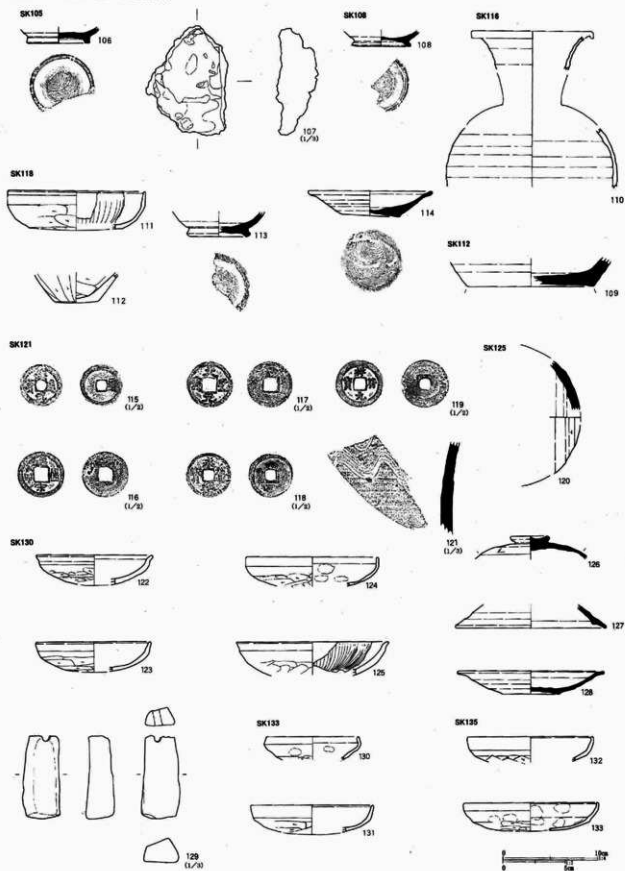


第279图 A区土坑出土遗物(4)

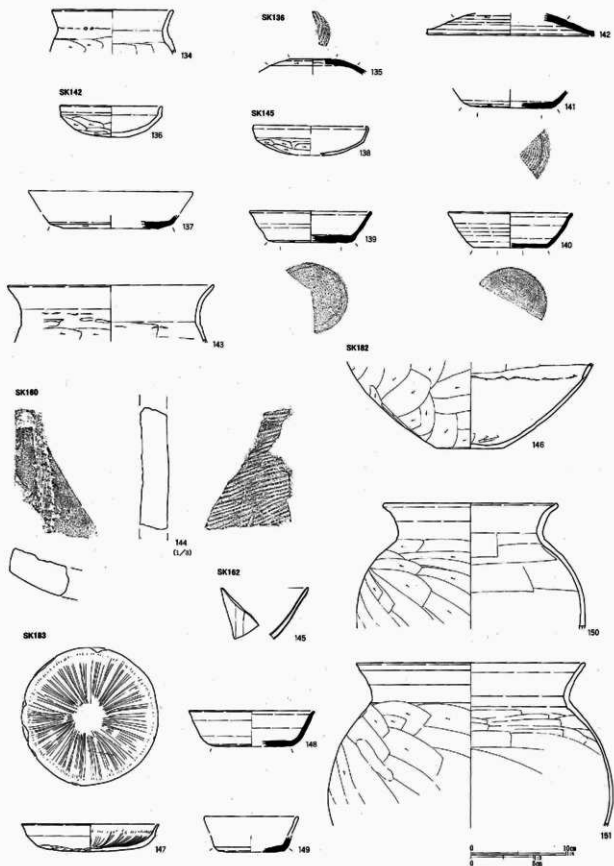


番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
41	土師台付甕		3.4	8.5	A B C	A	褐色	50%	SK49 覆土。胴部のみ
42	土罽	SK49 覆土。重さ4.42g。			胎土 B C D。	焼成 A。	褐色		
43	土罽坏	(12.0)	2.8		A B F	A	淡褐色	20%	SK50 覆土
44	土師暗文坏	(15.2)	4.2		A B C	A	明褐色	20%	SK50 覆土。内面放射暗文(下一上)
45	土罽坏	(14.4)	4.0	(8.4)	B C D	A	明褐色	15%	SK50 覆土
46	須惠坏		1.1	5.4	B 片	B	灰色	75%	SK50 覆土。未野産。底部B0手法
47	須惠高台筒		3.1	7.0	B 片	D	褐色	25%	SK50 覆土。未野産。回転糸切り後高台貼付け
48	須惠高台筒		1.3	5.2	B E 片	B	灰色	90%	SK50 覆土。未野産。底部回転糸切り後高台貼付け
49	須惠皿		1.8	(6.0)	D 片	D	黄灰色	25%	SK50 覆土。未野産。底部B0手法
50	須惠皿		2.0	(6.7)	B 片	B	灰色	20%	SK50 覆土。未野産。底部B0手法
51	須惠蓋		1.8		B 片	B	灰褐色	25%	SK50 覆土。未野産。天井部回転糸切り後回転ヘラケズリ
52	須惠蓋	16.4	2.2		B D 片	C	黄灰色	10%	SK50 覆土。未野産。
53	土師小型鉢	(8.0)	3.0		A B C D	A	明褐色	15%	SK50 覆土
54	須惠壺		5.7		B E 片	A	灰色		SK50 覆土。未野産。
55	片口鉢		5.3		B C	A	明灰色	5%	SK50 覆土。常滑系。内面磨減著しい
56	須惠無台筒?	(15.0)	5.5		C D	B	灰白色	15%	SK51 覆土。未野産が群馬産か。底部回転ヘラケズリ
57	土師甕	(20.8)	27.2		A B C D	A	褐色	40%	SK51 No.1・No.2・No.3。床直
58	土師坏	(12.8)	2.6		A F G	A	褐色	20%	SK53 覆土
59	須惠坏		2.7	(7.0)	B C 片	B	灰褐色	35%	SK53 覆土。未野産。底部B3b手法
60	須惠高台筒		2.9	(6.2)	B D 片	C	乳褐色	30%	SK53 覆土。未野産。底部回転糸切り後高台貼付け
61	須惠蓋	(16.0)	3.3		B D 片	C	灰褐色	30%	SK53 覆土。未野産。天井部回転糸切り後回転ヘラケズリ
62	須惠蓋	(14.3)	5.8		B F	B	灰色	10%	SK53 覆土。未野産
63	須惠長頸甕		5.0		B 片	B	灰色	40%	SK53 覆土。未野産
64	土罽	SK53 覆土。長さ3.8cm。重さ14.65g。			胎土 C D。	焼成 A。	明褐色→淡褐色		
65	須惠蓋		1.8		B 片	A	灰色	40%	SK56 覆土。未野産。天井部回転糸切り後回転ヘラケズリ
66	須惠壺	(19.2)	3.3		B 片	A	灰黑色	10%	SK56 覆土。未野産
67	須惠壺	(41.0)	2.8		B E 片	B	灰褐色	5%	SK56 覆土。未野産
68	須惠皿		1.0	(6.4)	B 片	A	灰色	15%	SK57 覆土。未野産。底部B0手法
69	須惠皿		2.2	(5.4)	B 片	B	灰白色	20%	SK58 覆土。未野産。底部B0手法
70	土罽	(15.2)	2.8		C D F	A	褐色	15%	SK59 覆土
71	須惠高台筒	(18.0)	4.7		B 片	C	褐色	5%	SK65 覆土。未野産
72	常滑甕		5.1		B 片	A	茶褐色		SK66 覆土
73	片口鉢	30.0	5.6		B D	B	黒灰色	5%	SK66 覆土。中世
74	須惠坏	(12.0)	3.3		B 片	B	黄灰褐色	20%	SK69 覆土。未野産
75	須惠坏		1.0	5.8	D E 片	C	灰色	80%	SK69 覆土。未野産。底部B0手法
76	須惠高台坏		1.5	(8.4)	B 片	B	灰白色	20%	SK69 覆土。未野産。底部回転ヘラケズリ後高台貼付け
77	土罽	SK69 覆土。残長2.6cm。重さ2.42g。			胎土 B D。	焼成 A。	淡褐色		
78	須惠高台筒		1.6	(6.0)	B 片	A	灰色	25%	SK70 覆土。未野産。底部回転糸切り後高台貼付け
79	須惠高台皿		1.3		B C 片	B	灰褐色	40%	SK70 No.1。未野産。底部回転糸切り後高台貼付け
80	須惠高台筒		2.4	(6.0)	B D 片	B	褐色	20%	SK71 覆土。未野産。底部回転糸切り後高台貼付け
81	須惠高台皿		1.3		B 片	B	灰色	35%	SK72 覆土。未野産。底部回転糸切り後高台貼付け
82	須惠高台蓋		2.3	(15.3)	B 片	B	灰褐色	10%	SK75 No.1。未野産。底部回転ヘラケズリ後高台貼付け
83	土師暗文坏	(12.8)			B C D	A	褐色	10%	SK77 覆土。内面放射暗文
84	土罽坏	(11.5)	2.9		B C D	A	褐色	15%	SK77 覆土。内面油煙付着
85	土罽坏	(14.0)	2.4		A B C	A	淡褐色	10%	SK77 覆土
86	須惠坏	(12.4)	3.2	(6.7)	B 片	A	灰白色	20%	SK77 覆土。未野産。底部B0手法
87	須惠坏		1.6	6.0	B F 片	A	灰色	40%	SK77 覆土。未野産。底部B0手法
88	須惠坏		2.3	5.2	B D 片	C	褐色	75%	SK77 覆土。未野産。底部B0手法
89	須惠高台筒	(14.0)	4.0		B 片	A	灰色	50%	SK77 覆土。未野産
90	須惠坏	(15.2)	3.8		B C 片	B	灰褐色	10%	SK77 覆土。未野産
91	須惠高台筒		2.7	(6.6)	片	A	灰色	20%	SK77 覆土。未野産。高台貼付け
92	須惠高台筒		1.8	(5.6)	B D E 片	C	灰褐色	75%	SK77 覆土。未野産。底部回転糸切り後高台貼付け
93	須惠皿	(12.8)	2.6	6.0	B F 片	B	灰白色	15%	SK77 覆土。未野産。底部B0手法

第280图 A区土坑出土文物(5)

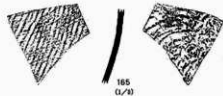
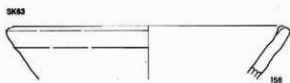
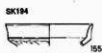
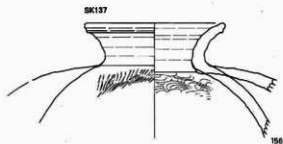
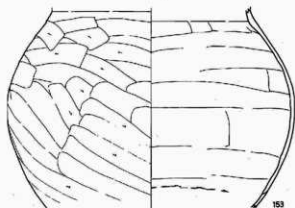
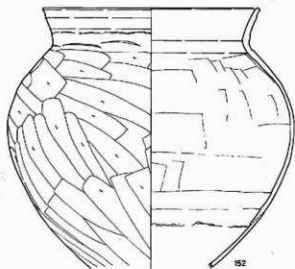


第281图 A区土坑出土遗物(6)



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
94	須恵蓋	(17.0)	2.3		B針	B	淡褐色	10%	SK77 覆土。南比企産
95	須恵鉢	(24.2)	4.2		B E片	A	灰色	10%	SK77 覆土。未野産
96	須恵高盤		7.1		B片	A	灰色	20%	SK77 覆土。未野産。脚部のみ 遺しは不明
97	須恵壺		3.6		B C片	B	淡灰色		SK77 覆土。未野産
98	須恵長頸瓶		11.8		針	A	黄灰色	15%	SK77 覆土。南比企産
99	土師壺		3.8	4.5	B C D	A	褐色	20%	SK77 覆土
100	須恵高台碗		2.4	6.0	B片	B	灰色	25%	SK80 覆土。未野産。底部回転糸切り後高台貼付け
101	須恵壺	(17.6)	5.3		B D E片	C	茶褐色	5%	SK80 覆土。未野産
102	須恵皿	(14.4)	2.0		B片	B	灰色	10%	SK81 覆土。未野産
103	須恵高台碗		2.3	(6.2)	B D片	D	乳褐色	25%	SK83 覆土。未野産。底部回転糸切り後高台貼付け
104	須恵高台碗	(14.0)	2.8		B片	B	灰色	10%	SK88 覆土。未野産
105	鉄滓	SK93 長径4.5cm。短径3.5cm。厚さ3.0cm。重さ52.2g。茶褐色							
106	須恵高台碗		1.7	6.4	C D片	C	褐色	75%	SK105 覆土。未野産。底部回転糸切り後高台貼付け
107	鉄滓	SK105 長径8.4cm。短径6.2cm。厚さ3.3cm。重さ227.9g。暗茶褐色							
108	須恵高台碗		1.7	(5.5)	B片	C	灰色	25%	SK108 覆土。未野産。底部回転糸切り後高台貼付け
109	須恵壺		3.1	13.4	B C E片	B	黄灰褐色	30%	SK112 覆土。未野産。底部ヘラケズリ
110	灰輪長頸瓶	(12.6)	(16.4)		F	A	黄灰色	15%	SK116 覆土。産地不明
111	土師文土環	(14.4)	3.9		B C D	A	褐色	10%	SK118 覆土
112	土師壺		3.1	4.4	A D	A	暗褐色	35%	SK118 覆土
113	須恵高台碗		2.6	(5.8)	D片	D	灰褐色	35%	SK118 覆土。未野産。底部回転糸切り後高台貼付け
114	須恵皿	13.0	2.7	6.1	B片	B	黄灰色	80%	SK118 No.1。未野産。底部B0手法
115	古銭	SK121 洪武通寶か? (明銭 1368年初鋳)							
116	古銭	SK121 皇宋通寶 (北宋銭 1038年初鋳)							
117	古銭	SK121 天慶元寶か? (建銭 1111年初鋳)							
118	古銭	SK121 永樂通寶 (明銭 1408年初鋳)							
119	古銭	SK121 祥符元寶 (北宋銭 1009年初鋳)							
120	須恵横瓶		3.2		B C	A	淡黄灰色	15%	SK125 覆土。湖西産。フラスコ風か
121	須恵壺		7.3		B片	A	灰色		SK125 覆土。未野産。波状文を施す
122	土師環	(12.2)	3.1		B C	A	明褐色	15%	SK130 覆土
123	土師環	(12.0)	3.1		A B C	A	褐色	30%	SK130 覆土
124	土師環	(13.8)	3.1		A B C	A	暗褐色	15%	SK130 覆土
125	土師暗文環	(16.0)	3.5		A C D	A	明褐色	10%	SK130 覆土。内面放射状暗文 外面黒斑あり
126	須恵蓋		2.5		B E片	B	灰色	45%	SK130 覆土。未野産。つまみ径4.2cm
127	須恵壺	(15.6)	2.5		B片	B	青灰色	30%	SK130 覆土。未野産
128	須恵皿	(15.0)	2.5	(6.0)	B E片	A	灰色	40%	SK130 覆土。未野産。底部B0手法
129	磁石	SK130 覆土。長さ6.5cm 重さ53.11g							
130	土師環	(9.6)	2.4		B C	A	明褐色	20%	SK133 覆土
131	土師環	(12.8)	2.9		B C	A	暗茶褐色	15%	SK133 覆土
132	土師環	(13.0)	2.6		A B	A	淡褐色	10%	SK135 覆土
133	土師環	(14.0)	3.0		B C	A	暗褐色	15%	SK135 覆土
134	土師小型壺	(12.6)	4.6		B C	A	褐色	35%	SK135 覆土
135	須恵蓋		1.6		B片	B	黄灰色	25%	SK136 覆土。未野産
136	土師環	10.6	3.3		B C	A	褐色	75%	SK142 覆土。機敏環
137	土師環		1.4	(10.0)	針	A	青灰色	25%	SK142 覆土。南比企産。底部+体部下端回転ヘラケズリ
138	土師環	(11.8)	3.1		B C D	A	褐色	30%	SK145 覆土
139	須恵環	(12.8)	3.3	7.6	B片	B	灰褐色	50%	SK145 覆土。未野産。底部B3b手法
140	須恵環	(13.0)	3.7	7.7	針	B	黄灰色	35%	SK145 覆土。南比企産。底部B3b手法
141	須恵環		1.9	(8.5)	B D片	B	灰褐色	15%	SK145 覆土。未野産。底部B3b手法
142	須恵蓋	(17.4)	2.3		B E片	A	灰褐色	15%	SK145 覆土。未野産。天井部回転ヘラケズリ
143	土師付文壺	(21.6)	6.1		B C D	A	褐色	15%	SK145 覆土
144	平瓦				B	A	灰色		SK160 覆土
145	青磁碗				A	A	淡緑色	10%	SK162 覆土。蓮弁文。龍泉窯系
146	土師壺		9.2	7.2	C D G	A	黄褐色	55%	SK182 No.1.3。外面黒斑あり

第282図 A区土壇出土遺物(7)



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
147	土師暗文環	14.4	2.9		BG	A	暗褐色	100%	SK183 No.1, 内面放射暗文
148	須恵環	(13.2)	3.8	8.2	D片	C	黄灰色	15%	SK183 覆土, 未野産, 底部回転ヘラケズリ
149	須恵環		1.7	7.0	BCD	B	淡灰色	20%	SK183 覆土, 未野か?
150	土師壺	18.0	13.2		BC	A	褐色	40%	SK183 No.2.5.6.7.8.10.13,
151	土師壺	24.0	17.3		BCD	A	明褐色	40%	SK183 No.3.4.21, 内外面黒斑あり
152	土師壺	22.6	20.0		ABC	A	黄褐色	50%	SK183 No.16.17.18.20.22.23.24.25.27.28
153	土師壺		21.3		BCD	B	暗褐色	40%	SK183 覆土, No.11.12.14.15,
154	土師壺		7.5	7.6	CG	A	褐色	30%	SK183 No.15
155	土師模範環	(9.0)	2.3		CD	A	淡褐色	15%	SK194 覆土
156	須恵模範	14.5	12.2		B片	A	黄灰色	35%	SK137 覆土, 未野産
157	土師壺	(22.2)	4.9		AB	A	褐色	10%	SK137 覆土
158	片口鉢	(28.0)	5.5		BD	A	明褐色	10%	SK63 No.7, 在地産, 口縁部欠失
159	壺		3.9	(14.0)	BCD	B	褐色	10%	SK59 No.5, 在地産, 外面ナデ 瓦質
160	須恵壺	(24.5)	5.7		B片	A	灰色	10%	SK38 No.1, 未野産
161	土師環	(11.1)	2.4		CD	A	褐色	5%	SK10 Pit1
162	土師環	(11.2)	3.0		ABCD	A	褐色	10%	SK10 Pit2
163	土師環	(11.4)	2.9		ABDG	A	褐色	10%	SK10 Pit2
164	土師環	(12.6)	2.5		ABC	B	櫻褐色	5%	SK10 Pit1
165	須恵壺		5.8		B片	A	灰色		SK10 Pit2, 未野産

第117表 A区土壌一覽表

番号	位置	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方位	形態	重埋関係・時期
1	46-47-7	1.20	0.90	0.67		不整形	SJ5 熊野I期以降
2	47-8	1.40	1.20	0.10		円形	時期不明
3	49-10	1.70	1.32	0.26	N-60°-E	楕円形	近世以降
4	49-10	1.25	0.70	0.10	N-0°	楕円形	古代か?
5	49-9	2.55	0.55	0.15	N-18°-E	超楕円形	近世以降
6	49-9	1.20	0.43	0.16	N-88°-W	長方形	SK7より新 近世以降
7	49-9	0.78	0.53	0.13		不整形	SK6より古 中世以前
8	45-10	1.10	0.96	0.08		不整形	SB41-49 時期不明
9	44-12	1.75	1.26	0.75		不整形	SR35 SK182 時期不明
10	46-7	0.78	0.58	0.77		不整形	SJ5より新 熊野I期以降
11	49-10	0.80	0.70	0.10		円形	時期不明
12	49-9	0.95	0.90	0.10		円形	近世以降
13	49-10	1.18	0.75	0.23	N-69°-E	楕円形	SD4より古 近世後期以前
14	37-14	1.12	0.72	0.10	N-57°-E	楕円形	SD26より新 近世以降
15	39-11	0.62	0.62	0.17		円形	SK33より新 近世後期以降
16	48-49-10	1.16	0.98	0.40	N-15°-E	楕円形	SD8より古 近世後期以前
17	49-10	0.86	0.82	0.16		円形	SD7より古 近世後期以前
18	49-11	2.16	0.90	0.15	N-78°-W	楕円形	SJ13より新 熊野V期-VI期以降
19	47-8	1.20	1.12	0.64		円形	SJ7より新 SB2 熊野I期以降
20	47-9-10	1.10	1.04	0.25	N-52°-W	楕円形	SJ9より新 SA1 17世紀頃
21	47-10	1.10	0.58	0.15	N-55°-E	長方形	SJ9より新 熊野II期以降
22	49-11	3.74	1.08	0.21	N-66°-W	長方形	SD7-8より古 中世以降か?
23	49-11	4.50	0.90	0.27	N-75°-W	超長方形	SD7-8より古 中世
24	49-11	1.65	0.95	0.15	N-83°-W	楕円形	SK25より古 近世後期以前
25	49-11	1.10	0.95	0.14		円形	SK24より新 近世後期以前
26	49-10	1.75	1.15	0.20	N-22°-E	楕円形	SD7-8より古 近世後期以前
27	49-11	1.96	0.68	0.28	N-72°-W	長方形	SD7-8より古 近世後期以前
28	48-10	1.56	0.64	0.19	N-28°-E	不整形長方形	SD43より古 熊野II期
29	50-11	2.47	1.20	0.19	N-6°-E	長方形	中世以降
30	49-9	1.45	1.41	0.60		円形	SD4より古 近世後期以前
31	48-11	0.94	0.80	0.42	N-90°-W	方形	SD10 近世以降

番号	位置	長さ(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方位	形態	重複関係・時期
32	48-11	1.06	0.74	0.26	N-22°-E	長方形	SD10 時期不明
33	48-12	1.15	0.96	0.18		円形	SD 1より新 中世以降
34	45-8-9	5.34	1.06	0.32	N-8°-E	超長方形	SJ23-24より新 SD11より古 中世
35	43-9-10	2.30	2.10	0.40	N-82°-W	隅丸方形	SK25より新 中世
36	46-9	4.20	1.08	0.37	N-83°-W	超長方形	中世
37	46-10	2.64	0.73	0.67	N-16°-E	超長方形	中世
38	38-10	0.84	0.70	0.14		円形	SD31 時期不明
39	45-10	2.34	1.00	1.02	N-61°-W	長方形	SJ38S D47-52より新 近世後期以降
40	45-9	2.22	0.64	0.12	N-90°-W	長方形	SK41-45より新 中世
41	45-9	2.82	1.00	0.24	N-12°-E	長方形	SJ24より新 SD11-SK40-44より古 中世
42	45-9	4.48	1.00	0.44	N-78°-W	超長方形	SK43-54より新 中世
43	45-9	1.50	0.86	0.15		長方形	SJ24より新 SK42より古 中世
44	45-9	2.50	0.84	0.37	N-87°-W	長方形	SK41-45より新 中世
45	45-9	2.40	0.70	0.14	N-5°-E	長方形	SK40-44より古 中世
46	45-10	5.48	0.90	0.84	N-96°-W	超長方形	SJ50-SK62より新 中世
47	45-10	4.50	0.92	0.45	N-81°-W	超長方形	SJ38-SK52より新 SK39より古 中世
48	47-11・12	3.10	1.00	0.24	N-77°-W	長方形	SJ59より新 中世
49	46-12	4.40	0.80	0.38	N-3°-E	超長方形	SJ57-60より新 中世
50	46-47-12	4.80	0.90	0.42	N-0°	超長方形	SJ60-SK53より新 中世
51	45-8	1.56	0.60	0.80		方形	熊野百間-V期
52	45-10	5.55	1.02	0.47	N-82°-W	超長方形	SJ38-SK82より新 SK39-42より古 中世
53	46-12	2.28	0.94	0.70	N-0°	長方形	SJ57より新 SJ59より古 中世
54	45-9	2.15	0.72	0.11	N-72°-W	長方形	SK42より古 中世
55	45-9-10	2.20	0.62	0.28	N-17°-E	長方形	SB 6より新 中世
56	44-45-10	3.92	0.78	0.50	N-0°	超長方形	SB 6-SK58より新 SJ37より古 中世
57	44-45-10	3.30	0.70	0.30	N-3°-E	超長方形	SB 6-SK58より新 SJ37より古 中世
58	45-10	3.00	1.05	0.30	N-87°-W	長方形	SB 6より新 SK56-57より古 中世
59	39-11	0.42	0.40	0.20		円形	SD27 中世
60	44-10	1.28	0.80	0.42	N-3°-W	長方形	中世
61	43-44-10	4.98	0.94	0.40	N-1°-W	超長方形	SB17 SK131より新 中世
62	45-10	0.80	0.60	0.34	N-0°	長方形	SK39-46-52より古 中世
63	39-10	0.84	0.60	0.16	N-25°-E	横円形	SD31 時期不明
64	39-10	0.52	0.40	0.14		横円形	SD31 中世
65	45-46-10	5.15	1.00	0.52	N-83°-W	超長方形	SK66-68より新 SD11より古 中世
66	45-46-10	3.60	0.80	0.79	N-15°-E	超長方形	SK46-65-SD11より古 中世
67	44-10	0.80	0.62	0.27		方形	SB6より新 SJ37より古 中世
68	45-46-10	2.52	0.95	0.57	N-96°-E	長方形	SK65-66-SD11より古 中世
69	47-48-12・13	4.20	0.95	0.16	N-6°-E	超長方形	SK78-79より新 中世
70	48-13	1.22	1.10	0.20	N-11°-E	長方形	中世
71	47-48-13	2.32	0.96	0.10	N-8°-E	長方形	中世
72	47-13	2.94	0.80	0.11	N-12°-E	長方形	中世
73	47-14	1.18	1.02	0.36		円形	時期不明
74	46-47-14	1.30	0.82	0.14	N-90°-W	長方形	中世
75	46-13	2.54	0.92	0.20	N-14°-E	長方形	SD12より古 SK76より新 中世
76	46-13	2.06	0.96	0.26	N-85°-W	長方形	SK75より古 中世
77	45-46-12	3.75	0.88	0.42	N-3°-W	超長方形	SJ55-56より新 SD43より古 中世
78	47-12	0.96	0.80	0.32		円形	SK69-79より古 古代か?
79	47-12-13	1.56	0.86	0.20	N-10°-E	長方形	SK78より新 SK69より古 中世
80	45-13	3.46	1.04	0.18	N-81°-W	長方形	SK82より新 中世
81	45-13-14	6.72	1.00	0.25	N-90°-W	超長方形	SK82-113より新 中世
82	45-13	2.14	0.86	0.20	N-38°-E	長方形	SK82-112より新 SK80-81より古 中世
83	45-13	3.04	1.30	0.22	N-76°-W	長方形	SK112より新 SK82より古 中世
84	46-14	0.98	0.78	0.10	N-0°	横円形	SJ54より新 中世か?

番号	位置	長さ(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方位	形態	重複関係・時期
85	46-15	1.12	1.08	0.11		楕円形	SK86 時期不明
86	46-47-15	0.80	0.76	0.11		不整形	SK85 時期不明
87	46-47-15	1.24	0.63	0.08		不整形	時期不明
88	46-15	1.00	0.80	0.09		円形	時期不明
89	46-15	0.70	0.58	0.10	N-2°-E	楕円形	時期不明
90	46-47-15	3.32	1.00	0.20	N-12°-E	長方形	中世
91	46-15	3.65	0.95	0.16	N-11°-E	長方形	SD14より古 中世
92	46-15	2.46	1.10	0.35	N-56°-W	長方形	SD14-SK33より古 中世
93	46-15	2.00	1.14	0.28	N-71°-W	長方形	SK92より新 中世
94	45-46-15	2.90	1.00	0.19	N-72°-W	長方形	SD15より古 中世
95	45-15	1.20	0.75	0.06	N-75°-W	長方形	中世
96	45-15	2.00	1.05	0.05	N-80°-W	長方形か?	SD15より古 中世
97	45-15	2.54	0.96	0.40	N-68°-W	長方形	中世
98	45-15	3.84	1.08	0.28	N-80°-W	長方形	中世
99	39-11	0.46	0.32	0.10		楕円形	時期不明
100	46-15	1.66	0.70	0.24		不整形	時期不明
101	46-15	0.75	0.70	0.18		不整形円形	時期不明
102	46-15	0.75	0.42	0.12	N-6°-W	楕円形	時期不明
103	45-12	5.70	1.10	0.39	N-35°-W	超長方形	SB11・12より新 中世
104	45-14	1.82	1.32	0.12	N-71°-W	楕円形	中世か?
105	44-45-13	4.44	1.10	0.40	N-35°-E	超長方形	中世
106	44-45-13	3.05	0.85	0.38	N-6°-E	長方形	中世
107	45-13	1.85	0.76	0.12	N-60°-E	長方形	中世
108	45-13	2.45	1.20	0.23	N-3°-E	長方形	SK110・111より新 中世
109	45-13	1.04	1.02	0.16		円形	時期不明
110	45-13	1.02	0.64	0.16		不整形	SK108より古 時期不明
111	45-13	1.25	0.90	0.20		円形	SK108より古 古代か?
112	45-13	1.14	0.98	0.29		円形	SK80-82-83より古 古代か?
113	45-13	1.05	0.40	0.08		円形	SK81-83より古 古代か?
114	45-13	1.12	1.12	0.26		円形	古代か?
115	44-45-13	1.65	1.20	0.12		不整形	古代か?
116	46-10	1.00	0.65	0.20		円形	SJ48より新 熊野川〜遺期
117	39-11	0.64	0.30	0.08	N-18°-W	楕円形	SK32より新 近世以降
118	46-12	1.20	0.92	0.22	N-0°	楕円形	SJ56より新 熊野川〜遺期
119	45-10	0.80	0.62	0.16	N-12°-E	楕円形	SB13より古 古代か?
120	45-10	1.32	0.94	0.14	N-15°-E	楕円形	時期不明
121	48-14	0.80	0.40	0.08	N-18°-E	長方形	15世紀以降
122	45-13	0.90	0.90	0.08		円形	時期不明
123	45-46-12	1.24	1.10	0.12	N-18°-W	楕円形	古代か?
124	45-9	1.22	0.94	0.10	N-20°-W	楕円形	古代か?
125	45-9	1.95	1.10	0.40		不整形	古代か?
126	45-10	1.10	0.70	0.16		不整形	SD11・SK66より古 中世か?
127	44-10	3.55	0.65	0.24	N-81°-W	超長方形	中世
128	43-44-10	1.60	0.82	0.34	N-0°	長方形	SB16より新 中世
129	44-10	1.02	0.46	0.16		不整形	SK36より新 近世以降
130	35-12	1.10	1.02	0.09		円形	熊野川〜遺期
131	43-10	1.70	0.40	0.10	N-0°	超長方形	SJ75より新 SK61より古 中世
132	44-11	2.32	0.85	0.62	N-88°-E	長方形	SB15-SJ5より新 中世
133	44-11	1.98	0.80	0.52	N-89°-E	長方形	中世
134	44-11	1.27	1.06	0.40		円形	古代か?
135	44-11	1.10	0.80	0.45	N-13°-W	楕円形	古代か?
136	43-11	1.05	0.95	0.24		円形	SB20より新 古代か?
137	36-16	1.30	0.40	0.21		不整形	SD40より新 古代か?

番号	位置	長さ(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方位	形態	重複関係・時期
138	43-10	1.00	0.95	0.10	N-27°-W	楕円形	SR22より新 古代か?
139	43-9	0.95	0.90	0.20		円形	SJ85より新 熊野I期以降
140	44-9	1.30	1.14	0.16	N-73°-E	長方形	SJ33より古 中世
141	42-14	5.28	1.26	0.36	N-10°-E	超長方形	SD20より古 SE3より新 中世
142	42-43-9	3.95	1.73	0.72		不整形	SJ85より新 枯採 古代
143	43-10	1.20	1.16	0.30		円形	古代か?
144	43-10	1.20	1.06	0.16		円形	SR29-35より新 古代か?
145	43-9	1.70	0.68	0.22	N-17°-E	楕円形	SJ26より古 熊野中期
146	42-9	1.02	0.92	0.25		円形	SR34より新 時期不明
147	42-11	1.75	1.00	0.32	N-22°-E	長方形	古代か?
148	41-42-11	2.54	0.80	0.26	N-73°-W	長方形	中世
149	42-12	1.54	0.95	0.07	N-56°-E	長方形	中世
150	42-12	0.90	0.82	0.05		円形	中世
151	43-9	1.30	1.06	0.26		不整形円形	SJ83より新 熊野II期以降
152	43-9	1.35	1.32	0.16		円形	古代か?
153	42-9	1.08	1.10	0.28		円形	SK154より新 時期不明
154	42-9	2.34	1.03	0.12	N-8°-E	不整形楕円形	SK153より古 時期不明
155	41-42-11	0.75	0.70	0.06		円形	時期不明
156	41-11	0.90	0.82	0.08		円形	時期不明
157	42-11	1.48	0.82	0.30	N-2°-E	長方形	時期不明
158	41-10	1.00	0.52	0.58	N-77°-E	長方形	近世以降
159	44-15	1.32	0.96	0.11	N-20°-E	長方形	SD18より新 中世
160	43-14	2.45	1.40	0.24	N-88°-E	長方形	SD18より新 中世
161	43-15	5.40	1.30	0.36	N-18°-E	超長方形	中世
162	43-14	3.08	0.92	0.14	N-10°-E	長楕円形	中世
163	43-14	2.90	0.95	0.25	N-4°-E	長楕円形	中世
164	42-14	0.44	0.64	0.12		不整形	SD20-SK165より古 中世
165	42-14	1.66	0.80	0.16	N-6°-E	長方形	SD20より古 SK164より新 中世
166	42-14	1.06	1.06	0.45		円形	中世
167	42-14	1.04	1.00	0.35		円形	中世
168	41-14 42-14-15	1.96	1.08	0.18	N-67°-W	長方形	中世
169	42-15	2.02	1.00	0.11	N-74°-W	長方形	中世
170	42-15	1.60	1.06	0.09	N-15°-E	長方形	中世
171	40-14	3.85	0.70	0.16	N-85°-E	長方形	中世
172	43-14	0.90	1.35	0.13	N-87°-W	長方形	SE3より古 中世
173	43-14	0.94	0.88	0.53		円形	近世以降
174	41-16-17	3.40	1.04	0.12	N-11°-E	長方形	中世
175	41-17	0.88	0.50	0.10	N-86°-W	長方形	中世
176	41-17	1.60	1.48	0.29		円形	中世
177	41-17	0.96	0.50	0.14	N-15°-E	長方形	中世
178	41-17	1.64	1.32	0.28	N-20°-E	楕円形	SK179より新 中世
179	41-17	1.90	0.48	0.30	N-15°-E	楕円形	SK179より古 中世
180	40-17	1.92	0.70	0.22	N-10°-E	長方形	中世
181	39-17	1.12	1.05	0.28		楕円形	中世
182	44-12	1.90	1.50	0.25	N-84°-E	楕円形	SK9 熊野III期以前
183	44-13	2.80	2.60	0.52		不整形	SK7 熊野II期
184	43-16	3.22	1.10	0.30	N-85°-W	長方形	SD34より古 中世
185	40-11	0.90	0.80	0.21		円形	SJ89より新 中世
186	40-15-16	0.92	0.88	0.48		円形	時期不明
187	42-16-17	0.80	0.78	0.19		円形	SZ1 時期不明
188	46-11	1.58	1.10	0.48	N-8°-W	長方形	SJ45より新 時期不明
189	40-11	1.06	0.98	0.32		円形	近世後期以降
190	38-11	0.95	0.85	0.24		円形	時期不明

番号	位置	長さ(m)	短径(m)	深さ(mm)	主軸方位	形態	重複関係・時期
191	37-11	1.02	0.96	0.28	N-10°-E	円形	時期不明
192	36-37-12	1.04	0.88	0.36		円形	時期不明
193	36-12	0.90	0.80	0.08		円形	時期不明
194	36-12	0.98	0.90	0.16		円形	時期不明
195	39-10	1.08	0.46	0.18		長方形	中世か?
196	36-37-12	0.95	0.90	0.06		円形	時期不明
197	37-12	1.06	0.97	0.16		円形	時期不明
198	37-12	1.12	0.95	0.43		円形	時期不明
199	38-12	0.92	0.76	0.20		円形	時期不明
200	38-12	0.72	0.70	0.05		円形	時期不明
201	41-10-11	0.83	0.82	0.60		楕円形	SJ90より新 館野I期以降
202	38-11	1.10	0.74	0.11		不整形	時期不明
203	37-14-15	1.14	1.10	0.30		円形	時期不明
204	38-18	0.64	0.58	0.06		楕円形か?	SJ46より古 館野II期以前
205	38-16	0.84	0.72	0.19		円形	時期不明
206	38-16	0.80	0.72	0.16		楕円形	時期不明
207	38-16	0.78	0.62	0.16		楕円形	時期不明
208	38-16	0.85	0.78	0.52		円形	時期不明
209	38-16	1.07	0.90	0.20		円形	時期不明
210	38-16	1.00	0.92	0.08		円形	時期不明

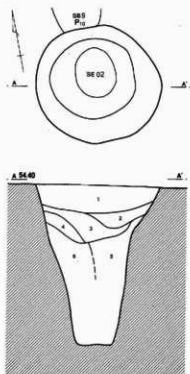
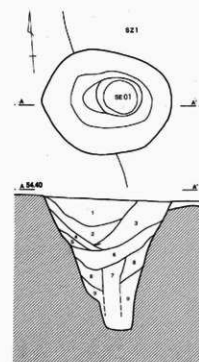
(8)井戸跡

A区からは4基の井戸跡が検出された。1基は調査区西北部、3基は調査区東部のいずれも以降密集区からはずれた部分に設けられていた。時期は他遺構との切り合い関係や僅かな遺物から類推するしか

ないが古代に遡る可能性のあるものは第2号井戸跡、中世のものが第1・3・4号井戸跡である。

A区第1号井戸跡 (第283図)

A区第1号井戸跡は36-11グリッドに位置し、第



SE01

- 1 黒色土 ロームブロック多量
- 2 黒褐色土 ロームブロック少量
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量
- 5 黄褐色土 ロームブロック多量
- 6 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
- 7 黒褐色土 ローム粒子少量
- 8 黄褐色土 ロームブロック・黒褐色土ブロック多量
- 9 褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量

SE02

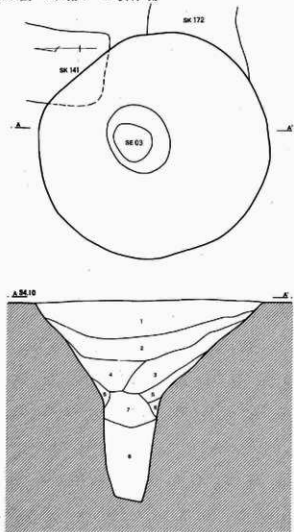
- 1 暗褐色土 ロームブロック多量
- 2 黒色土 ローム粒子微量
- 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量
- 4 黒色土 ロームブロック少量
- 5 黒色土 褐色土・焼土粒子少量
- 6 黒色土

0 2m

1号道路跡を完全に切っていた。平面形態は楕円形で、規模は長軸長2.05m、短軸長1.65m、深さ2.05mである。断面は漏斗状である。

埋土は9層に分かれ、第7層が井筒、第8・9層が掘り方に相当するものと思われる。第6層よりも上部は崩落土と考えられる。

出土遺物は検出されなかった。時期は不明確であるが、第1号道路跡を切っており、埋土に浅間A軽石が含まれないことから中世を中心とした時期と推定第284図 A区第3・4号井戸跡



- SE03
- | | | |
|---|------|-------------------|
| 1 | 灰褐色土 | ロームブロック少量 |
| 2 | 褐色土 | ローム粒子少量、火山灰微量 |
| 3 | 暗褐色土 | ローム粒子少量 |
| 4 | 暗褐色土 | ロームブロック・焼土粒子やや多量 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム粒子多量 |
| 6 | 黄褐色土 | 褐色土少量、ローム粒子多量 |
| 7 | 褐色土 | ロームブロック・黒色土ブロック混入 |
| 8 | 黒色土 | 灰色粘質土・黒色土・ローム粒子反層 |

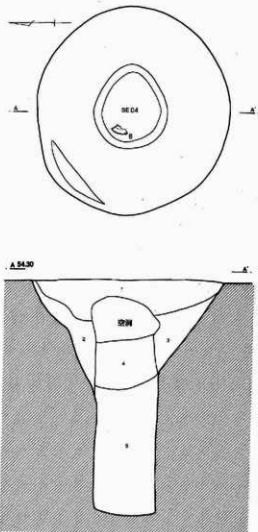
定しておきたい。

A区第2号井戸跡 (第283図)

A区第2号井戸跡は46-13グリッドに位置し、重複する第9号掘立柱建物跡を切っていた。平面形は円形で、規模は長軸長1.95m、短軸長1.84m、深さ2.54mである。

埋土は6層に分かれるが、下層は不明。観察した範囲には井筒の痕跡は見いだせなかった。

出土遺物は土師器甕、須恵器高台碗、鉄製品があ



- SE04
- | | | |
|---|-------|-----------|
| 1 | 灰褐色土 | 焼土粒子少量 |
| | | 小礫やや多量 |
| 2 | 暗灰褐色土 | ローム粒子やや多量 |
| 3 | 暗灰褐色土 | 小礫多量 |
| 4 | 暗褐色土 | 小礫やや多量 |
| 5 | 黒褐色土 | 礫混入少量 |

0 2m

る(第285図1～5)。時期は不明確であるが、第9号掘立柱建物跡との関係から熊野Ⅳ期以降となる。須恵器高台碗に伴うとすれば熊野Ⅵ期を中心とした年代となろう。

A区第3号井戸跡(第284図)

A区第3号井戸跡は43-14グリッドに位置する。重複する第172号土壌を切り、第141号土壌は本井戸跡埋没後に掘り込まれていた。

平面形態は円形で、規模は長径3.60m、短径3.55m、深さ3.15mである。底面は漏斗状に掘り込まれている。埋土は8層に分かれるが、井筒の痕跡は認められなかった。第2層には火山灰が微量含まれていたが、浅間A軽石として良いか、浅間B軽石として良いか明確に判断できなかった。

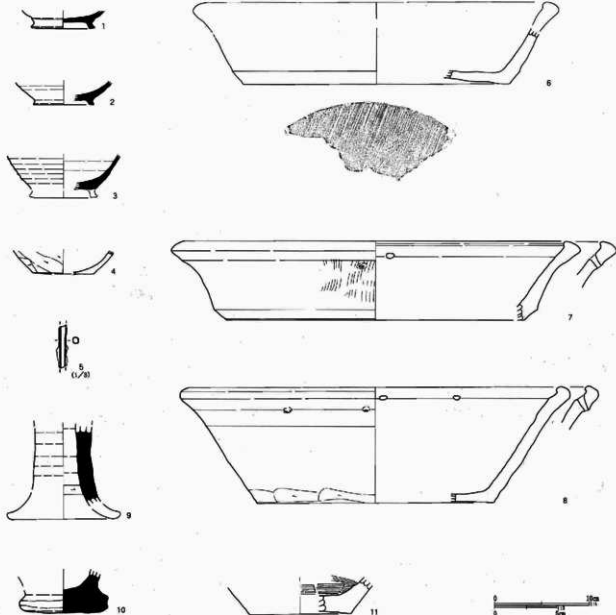
出土遺物はない。時期は不明確であるが、第141号土壌との関係、埋土の火山灰の存在から中世以前という限定しかできない。

A区第4号井戸跡(第284図)

A区第4号井戸跡(第284図)

SE 02

SE 04



第118表 A区第2・4号井戸跡出土遺物観察表 (第285図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵高台椀		1.9	(6.4)	B片	A	灰色	40%	SE2 上層。未野産。底部回転糸切り
2	須恵高台椀		2.5	(6.2)	F片	C	灰褐色	25%	SE2 上層。未野産
3	須恵高台椀		3.6		B片	A	灰色	30%	SE2 上層。未野産
4	土師甕		2.5	(6.4)	A D	A	淡褐色	35%	SE2 上層
5	不明鉄製品	SE2 覆土上層。残長3.4cm。棒状							
6	土師質盤		5.9	(28.0)	ABG	B	淡黄灰色	20%	SE4 覆土。在地産。底部板状圧痕+砂付着
7	土師質盤	(40.2)	8.4	(31.3)	ABG	B	淡黄灰色	10%	SE4 覆土。胴部外面木口ナデ 器壁厚目録付
8	須恵質盤	(39.6)	12.3	(25.0)	AB	B	暗灰色	25%	SE4 No.1。在地産。口縁部2孔紐掛状の穴
9	須恵高盤?		9.0		B片	A	淡青灰色	70%	SE4 覆土。未野産。器壁厚い
10	須恵磨鉢		4.6	8.5	B片	A	淡青灰色	90%	SE4 覆土。未野産。混入品
11	土師質壺?		3.8	(10.7)	A	B	褐色	20%	SE4 覆土。在地産。内面木口状工具痕

A区第4号井戸跡は44-13・14グリッドに位置する。平面形態は円形で、規模は長径3.30m、短径3.05m、深さ3.70mである。断面は漏斗状に掘り込まれている。

埋土は5層に分かれ、第4・5層は井筒内埋土、第2・3層は掘り方である。第4層上部には空洞部が存在し、全体に裸の混入が目立った。

出土遺物は在地産の盤、壺?、須恵器高盤脚部?

(9) 道路跡

A区からは2条の道路跡が検出された。第1号道路跡は調査区北部にあり、南東から北西にかけてS字状に緩やかな弧を描いて抜けている。第2号道路跡は調査区東部中央付近、第1号道路跡の西側15m程隔てて検出された。遺存状態が悪く、波板状圧痕の一部が残るに過ぎない。その他、第26号溝跡と第27号溝跡の間にも硬化面が観察され、中世の一時期道路として機能していたことがわかっている。

A区第1号道路跡 (第287-293図)

A区第1号道路跡は調査区北部、43-16・17グリッド付近から35-11グリッドにかけて、南東から北西方向に向けて、緩やかに弧を描きながら抜けている。概ね等高線と平行していると考えられる。重複する第1号井戸跡、第32号溝跡、第26・29号溝跡、第11号溝跡、第30・34号溝跡によって削平されていた。直線距離で約100mを測る。道路幅は側溝で明確に区分されていないため、不明瞭であるが、概ね3-8m程である。

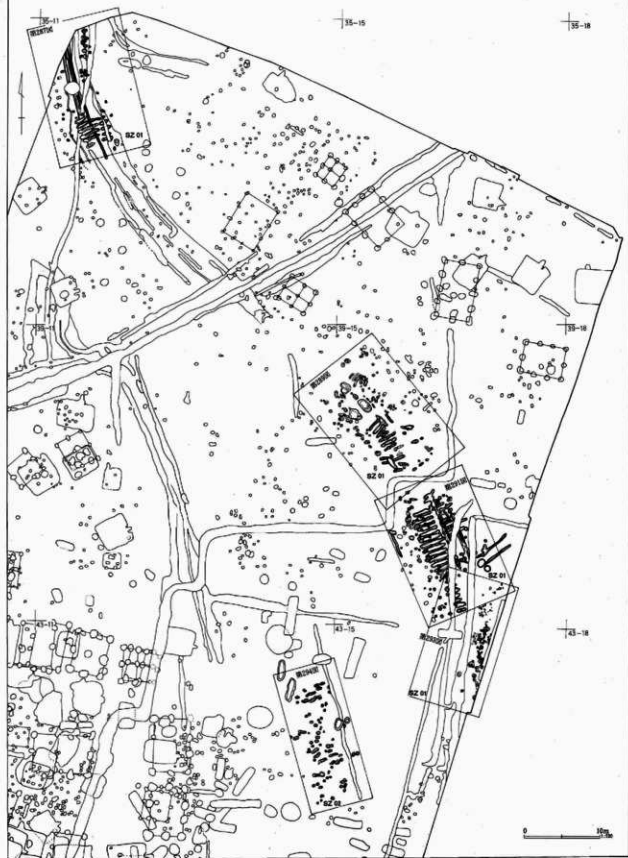
磨鉢がある。6は口縁部を欠く。底面は砂底で板状圧痕が付く。体部下端を面取りしている。7は同一器形で口縁部に小孔が貫通する。6・7は土師質であるが、8は須恵質の焼き上がり。やや深手で、口縁部に小孔が2個穿たれている。11は壺か。内面に木口状工具による調整痕が残る。9は高盤脚部か。非常に器壁が厚い。10は磨鉢で、内面は磨滅。時期は中世で14世紀頃と推定される。

道路跡を特徴づける波板状圧痕と硬化面が検出されたのは道路北端部と中央から南東にかけての部分であった。道路跡がカーブする地点に波板状圧痕が存在するともいえる。逆に直線的に延びるとと思われる中央付近では波板状圧痕や硬化面は明瞭に検出できなかった。また、中央から北西側では全体が浅い溝状に窪んでおり、南東側と趣を異にしている。

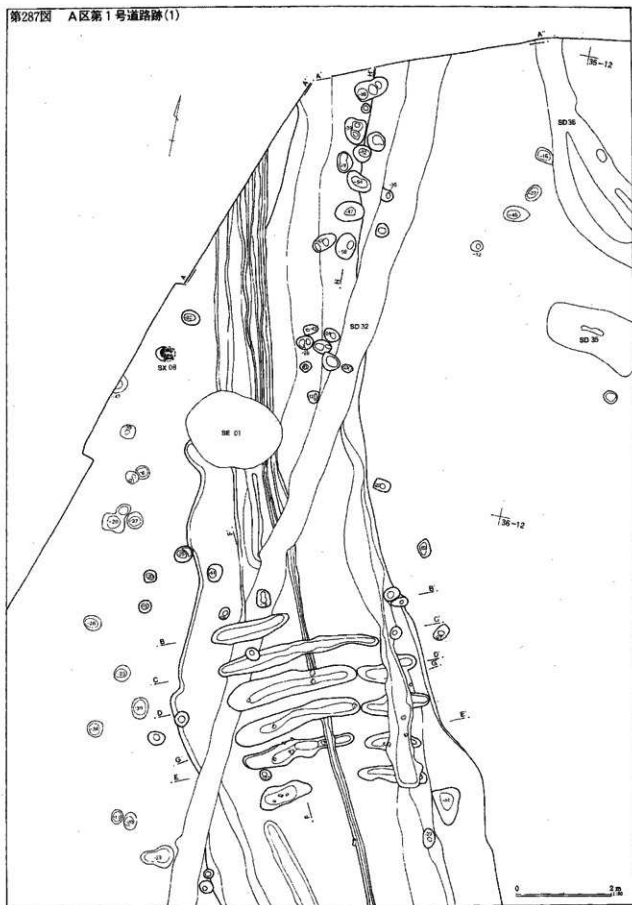
まず、北東部の様相を述べると(第287図)、全体が溝状に掘り下げられ、溝幅は3.0m~6.0m前後を測る。確認面では溝の中央部に黒色土、その周囲に砂質の強い明褐色土が堆積していた。道路内には平行して延びる溝(縦溝と呼ぶ)が数条途切れながら検出された。埋土は灰色の粘質土で、非常に堅く締まっていた。

いわゆる波板状圧痕は6条、道路に直交して検出された。埋土は灰色の粘質土で、縦溝と同様である。やはり非常に堅く締まっていた。埋土中には小礫と、須恵器の小片が混っていた。須恵器の小片は裸の

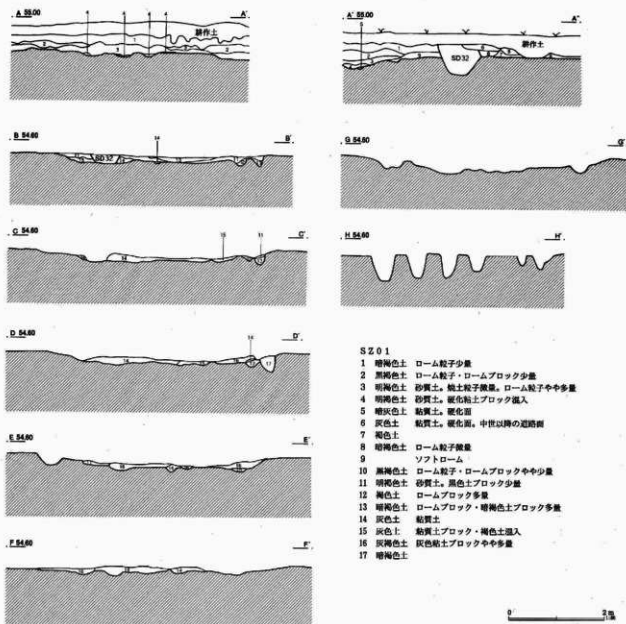
第286图 A区第1·2号道路跡



第287图 A区第1号道路迹(1)



第288図 A区第1号道路跡(2)



代用品として用いられた可能性がある。この灰色粘土は道路の最終堆積土である黒色土(第10層)と明褐色土を除去した段階で現れ、波板状圧痕のみならずその間をつなぐ高まりの部分にも薄く覆っていることが確認された。波板状圧痕底面は鉄分とマンガンの凝集層が形成され茶褐色を呈していた。埋土の灰色粘質土と同様、底面もバリバリに締まった硬化面が形成されている。

波板状圧痕は長さ1.2m~3.4mほどで、西側と東

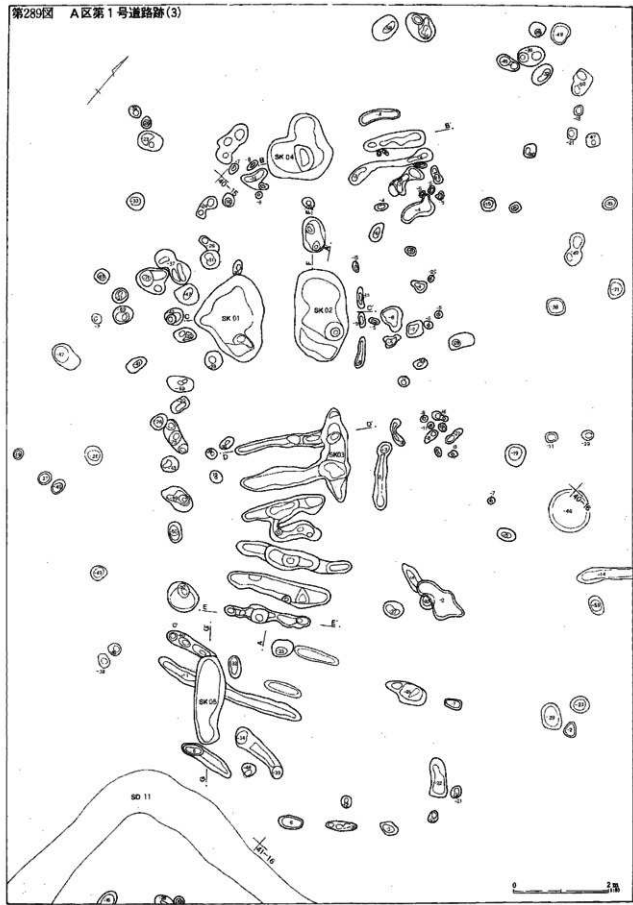
側に2列存在する。同時期のものか、時期を異にするのかは判断できなかった。

道路跡の西側1mには単独埋設土器(第8号特殊遺構)が検出された。土器の甕を埋設したもので、道路跡を意識したものかもしれない。

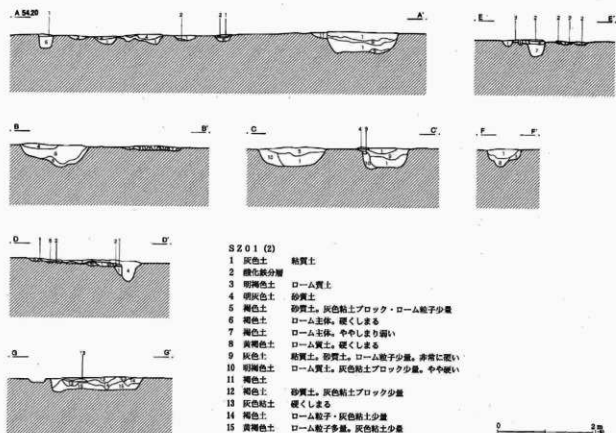
次に南東部の様相を述べると、北西部との相違は道路幅を示す溝状の掘り込みは存在しない点であるが、おそらく削平されたものと考えられる。

最も北寄りの一角では第2号土塼を挟んで波板状

第289图 A区第1号道路断(3)



第290図 A区第1号道路跡(4)



圧痕が2箇所検出された(第289・290図)。北ブロックでは5条の長楕円形土塊から構成されている。南ブロックでは11条の長楕円形土塊から成る。南ブロック南部の4条はやや土塊の軸が変わっていた。波板状圧痕の長さは0.70m~3.20m、深さ5~30cmほどである。埋土は上面に明灰色砂質土(第4層)が被り、その下部に非常に強く締まった灰色粘質土(第1層)が堆積している。灰色粘質土の下面は鉄分とマンガンの凝集層が被膜状に形成されていた(第2層)。

道路跡の走向に平行する溝(土塊)は第3・5号土塊など見ることはできるが、あまり顕著ではない。また、不整形土塊が3基掘り込まれていた。非常に強く締まった灰色粘質土が詰まった第1・2号土塊と、黄褐色硬化層(第8層)の上に砂質土が堆積する第4号土塊がある。第4号土塊は灰色の粘質土が故意に除去された可能性もある。周辺には小ピットが群在し、道路に沿って並ぶようにも見えるが、伴う

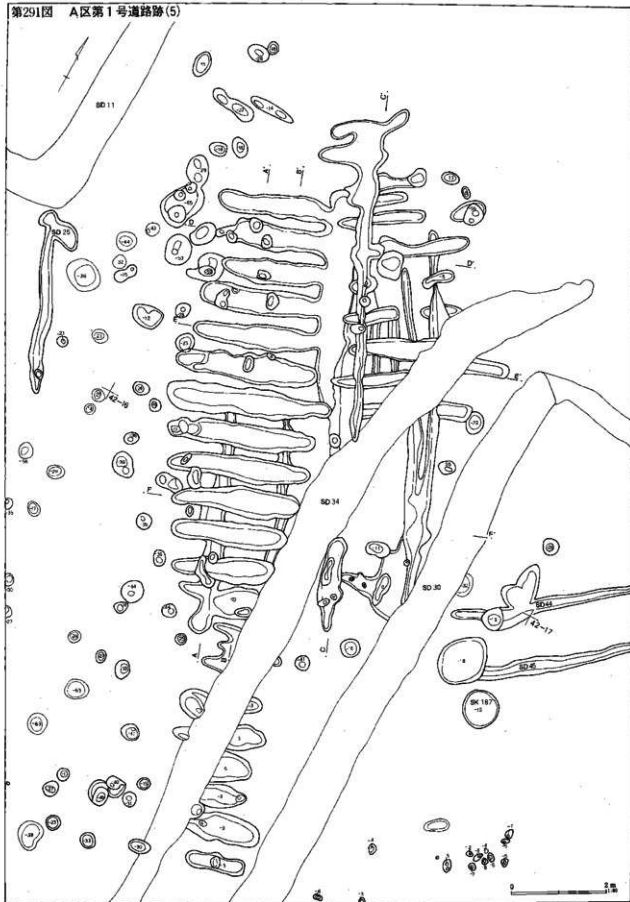
という確証は得られなかった。

第11号溝跡と第30号溝跡の間には波板状圧痕が最も良好な状態で遺存していた(第291・292図)。大きく東西2列あり、西列では22条、東列では9条検出された。東西の波板はずれる部分があり、時期を違えて構築された可能性がある。また、道路走向に平行する溝状遺構(縦溝)は西列で2条、東列で5条、西列と東列の間に1条検出された。

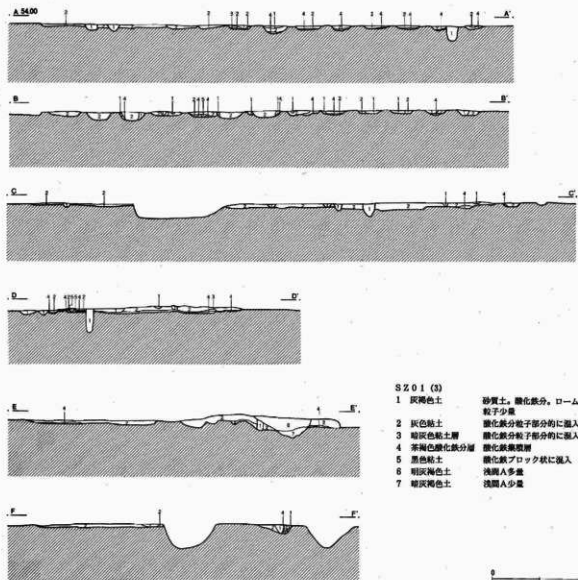
波板状圧痕の埋土は他の部分同様、非常に強く締まった灰色粘質土が堆積していたが、他地点との相違は灰色粘質土が波板凹部のみならず波板を繋ぐ高まりの部分まで一面に覆っていた部分が認められたことである(第34号溝跡北西部)。波板状の凹凸面を路床とすると、灰色粘質土が舗装面の一部と考えることができよう。

波板状圧痕の南西部では道路痕跡は消えている。調査区際の断面観察では明褐色砂質土と灰色粘質土

第291图 A区第1号道路迹(5)



第292図 A区第1号道路跡(6)



SZ01 (3)

- | | |
|------------|----------------------|
| 1 灰褐色土 | 砂質土、酸化鉄分、ローム
粒子少量 |
| 2 灰色粘土 | 酸化鉄分粒子部分的に混入 |
| 3 暗灰色粘土層 | 酸化鉄分粒子部分的に混入 |
| 4 茶褐色酸化鉄分層 | 酸化鉄集積層 |
| 5 黒色粘土 | 酸化鉄ブロック状に混入 |
| 6 明灰褐色土 | 洗濁A多量 |
| 7 暗灰褐色土 | 洗濁A少量 |

ブロックを含む層が認められ、道路跡は本来連続することが確認できた(第291・293図)。

出土遺物は少ない。土師器・暗文杯、須恵器甕・長頸瓶、鉄器がある(第295図1~4)。図化した以外には1辺5cm程度の須恵器甕破片が10数点出土しており、礫と共に路床に敷き込んだ可能性がある。

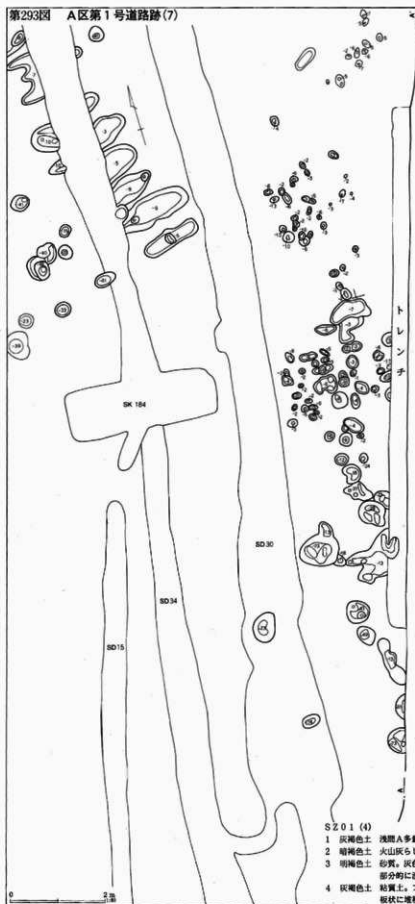
時期に関しては不明確な点があるが、中世以降の溝跡や井戸跡に切られていること、出土遺物が古代のものに限られること、道路内に古代の遺構が全く進出していないこと、第8号特殊遺構が道路と関連する可能性があることから、古代の道路跡と考える

のが妥当である。おそらく集落形成段階、あるいはそれ以前から存在した道路を改修しつつ、出土遺物から見ても9世紀段階までは使用したものと考えられる。

A区第2号道路跡(第294図)

A区第2号道路跡は第18号溝跡の西側43-14グリッドから45-14・15グリッドにかけて検出された。波板状圧痕が部分的に検出されたのみで、道路幅を示す溝状の掘り込みや縦溝は不明である。長さは約12m、幅は不明確であるが4m前後、およそ南北に延びるものと思われる。

第293図 A区第1号道路跡(7)

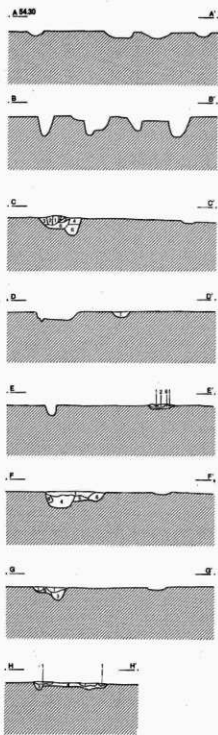
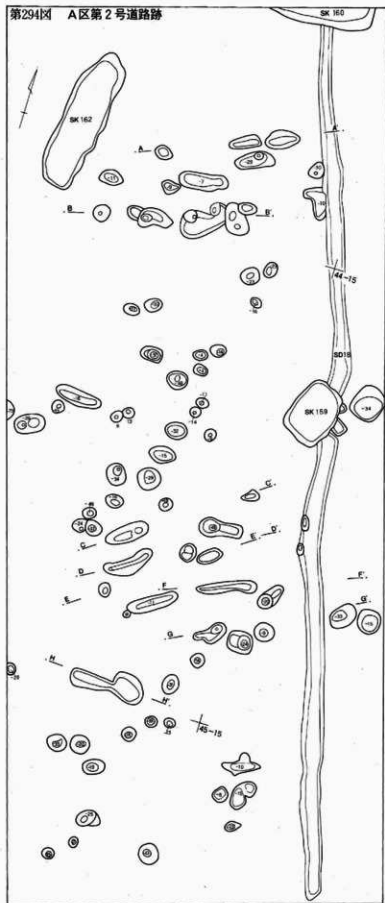


SZ01 (4)

- | | | | |
|--------|-------------------|----------|----------------|
| 1 灰褐色土 | 浅層A多量 | 5 灰褐色土 | 灰色粘土ブロック部分的に混入 |
| 2 暗褐色土 | 火山灰らしき粒子少量 | 6 褐色土 | ローム粒子やや多量 |
| 3 明褐色土 | 砂質。灰色粘土ブロック部分的に混入 | 7 暗褐色土 | |
| 4 灰褐色土 | 粘質土。ブロック状又は板状に堆積 | 8 ソフトローム | |
| | | 9 腐乱 | |



第294图 A区第2号道路跡

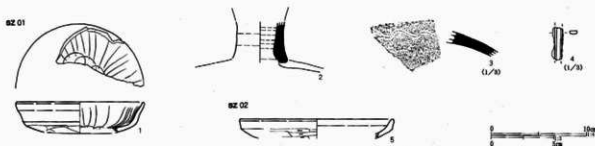


SZ02

- 1 灰褐色土 粘質土。空罐
- 2 灰褐色土 粘質土。ロ-△胎子混入
- 3 灰褐色土 粘質土。
- 4 暗褐色土 ロ-△層
- 5 ロ-△層 暗褐色土少量(人決的)
- 6 黄褐色土 ロ-△主体

0 2m

第295図 A区第1・2号道路跡出土遺物



第119表 A区第1・2号道路跡出土遺物観察表 (第295図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師崎文杯	(13.3)	3.1		G	A	褐色	20%	SZ01覆土。内面放射暗文(下→上)→ヒ暗文(右回り)
2	須恵長頸瓶		4.3		B	A	茶褐色	70%	SZ01覆土。末野産か? 素地土やや粗い
3	須恵甕				C片	C	黄灰色		SZ01内SK1。末野産。肩部。4本組縞楕円状文巡る
4	不明鉄製品	SZ01。残長2.6cm。棒状							
5	土師皿	(16.1)	2.0		G	A	茶褐色	10%	SZ02内。44-14G Pit3

波板状圧痕は第162号土壌東側(北群)と、第159号土壌南西部(南群)の2箇所から検出された。波板状圧痕を構成する長楕円形土壌は長さ0.60m~1.60mである。北群は6条確認された。2列平行する可能性もあるが不明瞭である。底面は非常に強く締まっており、埋土は硬化した灰褐色粘質土が堆積しており、第1号道路跡と同様な様相が認められた。

南群は3条乃至、4条連なる土壌が2列確認された。埋土の状況は北群と同様である。また、南北の土壌群の間にはピット群が検出されているが、ピット底面は強く硬化しているものが認められ、波板状圧痕を構成する土壌の一部が辛うじて残存したものと考えることができる。

(10) 特殊遺構

A区からは特殊遺構は8基検出された。特殊遺構としたものは、遺構の性格が不明確なものである。特に第2号特殊遺構としたものは、調査当時井戸跡として調査したが、形態や埋土の状況が井戸とは異なり、且つ極めて多量の遺物が検出されている。井戸掘削を途中で放棄したか、粘土採掘のために掘削された可能性がある。畿内産土師器もこの土壌から検出されている。

A区第1号特殊遺構 (第296図)

A区第1号特殊遺構は45-14グリッドに位置する。

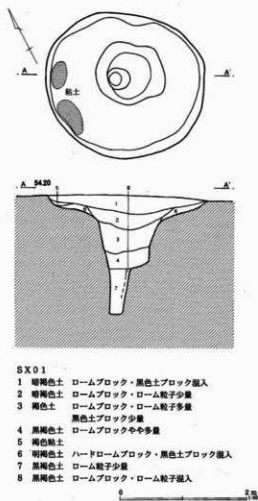
道路跡とほぼ並行して延びる第18号溝跡は、道路側溝あるいは、道路と関連する区画溝と想定することもできるが、確証は得られなかった。

出土遺物は少なく、土師器皿が検出されたのみである(第295図5)。道路跡の時期に関しては、出土遺物が8世紀初頭前後で、また、道路の延長上には中世と推定される長方形土壌が掘り込まれていること、第18号土壌が中世の土壌に切られていることから判断すると古代の道路跡と見ることも可能であるが、やはり道路の北側延長上にある第3号井戸跡の時期が不明瞭である点に問題は残る。

断面漏斗状に掘り込まれた円形土壌(長径2.50m、短径2.25m、深さ1.14m)の底面に直径0.30m、深さ0.72mのピットが穿たれていた。井戸跡かとも思われたが、井筒部分が小さすぎることから特殊遺構とした。幡竿を据え付けた土壌の可能性も検討したが、明確な柱痕は確認できなかった。

埋土は8層に分かれ、第5層は褐色粘質土で、6層上面に貼られたような状況が認められた。第1~4層はロームブロックの混入が目立った。下層(4・7・8層)は黒味の強い色調である。

第296図 A区第1号特殊遺構



遺物は検出されなかった。時期は不明である。

A区第2号特殊遺構 (第297図)

A区第2号特殊遺構は調査区南端の50-10-11グリッドに位置する。平面形態は不整形で、底面は一定しない。断面も不整形で、調査中に崩落してしまったが部分的にオーバーハングしていた。規模は長径4.86m、短径4.60m、深さ1.80mである。調査当初、形態や大きさから井戸跡と想定したが、掘り込みや埋土の状態から井戸跡とは異なるため、特殊遺構とした。

埋土は11層に分割され、上層から中層(第1層~7層)までは焼土、炭化物、灰が多量に混じり、また、多量の土器片が含まれていた。下層にはロームブロックの混入が目立ち、焼土や灰、遺物の出土量は少ない。

出土物は極めて多く、図化した遺物だけでも358点を数える(第301-314図)。遺物の出土状態は前述のように上層に多く、焼土や灰、炭化物と共に投棄された可能性が高い(第298-300図)。器種としては土師器環・皿・暗文環・暗文皿・甕・小型甕・壺・鉢・甌・ミニチュア土器、支脚、須恵器環・高台環・蓋・長頸瓶・磨鉢・甕・短頸壺、土鍾、鉄製品など日常容器としての器種をほぼ網羅している。

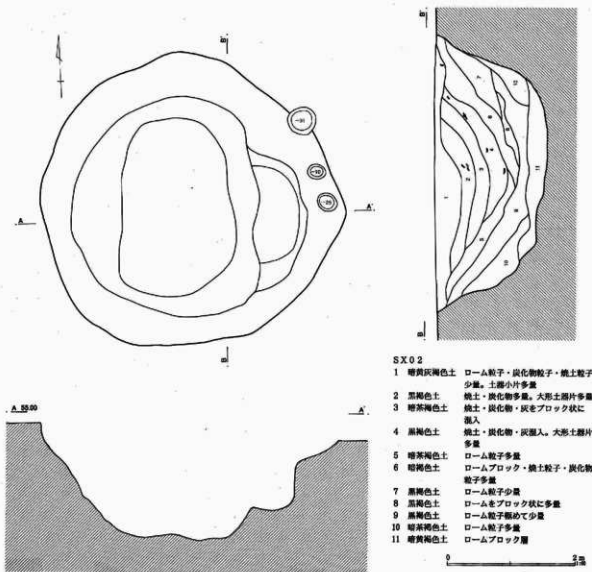
土師器環(第301・302図1~57)は北武蔵型環である。丸底形態で、口縁部が内彎気味または直立して立ち上がる。口径は12cm代~14cm代が主体となる。59-60は大振りの椀形態である。61~75は皿。58-76~86は器形的には暗文環と同一であるが、内面に暗文が施されない。87~96は暗文皿系皿であるが、やはり内面の暗文が省略されている。

99~204は暗文環。99~200は内面放射暗文を施すタイプである。大半は放射暗文のみであるが、189・198・199には中心部に螺旋暗文が施文されている。口径は10.8cm~17.0cmまで分布する。201・202は大振りの椀形態で、内面には斜格子暗文と螺旋暗文が施されている。203は端部に凹線をもつ深身の器形で、鉢としても良いかもしれない。内面は放射暗文が施文される。204は畿内産の暗文環である。口唇部を内側に巻き込み、底部は平底風である。径高指数は23を示し、浅身に属する。内面は2段の放射暗文と螺旋暗文が施されているが、中心部付近は磨減が著しい。外面はミガキと底部には軽いヘラケズリと指頭痕が残る。覆土最上層から出土した。

205は暗文皿である。暗文皿系の無文皿に比較して暗文皿の出土量が少ない。また、暗文も雑な施文である。206は暗文環の底部に墨痕が付いているが、字としては明瞭に読めない。

207~257は須恵器環(高台環)蓋で内面にかえりが付く。207~214は口径12cm代~14cm代の最も小振りの蓋である。211・212は環状つまみが付くもので、211は末野または群馬産、212は群馬産と考えられる。252・253も同類である。215~243・254~257は大型の

第297図 A区第2号特殊遺構



蓋で、口径17～18cm代のもが主体を占める。最大は230の蓋で、口径21cmに及ぶ。つまみは擬宝珠タイプが主体を占める。かえりは口縁部ラインよりもかなり内側に入るもので、痕跡程度のもも見られる。末野産が大半であるが、233・234はかえりが接地面となり、異質である。群馬産と考えられる。

258～260は高台環。258は小振り、259・260は大型品で、後者は深身である。261～283は無台環である。法量によって最低3種に分化している。小型の一群は口径11～12cm前後(261～267)、中型品は13～14cm前後(268～270)、大型品は15～18cmである(271～283)。底部は丸底風でやや扁平な器形が主体を占め

る中で、268は箱形の器形を呈し、異質であるが、他の環同様末野産の可能性はある。280は深身で無台碗とした方が良くであろう。底部調整は回転ヘラケズリと手持ちヘラケズリがある。切り離しはヘラ切りと思われる。

284～286は磨鉢。284は口唇部は面取り、外面にカキ目が施される。胎土は精良で秋田産か。

287～294は長頸瓶。287・294は湖西産。288は端部のつくりが甘く、湖西を含む東海産か。頸部は2段接合。289は肩部に列点文を施す。内面はヘラケズリ調整される。灰色で夾雑物をほとんど含まない胎土は特徴的である。湖西または群馬産か。295は高台盤

か。盤面は磨滅している。296は台付壺か。297は壺蓋と思われる。葉地土が精良で黒色粒子が吹き出す。秋間産か。298は短頸壺。299~303は甕である。293は横波状文と沈線区画がある。303は丸底の大甕で、タタキと螺旋状のカキ目を施文。

304~309は土師器小型甕である。310~318・323~327は甕。319~322は壺である。331~339は瓶。大型(334)と小型(333)がある。343は甕と同一形態であるが、胴部に穿孔がある。支脚と見るべきか。346~350はミニチュア土器。

352~357は鉄製品。352は刀子か。353は平造りの三角形鏃と思われる。358は土鏝。

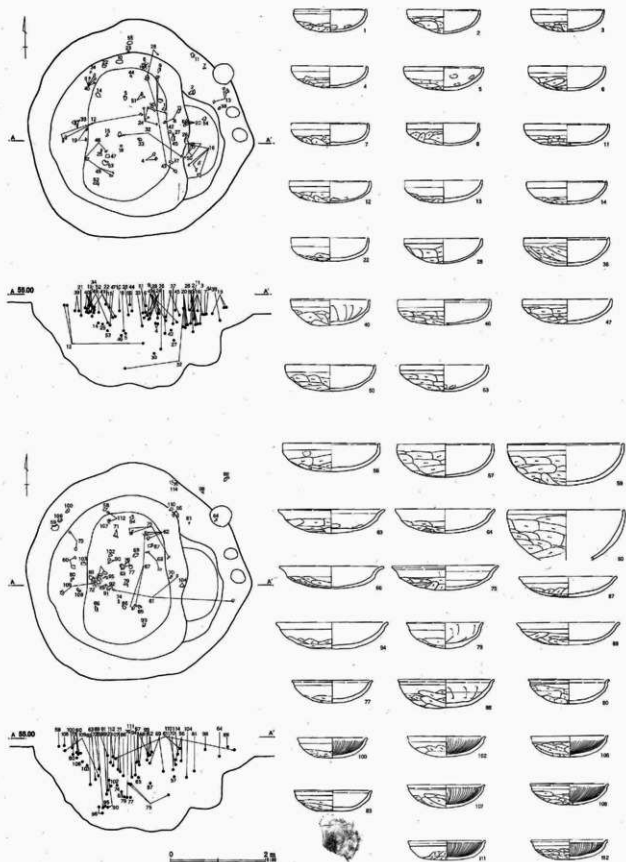
出土遺物は時期的にまとまっており、焼土や炭化物などと共に一括投棄された可能性が高い。その意味では廃棄土壌と考えると良いが、本来の使用目的は不明である。井戸を掘削途中で放棄したのか、土取り目的で掘削した可能性もある。本遺構の南側に隣接して石組井戸跡が調査されている(町教育委員会)。時期的にもほぼ同時期で関連性が注目される。

出土遺物から時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

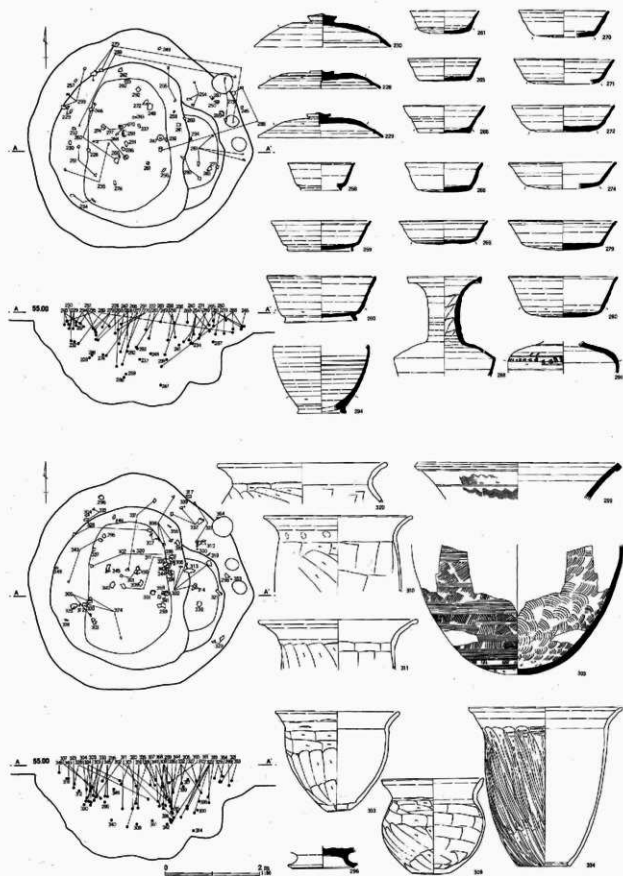
第120表 A区第2号特殊遺構出土遺物観察表(第301~314図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	11.2	3.6		AB	B	褐色	80%	No2700 覆土
2	土師環	11.3	3.7		AB	B	褐色	80%	No3157
3	土師環	11.4	3.5		AB	B	褐色	25%	No1185
4	土師環	(11.4)	3.4		AB	B	褐色	60%	No2173-2175
5	土師環	12.3	3.7		AB	B	褐色	70%	No2510
6	土師環	(11.8)	3.8		AB	B	明褐色	40%	No59. 底部黒斑あり
7	土師環	12.0	3.4		AB	B	褐色	70%	No371. 外面黒斑あり
8	土師環	11.3	3.4		AB	B	褐色	60%	No3000-3212 覆土
9	土師環	(12.1)	3.3		AB	B	褐色	60%	No60 覆土(西半部)
10	土師環	(12.6)	3.5		AB	B	褐色	40%	No1507 覆土最上層 覆土(西半部)
11	土師環	(13.1)	3.3		AB	B	褐色	30%	No2793
12	土師環	12.5	3.4		AB	B	褐色	60%	No558-559-2578
13	土師環	12.0	3.5		AB	B	褐色	70%	No200-216-1336
14	土師環	(12.4)	3.5		AB	B	褐色	30%	No2473. 外底面黒斑あり
15	土師環	(13.0)	3.3		AB	B	褐色	25%	No486
16	土師環	11.2	3.1		AB	B	褐色	60%	No1182-2369-3236-3048
17	土師環	(12.0)	2.6		AB	B	褐色	30%	覆土(東半部)
18	土師環	(12.0)	3.5		AB	B	茶褐色	25%	No2415
19	土師環	(12.0)	3.1		AB	B	褐色	30%	No727-819
20	土師環	(12.0)	3.0		AB	B	褐色	70%	No3219-3443-3445-3446
21	土師環	(12.0)	2.8		AB	B	褐色	75%	No758 覆土(西半部)
22	土師環	(12.0)	3.7		AB	B	茶褐色	25%	No94
23	土師環	(12.0)	3.3		AB	A	橙褐色	20%	No1534 覆土(西半部)
24	土師環	(11.2)	3.0		AB	B	灰褐色	25%	No1944-1949-1956 覆土(西半部)
25	土師環	(12.0)	2.5		AB	B	褐色	15%	No1785
26	土師環	(11.0)	3.4		AB	B	明褐色	30%	No3234
27	土師環	(12.0)	3.2		AB	B	褐色	35%	No3631
28	土師環	(12.0)	4.0		AB G	A	明褐色	20%	No1563-2069 覆土(西半部)
29	土師環	(12.2)	3.3		AB	B	褐色	40%	上層(東)
30	土師環	(12.0)	4.0		AB	B	明褐色	10%	No2701
31	土師環	(12.0)	3.2		AB	B	褐色	15%	覆土(西半部)
32	土師環	(12.0)	3.2		AB	B	褐色	25%	No2577-3043
33	土師環	(12.0)	3.2		AB	B	褐色	20%	No2234
34	土師環	(12.4)	3.3		AB	B	茶褐色	30%	No2013
35	土師環	(11.2)	3.0		AB	B	明褐色	20%	覆土(西半部)
36	土師環	(13.2)	4.5		AB	B	暗褐色	50%	No2705

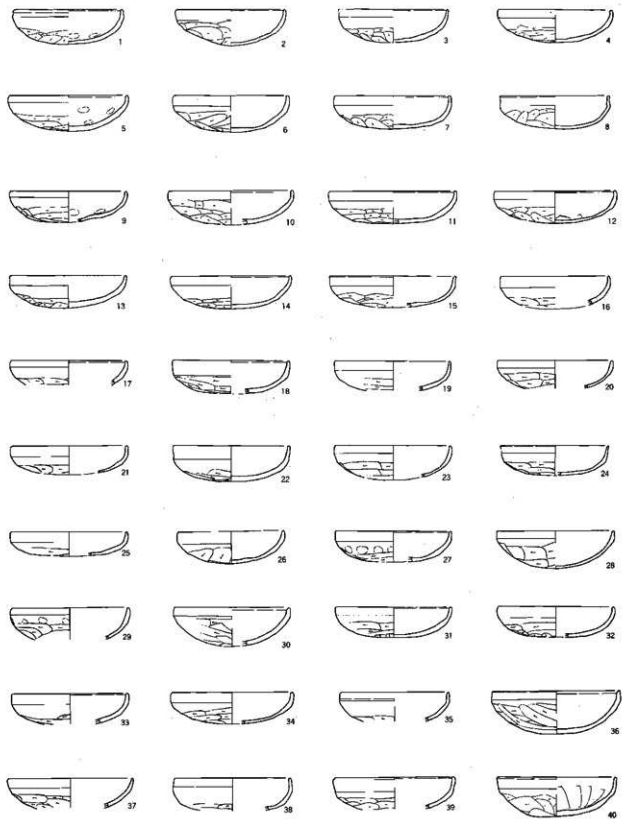
第298图 A区第2号特殊构造物分布图(1)



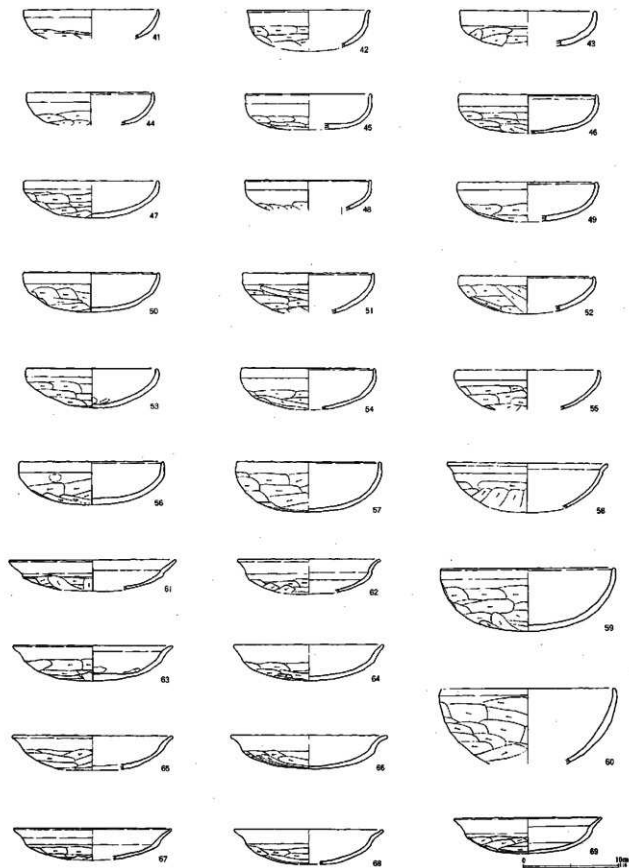
第300图 A区第2号特殊遗迹构造物分布图(3)



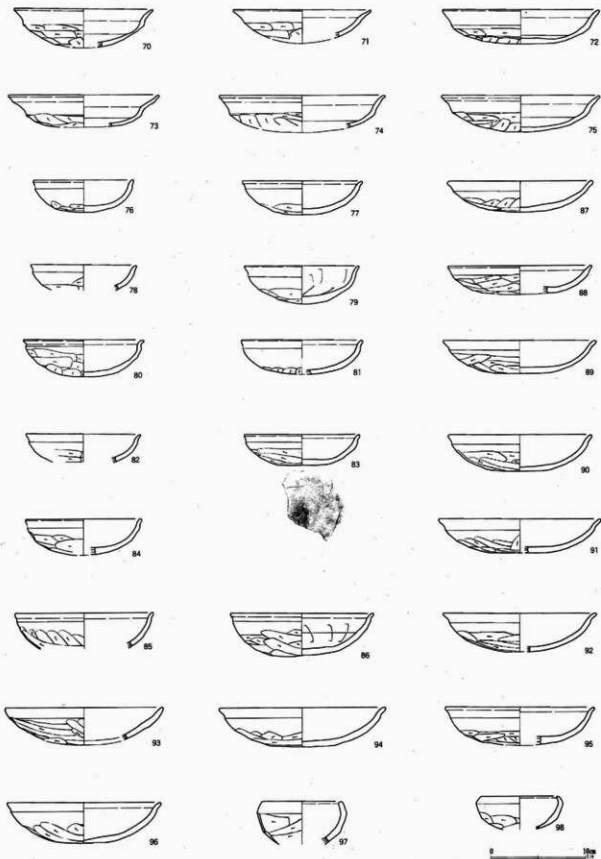
第301图 A区第2号特殊遗物出土器物(1)



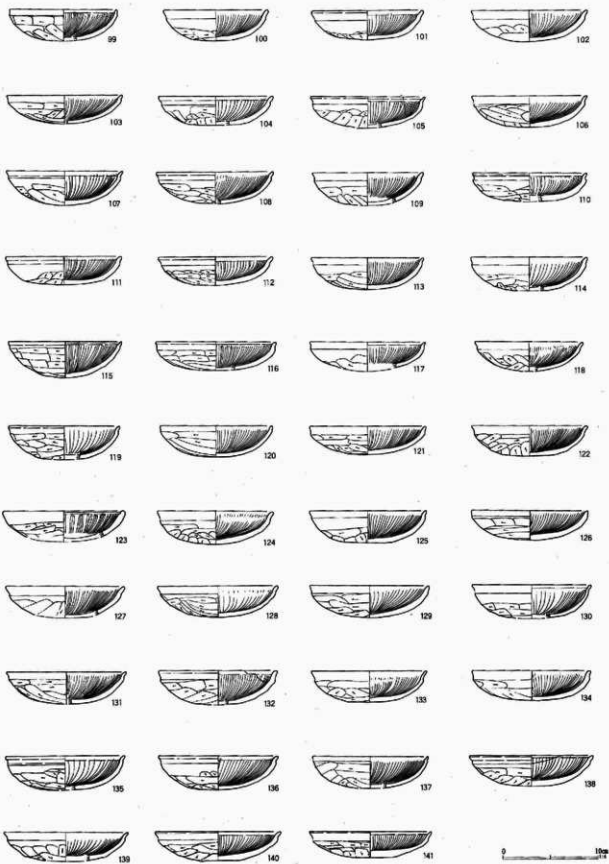
第302图 A区第2号特殊遗物出土器物(2)



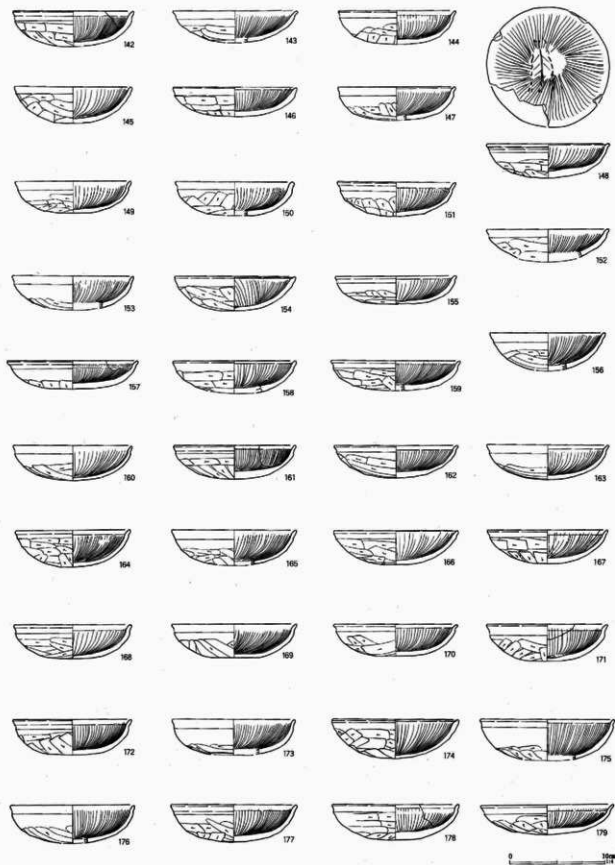
第303图 A区第2号特殊遗物出土文物(3)



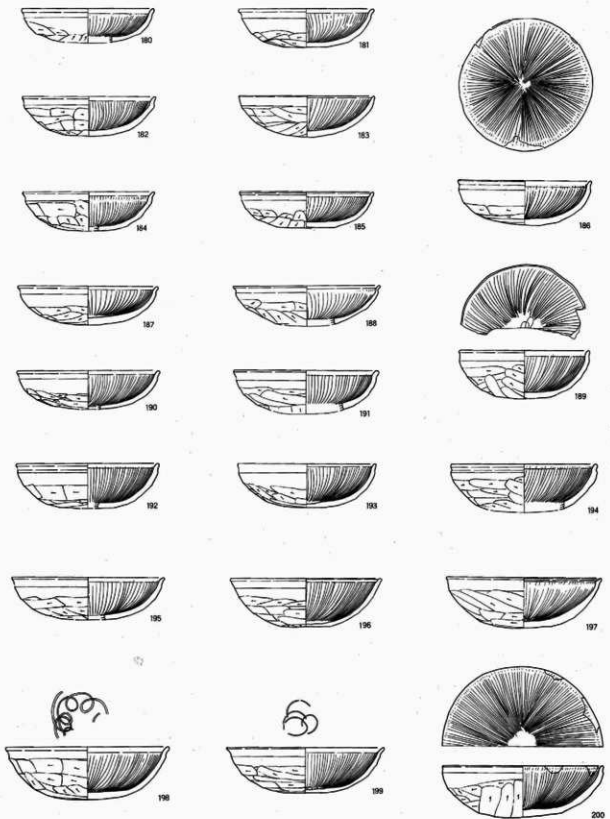
第304图 A区第2号特殊结构出土文物(4)



第305图 A区第2号特殊遗物出土物(5)

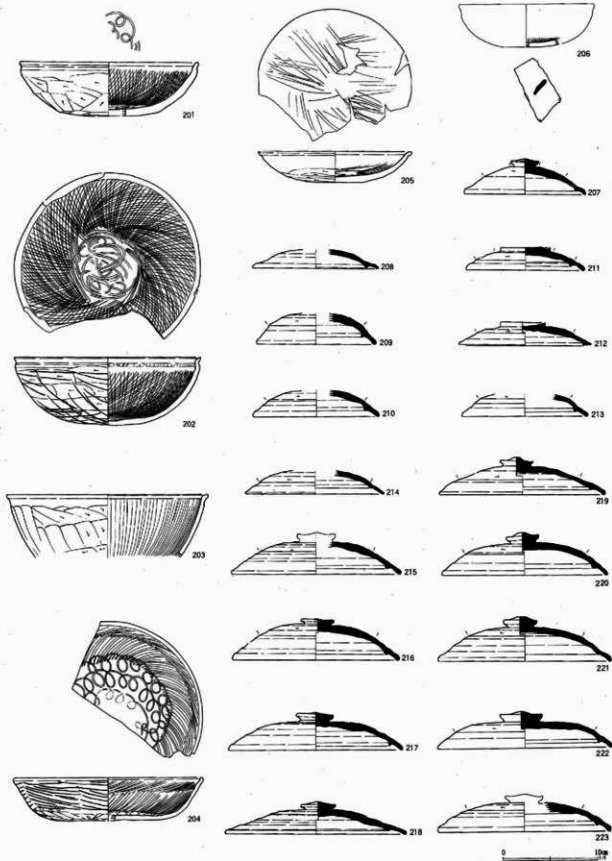


第306图 A区第2号特殊遗物出土器物(6)

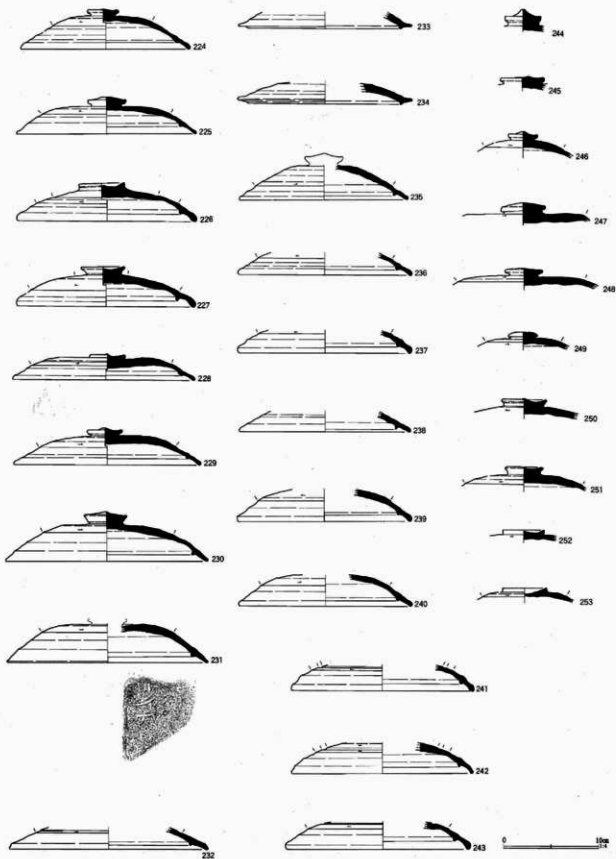


0 1cm

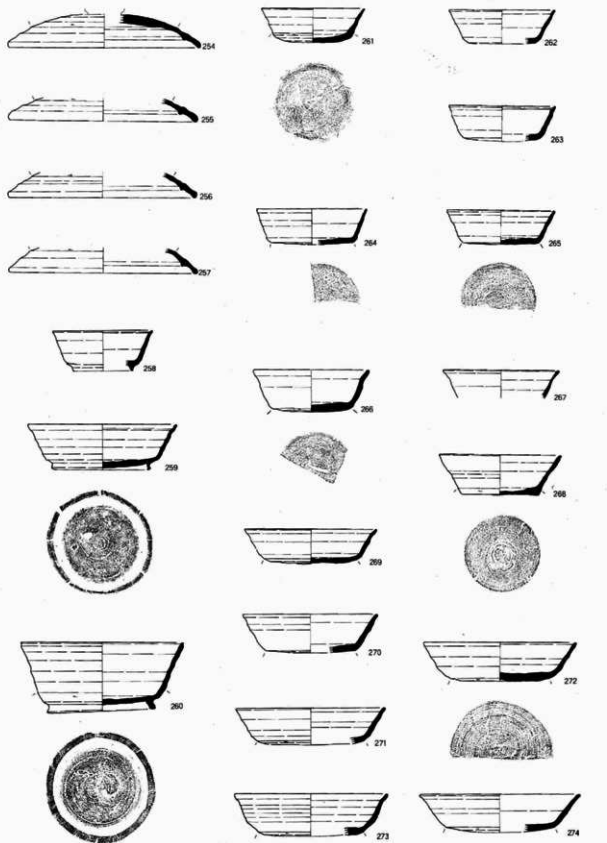
第307图 A区第2号特殊遗物出土物(7)



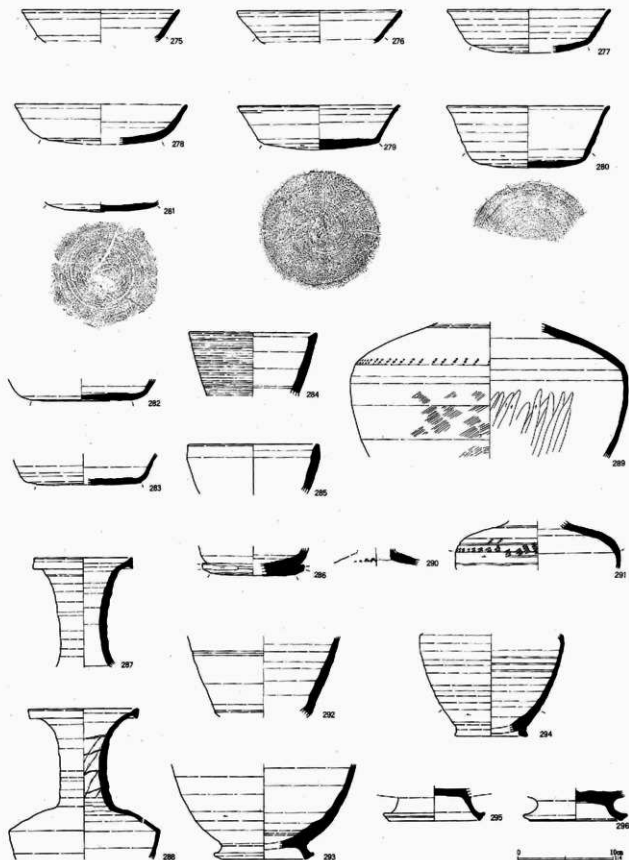
第308图 A区第2号特殊遗物出土物(8)



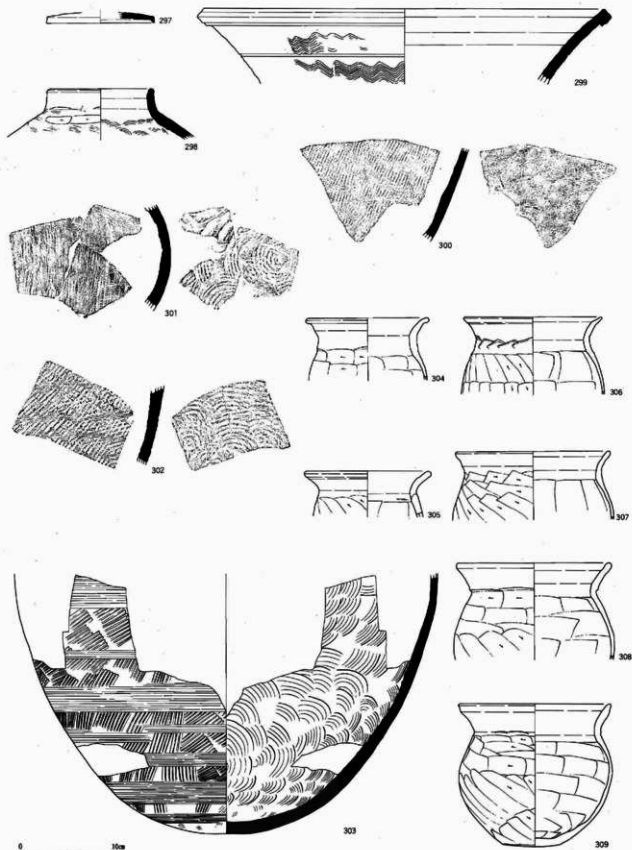
第309图 A区第2号特殊遗物出土器物(9)



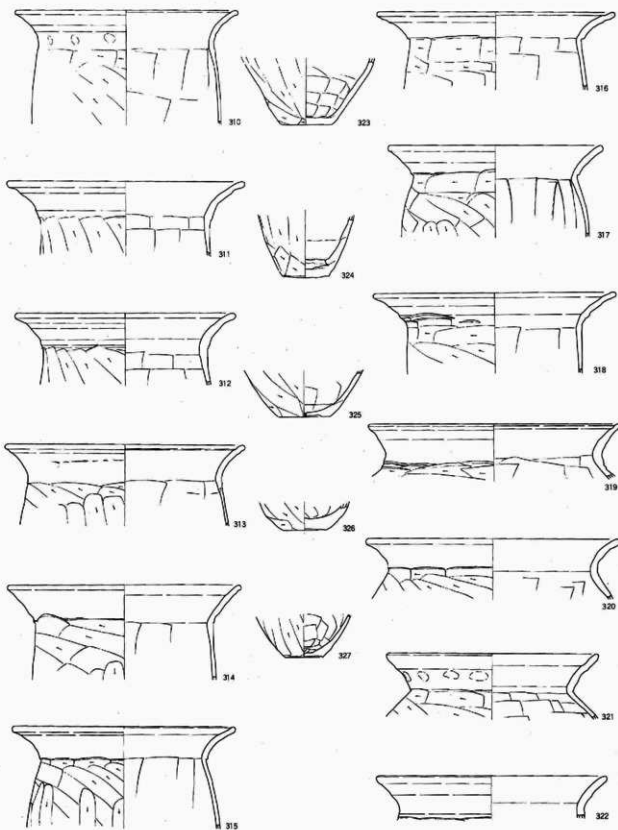
第310图 A区第2号特殊遗物出土物(10)



第311图 A区第2号特殊遗物出土物(11)

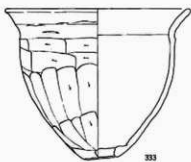
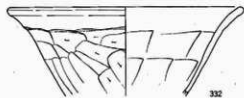
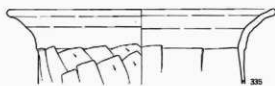
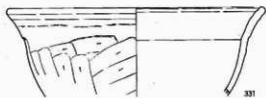
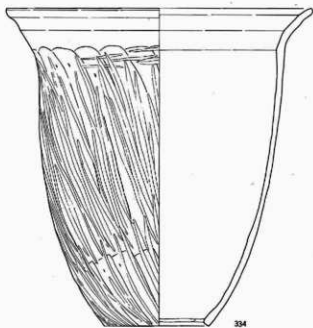
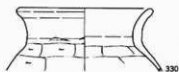
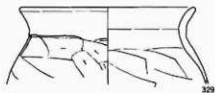


第312图 A区第2号特殊遗构出土文物(12)

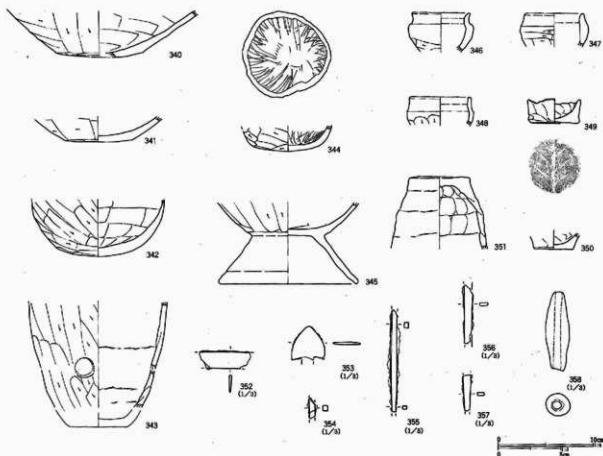


0 10cm

第313图 A区第2号特殊遗構出土遺物(13)



第314図 A区第2号特殊遺構出土遺物(14)



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
37	土師環	(13.0)	3.2		A B	B	褐色	20%	No.3415
38	土師環	(12.0)	3.4		A B	B	褐色	15%	No.1310
39	土師環	(12.2)	3.4		A B	B	明褐色	20%	No.814
40	土師環	12.4	4.3		B	B	褐色	95%	No.885-886-1909-1910-1912
41	土師環	(14.0)	3.0		A B	B	褐色	25%	覆土(西半部)
42	土師環	(12.6)	3.8		A B	B	褐色	30%	No.3507 覆土(西半部)
43	土師環	14.0	3.6		A B	B	褐色	75%	No.1577-1578-1588-3199-3485 覆土(西・東半部)
44	土師環	(13.2)	3.4		A B	B	褐色	40%	No.997 覆土(西半部)
45	土師環	(13.0)	3.7		A B	B	褐色	25%	No.3016
46	土師環	(14.2)	4.1		A B	B	褐色	40%	No.2511 覆土(西半部)
47	土師環	(13.8)	3.9		A B	B	明褐色	25%	No.1778
48	土師環	(13.0)	3.2		A B	B	褐色	35%	No.673-1779 覆土(西半部)
49	土師環	(14.4)	4.1		A B	B	橙褐色	40%	No.605-646-647
50	土師環	(14.0)	4.2		A B	B	橙褐色	30%	No.3372-3374-3375-3376-3504. 外面黒斑あり
51	土師環	(13.5)	4.2		A B	B	明褐色	30%	No.1984-1985
52	土師環	(14.0)	3.7		A B	B	明褐色	30%	No.2802 覆土(西半部)
53	土師環	13.6	4.2		B	B	褐色	95%	No.2131. 底部外面黒斑あり
54	土師環	(13.8)	4.4		A B	B	褐色	25%	No.1087
55	土師環	(15.0)	4.3		A B	B	明褐色	25%	No.36
56	土師環	(15.0)	4.5		A B	B	褐色	25%	No.3143-3145
57	土師環	(14.8)	4.3		A B	B	褐色	50%	No.3486
58	土師環	(16.8)	4.7		A B	B	暗褐色	15%	No.974. 暗文環タイプだが無文 内面明褐色
59	土師碗	(18.0)	6.7		A B	B	茶褐色	35%	No.418

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
60	土師瓶	(18.0)	8.0		AB	B	褐色	25%	No.594-813
61	土師皿	(17.0)	3.1		AB	C	橙褐色	25%	No.288-681-2871 覆土
62	土師皿	(14.8)	3.5		AB	B	淡褐色	30%	No.2365-1987-1627 覆土(西半部)
63	土師皿	16.6	3.8		AB	A	淡褐色	55%	No.2517
64	土師皿	(15.6)	3.7		ABC	A	赤褐色	55%	No.380
65	土師皿	(16.6)	3.5		A BC	A	明褐色	25%	No.2408 覆土(西半部)
66	土師皿	16.2	3.6		BC	A	明褐色	50%	No.2438
67	土師皿	(16.4)	3.2		AB	C	明褐色	30%	No.1758-1759-2385
68	土師皿	15.4	3.6		BG	A	黄褐色	50%	No.2211
69	土師皿	15.3	3.7		AB	A	褐色	75%	No.1954-2192他
70	土師皿	(14.5)	4.0		AB	A	橙褐色	20%	No.3462
71	土師皿	(14.0)	3.0		AB	B	橙褐色	40%	No.2292-2295 覆土(西半部)
72	土師皿	16.4	3.6		ACD	B	褐色	75%	No.2138, 全体に風化 大きな石多敷含む
73	土師皿	(13.8)	3.3		A	B	暗褐色	20%	No.843-857
74	土師皿	(17.4)	3.5		AB	B	橙褐色	20%	No.2404
75	土師皿	16.5	3.9		AB	B	褐色	60%	No.2480-2481-3599 覆土(ペルト-西半部)
76	土師杯	10.4	3.4		AB	B	明褐色	60%	No.2677, 暗文杯系無文杯
77	土師杯	(12.5)	3.6		AB	B	橙褐色	20%	No.2678覆土(西半部) 暗文杯系無文杯
78	土師杯	(11.0)	2.7		AB	A	明褐色	20%	覆土(西半部) 暗文杯系無文杯
79	土師杯	11.9	4.1		AB	B	明褐色	70%	No.2663, 暗文杯系無文杯
80	土師杯	12.5	3.9		AB	B	明褐色	55%	No.755, 底部外面不整形の黒斑(径約0.5cm)あり
81	土師杯	(12.6)	3.6		AB	B	明褐色	25%	No.3326, 暗文杯系無文杯
82	土師杯	(12.0)	3.0		AB	A	橙褐色	10%	覆土(西半部)。暗文杯系無文杯
83	土師杯	(12.0)	3.3		AB	A	橙褐色	20%	No.2534, 底部内面布目状に底残る
84	土師杯	(12.0)	3.8		AB	B	明褐色	30%	覆土(西半部)。暗文杯系無文杯
85	土師杯	(14.5)	3.8		AB	A	明褐色	40%	覆土(西半部)。暗文杯系無文杯
86	土師杯	15.0	4.5		ABD	A	明赤褐色	65%	No.2402他。暗文杯系無文杯。外面黒斑あり
87	土師皿	(15.0)	3.3		AB	A	赤褐色	45%	No.2489
88	土師皿	(15.0)	3.0		AB	A	橙色	30%	No.101, 暗文なし
89	土師皿	16.0	3.5		AB	A	赤褐色	55%	No.2530-2532 覆土(西半部)
90	土師皿	(15.0)	3.9		AB	A	暗茶褐色	35%	No.2553-2556 覆土
91	土師皿	(17.0)	3.6		AB	A	赤褐色	30%	No.2653
92	土師皿	(16.0)	4.1		B	A	明褐色	30%	No.2452
93	土師皿	16.5	3.5		ABG	A	赤褐色	30%	覆土(西半部)
94	土師皿	(17.5)	4.2		ABG	A	赤褐色	50%	No.2340 覆土(西半部)
95	土師皿	(15.6)	4.0		AB	A	明赤褐色	25%	No.2538, 暗文なし
96	土師皿	16.0	4.3		AB	A	赤褐色	50%	No.2537-2539 覆土(西半部)
97	土師杯	(8.0)	4.5		G	A	褐色	70%	覆土(東半部 西半部)
98	土師杯	(8.0)	3.5		AB	B	褐色	25%	No.115, 底部黒斑あり
99	土師暗文杯	(11.2)	3.3		BD	A	明赤褐色	30%	No.1746, 内面放射暗文(下→上)
100	土師暗文杯	(10.8)	3.2		AB	A	明褐色	50%	No.409, 内面放射暗文
101	土師暗文杯	11.6	3.1		BF	A	淡橙褐色	55%	覆土最上層。内面放射暗文(下→上)
102	土師暗文杯	12.1	3.3		ABC	A	黄褐色	75%	No.2560, 内面放射暗文
103	土師暗文杯	12.0	3.0		ABC	A	赤褐色	70%	No.2218, 内面放射暗文(下→上)
104	土師暗文杯	(11.9)	3.1		ABD	A	明赤褐色	35%	No.3503, 内面放射暗文
105	土師暗文杯	(11.8)	3.3		AF	A	明赤褐色	30%	覆土(西半部)。内面放射暗文(下→上)
106	土師暗文杯	(12.0)	3.3		AB	A	明褐色	50%	No.417, 内面放射暗文(下→上)
107	土師暗文杯	12.1	3.6		AB	A	赤褐色	45%	覆土。内面放射暗文(下→上)
108	土師暗文杯	(12.1)	3.3		AB	A	明褐色	50%	No.1713, 内面放射暗文(下→上) 底部黒斑
109	土師暗文杯	11.5	3.4		ABC	A	黄褐色	80%	No.545-2526 覆土(西半部)。内面放射暗文(下→上)
110	土師暗文杯	(11.8)	3.0		AB	B	褐色	25%	No.3843, 内面放射暗文
111	土師暗文杯	(12.0)	3.0		AD	A	明赤褐色	30%	No.2405, 内面放射暗文
112	土師暗文杯	11.8	3.1		ABCD	A	明赤褐色	70%	No.675-2038, 内面放射暗文(下→上)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
113	土師陶文環	(11.6)	3.4		BC	A	赤褐色	20%	覆土(西平部)。内面放射暗文(下→上)
114	土師陶文環	(12.1)	3.6		AB	A	明褐色	25%	No.3097。内面放射暗文
115	土師陶文環	(11.8)	3.8		AB	A	明赤褐色	30%	No.72-2250。シャープな作り 内面放射暗文(下→上)
116	土師陶文環	(12.4)	3.0		AB	A	明赤褐色	45%	No.2287。内面放射暗文(下→上)
117	土師陶文環	12.0	2.8		BC	A	明褐色	30%	覆土(西平部)。内面放射暗文(下→上)
118	土師陶文環	(11.2)	3.1		ABC	A	明褐色	40%	No.194 上層(東)。内面放射暗文(下→上)
119	土師陶文環	(11.5)	3.6		AB	A	赤褐色	45%	覆土(西平部)。内面放射暗文(下→上)
120	土師陶文環	11.6	3.3		BC	A	赤褐色	60%	No.2184。内面放射暗文(下→上)
121	土師陶文環	(12.0)	3.0		AB	A	黄褐色	30%	No.3633。内面放射暗文(下→上)
122	土師陶文環	12.0	3.3		AB	A	赤褐色	45%	No.2073-2076 覆土(西平部)。内面放射暗文(下→上)
123	土師陶文環	(12.6)	2.7		BG	A	淡橙褐色	35%	覆土(ペルト)。内面粗い放射暗文(下→上)
124	土師陶文環	12.0	3.5		AB	A	赤褐色	70%	No.3140
125	土師陶文環	12.1	3.4		AB	A	赤褐色	75%	No.2798他。内面放射暗文(下→上)
126	土師陶文環	12.0	3.1		ABC	A	赤褐色	100%	No.2232-2337 覆土(西平部)
127	土師陶文環	(12.5)	3.0		ABC	A	赤褐色	25%	No.1721。内面放射暗文(下→上)右回り
128	土師陶文環	12.6	3.3		AB	A	赤褐色	80%	No.2685-2686 覆土(西平部)。内面放射暗文(下→上)
129	土師陶文環	12.5	3.4		ABC	A	赤褐色	85%	No.2290 覆土(西平部)
130	土師陶文環	(12.5)	3.6		AB	A	赤褐色	25%	覆土(西平部)。内面放射暗文(下→上)右回り
131	土師陶文環	12.4	3.4		AB	A	明褐色	45%	No.2323。内面放射暗文(下→上)
132	土師陶文環	(12.3)	3.6		BF	A	赤褐色	20%	No.1266。内面放射暗文(下→上)
133	土師陶文環	12.0	3.3		AB	A	赤褐色	35%	No.1541。内面放射暗文
134	土師陶文環	12.4	3.2		ABC	A	明褐色	75%	No.2220 覆土(西平部)
135	土師陶文環	(12.4)	3.6		AB	A	明赤褐色	50%	No.2717。内面放射暗文(下→上)
136	土師陶文環	12.4	3.6		AB	A	明赤褐色	70%	No.3293。覆土(西平部)他。内面放射暗文(下→上)
137	土師陶文環	(12.0)	3.3		B	A	赤褐色	25%	No.3467。内面放射暗文(下→上)
138	土師陶文環	(12.8)	3.2		AB	A	明褐色	35%	No.573。外面黒斑あり。内面放射暗文。風化
139	土師陶文環	(13.0)	2.9		AB	A	赤褐色	25%	No.2152 覆土。内面放射暗文(下→上)
140	土師陶文環	(13.0)	3.1		ABD	B	明赤褐色	35%	覆土(西平部)。内面放射暗文。帯面風化
141	土師陶文環	(12.6)	2.8		AB	A	橙褐色	50%	No.283-1147。内面荒れている。内面放射暗文
142	土師陶文環	(12.6)	3.7		HD	B	明赤褐色	40%	No.3559。内面放射暗文(下→上)
143	土師陶文環	(13.0)	3.4		AB	A	赤褐色	45%	No.401-403-447-899。内面放射暗文。風化
144	土師陶文環	12.2	3.5		AB	A	明赤褐色	75%	No.2491。内面放射暗文(下→上)右回り
145	土師陶文環	(12.2)	3.9		AB	A	明褐色	55%	No.2049-2050他 覆土(西平部)。内面放射暗文
146	土師陶文環	(12.9)	3.0		AB	A	明褐色	30%	No.3159。内面放射暗文(下→上)
147	土師陶文環	(12.2)	3.5		AB	A	黄褐色	30%	No.2011。内面放射暗文(下→上)
148	土師陶文環	12.7	3.6		AB	A	赤褐色	80%	No.2344 覆土(西平部)。内面放射暗文(下→上)
149	土師陶文環	12.0	3.4		AB	A	赤褐色	45%	No.3341。内面放射暗文(下→上)
150	土師陶文環	(12.2)	3.5		ABC	A	明褐色	50%	No.2767-2388
151	土師陶文環	(12.4)	3.6		ABD	A	赤褐色	30%	No.1840。内面放射暗文(下→上)
152	土師陶文環	(12.8)	3.0		BC	A	明褐色	30%	覆土(西平部)。内面放射暗文(下→上)
153	土師陶文環	(12.6)	3.3		B	A	明茶褐色	30%	覆土(西平部)。内面放射暗文(下→上)
154	土師陶文環	12.6	3.7		ABD	A	橙褐色	95%	No.287他。内面放射暗文。7-8単位に分割
155	土師陶文環	(12.5)	2.9		ABD	B	赤褐色	25%	No.2111。内面放射暗文(下→上)。口唇部磨滅
156	土師陶文環	12.0	3.9		AB	A	赤褐色	45%	No.798。内面放射暗文(下→上)
157	土師陶文環	(13.6)	3.0		ABD	A	明赤褐色	45%	No.256-293-304。内面放射暗文(下→上)
158	土師陶文環	(12.8)	3.4		ABD	B	明赤褐色	50%	No.2159-2398 覆土(西平部)。内面放射暗文
159	土師陶文環	(13.4)	3.2		AB	A	赤褐色	30%	No.2378。外面黒斑あり 内面放射暗文(下→上)
160	土師陶文環	(12.4)	3.7		ABC	A	赤褐色	30%	No.2903。内面放射暗文(下→上)
161	土師陶文環	(12.8)	4.1		AB	A	茶赤褐色	30%	No.2447。内面放射暗文(下→上)
162	土師陶文環	(12.8)	3.4		AB	A	橙褐色	45%	No.871-875。外面黒斑。内面共に荒れている
163	土師陶文環	(12.7)	3.7		AB	A	赤褐色	60%	No.2687。内面放射暗文(下→上)右回り
164	土師陶文環	(12.0)	4.0		AB	A	明褐色	45%	No.3540。内面放射暗文(下→上)
165	土師陶文環	13.5	3.7		B	A	赤褐色	40%	覆土(西平部)。内面放射暗文(下→上)

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存	備考
166	土師陶文環	(12.9)	3.6		A B D	A	明褐色	25%	No211. 内面放射暗文(下→上)
167	土師陶文環	(12.5)	3.6		A B D	A	明褐色	25%	No2431. 内面不規則な放射暗文
168	土師陶文環	(12.2)	3.6		A B	A	明赤褐色	30%	No2903. 内面放射暗文(下→上)
169	土師陶文環	(13.0)	3.5		A B	A	明褐色	70%	No2225-2226他 覆土(西半部). 内面放射暗文
170	土師陶文環	(12.8)	3.3		A B	A	明赤褐色	50%	No3418-3419. 内面放射暗文(下→上)
171	土師陶文環	(12.5)	3.9		B	A	赤褐色	35%	No2437-2432. 内面放射暗文(下→上)
172	土師陶文環	(12.4)	3.7		A B	A	明赤褐色	45%	No2105. 内面放射暗文(下→上)
173	土師陶文環	(12.7)	3.7		A B	A	赤褐色	30%	No2363. 内面放射暗文(下→上)
174	土師陶文環	13.0	4.1		A B G	A	明赤褐色	90%	No1751-2151. 内面放射暗文(下→上)
175	土師陶文環	(14.0)	4.2		A B	A	明赤褐色	25%	No2354. 内面放射暗文(下→上)
176	土師陶文環	(13.0)	4.0		A B	A	赤褐色	40%	No2394-3615. 内面放射暗文(下→上)
177	土師陶文環	(13.1)	4.0		A B D	A	明赤褐色	45%	No2345 覆土上層(西半部). 内面放射暗文
178	土師陶文環	(13.2)	3.8		A B	A	明赤褐色	35%	No2453. 内面放射暗文. 底部器壁厚い
179	土師陶文環	(13.8)	3.2		A B	A	明褐色	40%	No245. 内面放射暗文(下→上)
180	土師陶文環	(13.8)	3.5		A B	A	明赤褐色	25%	No2321 覆土(西半部)
181	土師陶文環	(14.0)	4.0		A B	A	明赤褐色	25%	No2215. 内面放射暗文(下→上). 外面黒斑
182	土師陶文環	(13.9)	4.1		A B D	B	明赤褐色	35%	No2594. 内面放射暗文. やや風化
183	土師陶文環	(14.2)	4.3		A B D	A	赤褐色	35%	No2535. 内面放射暗文(下→上)
184	土師陶文環	(13.7)	4.1		A B D	B	赤褐色	30%	No1277-1278. 内面放射暗文. 全体的に風化
185	土師陶文環	(14.0)	3.8		A B	A	橙褐色	40%	No898. 内面放射暗文(下→上)左回り
186	土師陶文環	13.9	4.7		A B	B	茶褐色	95%	No2903-2360 覆土(西半部)他. 内面放射暗文
187	土師陶文環	14.8	4.1		A B D	B	明赤褐色	25%	No2405. 内面放射暗文(下→上)
188	土師陶文環	(15.4)	4.1		A B	A	橙褐色	25%	No2562. 内面放射暗文
189	土師陶文環	(13.5)	5.1		A B	A	明褐色	45%	No2329-2019 覆土. 内面放射暗文(下→上)
190	土師陶文環	14.9	4.1		A B	A	赤褐色	70%	No2575-2430. 内面放射暗文(下→上)
191	土師陶文環	(15.0)	4.3		A B	A	明赤褐色	30%	No1710. 内面放射暗文
192	土師陶文環	(14.8)	4.8		A B	A	明赤褐色	25%	覆土最上層. 内面放射暗文(下→上)
193	土師陶文環	14.5	4.7		A B D	A	赤褐色	90%	No1780-2132他. 底部中心凹み. 内面放射暗文
194	土師陶文環	(15.2)	4.8		A D	B	茶褐色	50%	No2546 覆土(西半部). 内面放射暗文
195	土師陶文環	(16.0)	4.5		A B	B	橙褐色	30%	覆土最上層
196	土師陶文環	(15.6)	5.1		A B D G	A	明赤褐色	20%	No2178. 内面放射暗文(下→上)
197	土師陶文環	16.1	5.3		A B	B	明赤褐色	75%	No471. 内面放射暗文(下→上)
198	土師陶文環	(17.0)	5.6		A B D	A	明赤褐色	30%	No2507-346 覆土(西半部). 内面ラセン+放射暗文
199	土師陶文環	(16.5)	4.8		A D	A	明赤褐色	30%	No677-531 覆土(西半部). 内面ラセン+放射暗文
200	土師陶文環	16.8	5.6		A B	B	暗褐色	90%	No1504-1503他. 内面放射暗文(下→上)
201	土師陶文環	(18.7)	5.7		A B D	A	明赤褐色	30%	No3492. 内面ラセン+斜格子暗文 器面風化
202	土師陶文環	19.6	7.2		A B	A	赤褐色	80%	No1783-2134-2135. 内面ラセン暗文+斜格子暗文
203	土師陶文環	(21.0)	6.6		A B	B	橙褐色	35%	No1636-2149他 覆土. 内面放射暗文
204	土師陶文環	(19.6)	4.5		B	A	明褐色	40%	No3148. 畿内産暗文環. 放射暗文2段+ラセン暗文
205	土師陶文環	16.0	3.3		A B D	A	明赤褐色	70%	No3534. 内面放射暗文(下→上) 極めて雑
206	土師陶文環	(1.0)			B	B	明赤褐色	5%	No2160. 底部外周曇斑
207	須恵蓋	(12.7)	3.7		B片	C	灰褐色	30%	No3490. 末野産. 天井部回転ヘラケズリ後クロコナデ
208	須恵蓋	(13.0)	2.0		B片	B	暗灰色	45%	No316-2706. 末野産. 天井部全面クロコナデ
209	須恵蓋	(12.3)	3.3		C片	A	青灰色	45%	No584-2236. 末野産. 天井部回転ヘラケズリ後クロコナデ
210	須恵蓋	(13.0)	2.8		C片	A	青灰色	20%	No844. 末野産. 径11cm前後の環と組合う
211	須恵蓋	12.4	2.5		C片	A	灰色	60%	No2174. 末野産か?
212	須恵蓋	(13.8)	2.5		B片	A	灰色	35%	覆土. 秋間産. 焼きムラと黒色粒子の吹き出しあり
213	須恵蓋	(13.0)	2.3		B C	A	青灰色	15%	覆土. 末野産. 径11cm前後の環と組合う
214	須恵蓋	(14.4)	2.5		C片	B	灰色	30%	No1376. 末野産. 内面のかえり退化
215	須恵蓋	17.6	3.5		C片	B	淡黄灰色	50%	No1109-2754-2755-2757. 末野産. ロクロ左回転
216	須恵蓋	(17.2)	4.4		H片	C	灰褐色	70%	No2420. 末野産. 全体的に摩滅
217	須恵蓋	(18.0)	4.0		C片	B	淡黄灰色	25%	No35. 末野産. 天井部クロコナデ
218	須恵蓋	(18.8)	3.4		C片	A	灰色	75%	No596-2154. 末野産. 天井部ヘラケズリ後クロコナデ

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存	備考
219	須恵蓋	17.2	4.0		片	B	淡黄灰色	60%	No1873-1674他。末野産
220	須恵蓋	17.2	4.6		C片	A	淡灰褐色	60%	No2558-2515。末野産。ロクロ左回り
221	須恵蓋	18.0	4.7		C片	B	暗灰色	95%	No2230。末野産。かえりは痕跡程度
222	須恵蓋	(18.2)	3.0		C片	A	灰色	35%	No757。末野産。ロクロ左回転 内面中心部摩滅
223	須恵蓋	(18.0)	3.9		C片	A	青灰色	35%	No1354-2231。末野産。天井部回転ヘラケズリ後ロクロナデ
224	須恵蓋	(17.6)	4.1		H片	C	黄灰褐色	50%	No564-1849-3529。末野産
225	須恵蓋	(18.6)	3.8		C片	C	灰色	20%	No410-1976他。末野産。天井部回転ヘラケズリ後ロクロナデ
226	須恵蓋	18.6	4.1		C片	B	灰色	90%	No2467-2573。末野産
227	須恵蓋	18.5	4.3		C片	B	灰色	70%	No2492-3188他。末野産
228	須恵蓋	(19.0)	-2.8		C片	A	青灰色	40%	No2524。末野産。天井部落ち込む
229	須恵蓋	19.4	3.9		C片	B	灰褐色	75%	No598-841。末野産か。
230	須恵蓋	21.2	5.2		C片	B	灰色	60%	No2106他。末野産。径19cm前後の坏と組合う
231	須恵蓋	21.0	4.0		C片	A	青灰色	45%	覆土(西半部)。末野産。内面同心円当具痕跡
232	須恵蓋	(20.6)	2.3		C片	B	暗灰色	15%	No2194。末野産。径18cm前後の坏と組合う
233	須恵蓋	(18.2)	1.7		BC	B	黄灰白色	5%	覆土。群馬(秋田産か)。かえり突出
234	須恵蓋	(18.2)	2.2		B	B	灰白色	10%	No3438。群馬(秋田産か)かえり突出(径16cm)
235	須恵蓋	17.6	3.7		C片	A	灰色	70%	No484-508。末野産。天井部回転ヘラケズリ後ロクロナデ
236	須恵蓋	(18.0)	2.4		B片	A	暗灰色	25%	覆土(西半部)。末野産。天井部回転ヘラケズリ後ロクロナデ
237	須恵蓋	(18.0)	2.4		C片	A	青灰色	25%	No2579。末野産。ロクロ左回転
238	須恵蓋	(17.8)	2.2		片	B	淡灰色	20%	覆土。末野産
239	須恵蓋	(18.0)	3.4		C片	B	暗灰褐色	25%	No3627。末野産
240	須恵蓋	(17.8)	3.3		片	C	黄灰褐色	15%	No1164。末野産
241	須恵蓋	(19.0)	2.7		片	B	黄灰色	20%	No3509。末野産。ロクロ左回転
242	須恵蓋	(18.8)	3.3		C片	A	灰色	30%	No2331。末野産。ロクロ左回転 歪みあり
243	須恵蓋	(19.0)	2.8		B片	B	灰色	15%	覆土。末野産。ロクロ左回転
244	須恵蓋		2.3		C片	B	暗青灰色	80%	覆土。末野産。つまみ完存
245	須恵蓋		1.4		BC	B	淡灰色	80%	No213。末野産。つまみ完存
246	須恵蓋		2.7		片	C	灰褐色	60%	No2569。末野産。天井部回転ヘラケズリ後ロクロナデ
247	須恵蓋		2.1		C片	B	灰白色	90%	No3625。末野産。つまみ径4.7cm
248	須恵蓋		2.3		C片	B	淡灰色	90%	No2487。末野産
249	須恵蓋		1.9		C片	B	淡灰色	25%	No6。末野産
250	須恵蓋		2.0		BC片	B	淡灰色	80%	No1018。末野産。内面使用による摩滅 ロクロ左回転
251	須恵蓋		2.5		C	C	淡灰色	20%	No534-1723。末野産
252	須恵蓋		1.1		A F片	C	灰白色	60%	覆土。末野産か。リングつまみ
253	須恵蓋		1.6		BC H	A	淡灰色	80%	覆土最上層。群馬産
254	須恵蓋	(20.0)	3.5		H片	B	灰色	30%	No3155-3135-3352。末野産
255	須恵蓋	(19.5)	2.4		片	B	灰色	30%	No3340-3280。末野産。ロクロ左回転
256	須恵蓋	(19.4)	2.7		C片	B	灰色	20%	No3643。末野産
257	須恵蓋	(19.5)	2.7		片	C	黄灰褐色	40%	No902。末野産。ロクロ左回転
258	須恵高台坏	(10.5)	4.3	(6.1)	BC H	C	黄灰色	15%	No2194-2845。末野産?。窯土粗い
259	須恵高台坏	15.6	4.8	9.8	C片	C	黄褐色	85%	No2676。末野産。底部全面回転ヘラケズリ後ロクロナデ
260	須恵高台坏	16.9	7.5	11.2	CH片	C	淡灰色	65%	No2411-2227。末野産。底部+体部下端回転ヘラケズリ
261	須恵坏	(10.7)	3.6		C片	B	淡黄褐色	60%	No1810。末野産。底部回転ヘラケズリ 一部橙褐色
262	須恵坏	(11.0)	3.5	(7.0)	C片	B	灰色	15%	覆土。末野産か。粗砂粒含む紫土やや粗い
263	須恵坏	(11.0)	3.6	(8.0)	B片	A	灰褐色	20%	No3120。末野産か。外面全体に降灰あり 調整不明瞭
264	須恵坏	(11.4)	3.7	(8.6)	C片	B	暗灰色	35%	覆土(西半部)。末野産。ロクロ左回転
265	須恵坏	(11.2)	3.5	7.8	C片	A	灰色	45%	No236。末野産。底部手持ちヘラケズリ
266	須恵坏	(12.0)	4.5	(8.0)	BC片	A	青灰色	30%	No2418。末野産。底部手持ちヘラケズリ ヘラ記号?[-]
267	須恵坏	(12.0)	3.0		B	A	青灰色	15%	覆土。末野産?
268	須恵坏	12.7	4.3	8.0	BC片	C	淡黄灰色	60%	No2141-2413。末野産か?。底部外面赤色顔料付着
269	須恵坏	(13.8)	3.7	9.8	BC片	C	灰褐色	30%	No2745。末野産。底部全面回転ヘラケズリ
270	須恵坏	(14.0)	4.1	(9.4)	CH片	C	淡黄灰色	20%	No465-1653。末野産
271	須恵坏	(15.5)	3.8		BD片	C	灰色	15%	No280。末野産

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
272	須恵坏	(16.0)	4.1		C片	A	灰色	45%	No1974. 未野産。底部全面回転ヘラケズリ
273	須恵坏	(16.0)	4.4		C片	B	淡灰色	15%	No1300-183. 未野産
274	須恵坏	(16.7)	4.0	(11.6)	C片	B	灰色	10%	No2551. 未野産
275	須恵坏	16.4	3.4		C	B	灰白色	5%	群馬産。径1mm前後の石英目立つ
276	須恵坏	(17.0)	3.5		C片	A	青灰色	35%	覆土。未野産。片岩少量。体部下端回転ヘラケズリ
277	須恵坏	(17.0)	4.5		C片	B	灰色	30%	No2516-2554. 未野産。底部全面回転ヘラケズリ
278	須恵坏	(18.0)	4.2		C片	C	黄灰色	20%	No648. 未野産。裏地土粗い
279	須恵坏	16.8	4.7	12.0	C片	B	淡灰色	90%	No924-941-971-1036. 未野産
280	須恵碗	(17.0)	6.4	(12.0)	C片	B	淡灰色	30%	No1184-3250他。未野産。底部十体部下端回転ケズリ
281	須恵坏		1.3		片	C	黄灰色	95%	No246-306-1137-1395. 未野産
282	須恵坏		2.4	10.6	C片	C	褐色	80%	No2339. 未野産
283	須恵坏		3.2	(12.0)	C片	B	灰色	40%	No2258. 未野産。口クロ左回転 底部回転ヘラケズリ
284	須恵脚鉢	(13.2)	6.8		BC	A	暗灰色	10%	覆土。秋田産
285	須恵脚鉢	(13.2)	5.3		片	A	暗青灰色	15%	覆土。未野産?
286	須恵脚鉢		3.0		C片	B	淡灰色	45%	No2664. 未野産
287	須恵長頸瓶	10.2	11.5		B	A	明灰色	80%	No1355. 湖西産。裏地土や粗い
288	須恵長頸瓶	(11.4)	15.9		F	A	灰白色	65%	No205-389-2696. 東海産か。黄緑色の自然釉付着
289	須恵長頸瓶		14.3		C	B	明灰色	25%	No193-2198他。湖西または群馬産か。列点文
290	須恵長頸瓶		1.8		C片	B	青灰色	10%	覆土。未野産
291	須恵長頸瓶		5.1		C片	A	青灰色	15%	No2156. 未野産。胴部列点文 部分的に2段
292	須恵壺		8.5		C片	B	灰褐色	15%	No2342. 未野産。器種不明確
293	須恵壺		10.0	(8.8)	BC片	B	青灰色	35%	No423-600-915. 未野産
294	須恵長頸瓶		10.8	(7.4)	BC	A	明灰色	35%	No2601-2614. 湖西産
295	須恵高台盤		3.4	(9.5)	C片	A	青灰色	35%	No2472. 未野産。底部底面寧滅
296	須恵台付壺		3.2	9.5	BC片	A	青灰色	90%	No929. 未野産。裏地土粗い 大粒の石英片岩含む
297	須恵蓋	(11.2)	1.1		B	A	暗灰色	10%	覆土。湖西または秋田産。黒色粒子吹き出す
298	須恵短頸壺	(10.6)	5.3		C片	B	暗黄灰色	30%	No1280. 未野産
299	須恵大甕	(42.0)	7.9		C片	C	暗灰褐色	10%	No2423-2695. 未野産。胴部沈澱区画十條波状文2段
300	須恵甕				BC	A	暗灰色		No2373. 群馬産。白色粒子多量
301	須恵壺				BC	A	明灰色		No1651-1941他。群馬産か? 裏地土粗い
302	須恵甕				C	A	茶褐色		No2561-3506他。産地不明。細かい砂粒多い
303	須恵大甕		27.4		C片	A	青灰色	20%	No2433-2434他 覆土(ペルト・西半部・東半部)。未野産
304	土師小型甕	(12.4)	6.6		AB	B	褐色	40%	No2456. 胴部外面二次被熱により器面剥落
305	土師小型甕	(12.8)	4.9		G	B	褐色	45%	No2435-2442. 胴部外面二次被熱により器面剥落
306	土師小型甕		14.4	8.3	AG	B	褐色	70%	No3595
307	土師小型甕		16.0	7.3	ABGH	A	淡褐色	80%	No1582-1608他。2片あり接合しない
308	土師小型甕		16.0	10.2	AB	B	褐色	50%	No3098-3563-2485-2712. 器面剥落
309	土師小型甕		15.7	15.0	ADG	A	淡褐色	65%	No2682-2442
310	土師甕	(23.0)	12.0		BC	A	淡褐色	15%	No1006
311	土師甕	(24.6)	7.9		DG	A	褐色	20%	No2518-3514
312	土師甕	(22.8)	7.6		AG	A	橙褐色	25%	No1712
313	土師甕	(24.7)	8.5		AG	A	橙褐色	35%	No3620
314	土師甕	(24.2)	10.0		AB	B	褐色	25%	No3696
315	土師甕	(23.2)	10.7		ABGH	A	明褐色	25%	No3566
316	土師甕	(24.6)	8.1		AG	A	明褐色	20%	No2504-2581
317	土師甕	(22.2)	9.6		AB	A	明褐色	35%	No3080
318	土師甕	25.2	8.5		BDG	B	橙褐色	15%	No2626
319	土師壺	(26.0)	5.8		AB	A	橙褐色	20%	No1389
320	土師壺	(26.0)	6.3		A	A	褐色	30%	No2498 覆土(西半部)
321	土師壺	(21.8)	7.0		ABD	A	褐色	20%	No1112
322	土師壺	23.9	4.5		G	A	橙褐色	65%	No2380-3601-3624-3680-3566-3607
323	土師壺		7.0	5.3	AB	B	赤褐色	70%	No1702. 外面二次被熱を受ける 器壁厚い
324	土師壺		6.5	4.9	AB	A	橙褐色	75%	No1828-1715-1744. 外面二次被熱

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
325	土師甕		5.0	(5.4)	AB	B	褐色	40%	覆土(西半部)。底部付近二次被熱	
326	土師甕		2.9	4.5	AB	B	橙褐色	50%	覆土(西半部)。底部砂底 器壁厚い	
327	土師甕		4.5	3.9	ABD	B	褐色	30%	No2782-3082。外面黒灰あり	
328	土師小型壺	(16.0)	6.4		ADG	A	褐色	30%	No1900-2351	
329	土師小型壺	(18.0)	8.0		AG	B	褐色	40%	No276-277	
330	土師小型壺	(13.7)	6.6		G	B	淡褐色	20%	No2445	
331	土師鉢?	(26.8)	9.4		ABGH	A	褐色	35%	No3353-3673。風の可能性もある	
332	土師瓶	24.2	9.4		AB	B	黄褐色	35%	No1358-3281-3275。外面黒灰あり	
333	土師小型瓶	19.2	15.9		AB	B	橙褐色	85%	No2458-2461他。口径2.7cm。外面器面剥落	
334	土師瓶	32.0	33.5		BDG	A	明褐色	75%	No3602-3605他。口径11.0cm。外面ケズリ後ミガキ	
335	土師瓶?	(27.8)	7.9		ABGH	A	淡褐色	20%	No3473	
336	土師瓶	(25.8)	8.0		BG	A	褐色	20%	No1559-2675	
337	土師瓶	(26.4)	10.8		BG	A	暗褐色	15%	No1885	
338	土師瓶		4.5	3.4	AB	B	褐色	35%	No2372	
339	土師瓶		2.0	(7.6)	B	B	淡褐色	20%	No3273。外面風化 推定口径4.0cm	
340	土師壺		5.0	(9.2)	G	B	暗褐色	50%	No2665	
341	土師壺		2.7	7.0	AB	D	赤褐色	50%	No2425-3492	
342	土師小型壺		6.0		AB	A	橙褐色	70%	No3690。外面ケズリ後部分的にミガキ。円形黒斑	
343	土製支脚?	(11.2)			AB	A	褐色	30%	No2466-809。壺と同一形態。胴部焼成前の穿孔	
344	不明		2.7	7.2	B	A	赤褐色	70%	No3565。内面放射暗文。外面黒斑	
345	土師台付甕		7.0	(11.6)	AB	B	橙褐色	45%	No2307-2308。胴部外面二次被熱により器面剥落	
346	ヒコア土器	(5.8)	4.2		B	A	明褐色	25%	No2031	
347	ヒコア土器	(5.9)	3.5		BG	A	橙褐色	15%	覆土	
348	ヒコア土器	(6.0)	3.1		ABGH	A	褐色	20%	No604	
349	ヒコア土器		5.5	2.6	4.9	ABGH	B	褐色	100%	覆土層(西半部)。ヘラナデ、指ナデ。口縁部破打つ
350	ヒコア土器		1.7	4.0	AB	A	明褐色	90%	覆土(バツ)。外面ナデ	
351	土製支脚		7.6		BG	B	黄褐色	50%	No2693 覆土(西半部)。上面砂底。外面雑なナデ	
352	刀子	残長4.0cm。								
353	鉄鏃	No1102。残長2.6cm。平造り。三角形鏃								
354	不明鉄製品	残長1.6cm。棒状。No355と同一か?								
355	不明鉄製品	No3125。残長8.1cm。棒状								
356	不明鉄製品	覆土上層(西半部)。残長4.6cm。棒状								
357	不明鉄製品	残長2.9cm。棒状								
358	土罐	No2179。長さ6.3cm。最大径1.9cm。口径0.5-0.7cm。重さ17.85g。残存100%								

第3号特殊遺構(第315図)

第3号特殊遺構は47・48-13グリッドに位置する。平面形態は不整形で、当初住居跡を想定して調査にあつたが、非常に深く、側壁はオーバーハングする部分があるなど、通常の住居跡とは明らかに性格が異なるため特殊遺構とした。規模は長径2.85m、短径2.45m、深さ1.92mである。底面は概ね平坦であるが、一端は土壌状に更に深く掘り込まれていた。貼床はない。

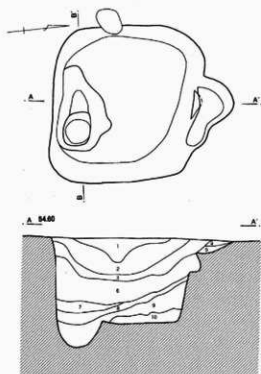
埋土は最下層に黒色土が堆積するが、その上部は基本的にロームブロックを多量に含む層が介在し、自然堆積とは思われない。

出土遺物は土師器環・暗文環・甕・壺、須惠器環・碗・

蓋・甕・鉢・高盤がある(第316図)。土師器環は平底風のものがあり(3・4)、扁平な器形である。暗文環は平底形態で、放射十螺旋暗文が施文される(5)。須惠器環は全体の判明するものはないが、8・9の底部は回転糸切り後、周辺部を回転ヘラケズリ調整されている。11は全面回転ヘラケズリ調整で混入か。10は無台碗と思われる。12はボタン状のつまみをもつ蓋である。13は高盤脚部か。脚部透穴が2孔残る。須惠器は南比企産の比率が比較的高い。

時期は熊野Ⅲ期を中心にⅣ期にかけてのものが含まれていると考えておく。性格は不明とせざるを得ない。

第315図 A区第3号特殊遺構



SX03

- 1 暗茶褐色土 ロームブロック多量・焼土粒子微量
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量
- 4 ロームブロック層
- 5 暗褐色土 ローム粒子少量
- 6 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量
- 7 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量
ロームブロック多量
- 8 黒色土 ローム粒子少量
- 9 黒褐色土 ローム粒子多量
- 10 黒色土

第121表 A区第3号特殊遺構出土遺物観察表 (第316図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(12.1)	2.5		B	A	褐色	40%	覆土
2	土師環	(14.0)	3.4		B G	B	褐色	25%	上層
3	土師環	(14.1)	2.8	(11.1)	B	B	淡褐色	25%	覆土。サンドイッチ状に青っぽい還元層挟む
4	土師環	(13.0)	2.6	(10.3)	AB	A	橙褐色	20%	覆土
5	土師文環	(14.2)	2.5	10.9	AB	A	赤褐色	60%	覆土。内面放射十ラセン暗文
6	須恵環	(14.4)	3.2		B針	B	灰黄白色	35%	覆土。南比企産
7	須恵環	(13.4)	3.4		B F	B	黄褐色	10%	覆土。未野産
8	須恵環		3.3	7.1	針	A	紫灰色	35%	覆土。南比企産。底部B3手法
9	須恵環		1.4	(7.2)	B針	A	紫灰色	30%	覆土。南比企産
10	須恵碗	(16.0)	4.9		針	A	青灰色	20%	上層。南比企産
11	須恵環		0.7	10.7	D片	C	灰褐色	80%	覆土。未野産。底部3a手法
12	須恵蓋		1.5		C H片	C	黄灰色	90%	覆土。未野産。つまみ径3.9cm
13	須恵高蓋		6.7		B F	C	淡灰色	20%	覆土。未野産。高蓋脚部片 穿孔2孔残る
14	須恵甕	(39.0)	6.5		B針	A	灰褐色	20%	覆土 南比企産
15	須恵鉢	(25.0)	3.5		B片	A	青灰色	10%	覆土。未野産
16	須恵壺	(16.0)	5.4		C片	B	灰色	10%	覆土。未野産
17	土師壺	(20.0)	12.3		AB	B	茶褐色	20%	覆土
18	土師壺		3.0	(10.0)	AB	A	褐色	20%	覆土
19	土師甕		4.2	4.5	AB	A	褐色	80%	覆土

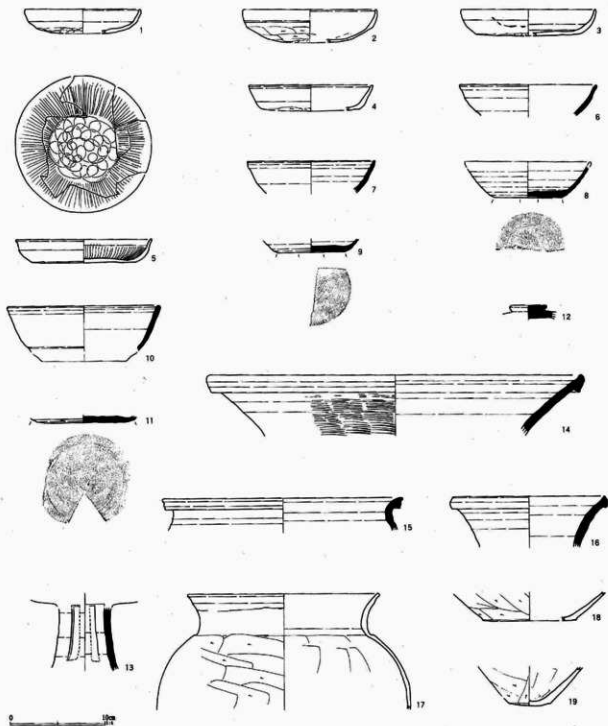
A区第4号特殊遺構 (第317図)

A区第4号特殊遺構は43・44-11グリッドに位置する。平面形態は不整形で張出状の浅い土壌が3基付設されている。底面は中央部にある畝状の高まりによって南北2つの土壌に分割される。規模は長

径4.38m、短径3.90m、深さ1.20mである。

中央部の畝状の高まりは、貼床面と思われる硬化面が残存しており、本遺構が本来住居跡であったことを示している。北半の底面が比較的平坦であることも住居掘り方と考えれば理解できる。

第316図 A区第3号特殊遺構出土遺物



北半部底面には不定形土塊(SK 4)が掘り込まれていた。南半部は全体に掘り下げられ、底面は凹凸が激しい。

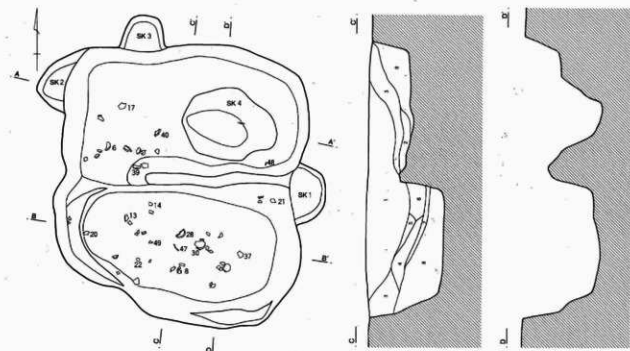
埋土は9層に分層されたが、全体に焼土粒子や炭化物粒子、ロームブロックの混入が多い点特徴である。明らかに焼土混じりの土を投棄したような状

況が窺われた。

出土遺物は比較的少量に検出された。おそらく、焼土などと共に投棄されたものであろう。器種としては土師器環・皿・暗文環・甕・甌、須恵器環・蓋・壺・円面甕、石製紡錘車、鉄製品がある(第318・319図)。

1~10は土師器環。北武蔵型環が主体であるが、

第317図 A区第4号特殊遺構



SX04

- | | | |
|---|------|----------------------------|
| 1 | 褐色土 | 焼土粒子多量、ローム粒子中少量 |
| 2 | 褐色土 | 焼土粒子・灰多量 |
| 3 | 暗褐色土 | ロームブロック中多量、焼土粒子少量 |
| 4 | 暗褐色土 | ロームブロック中多量、焼土粒子少量
炭化物多量 |
| 5 | 褐色土 | 焼土粒子多量、ローム粒子中少量 |
| 6 | 黒色土 | ロームブロック混入 |
| 7 | 褐色土 | 黒色土・ローム粒子多量 |
| 8 | 黒色土 | ロームブロック混入、焼土粒子多量 |
| 9 | 褐色土 | ロームブロック・ローム粒子中多量 |

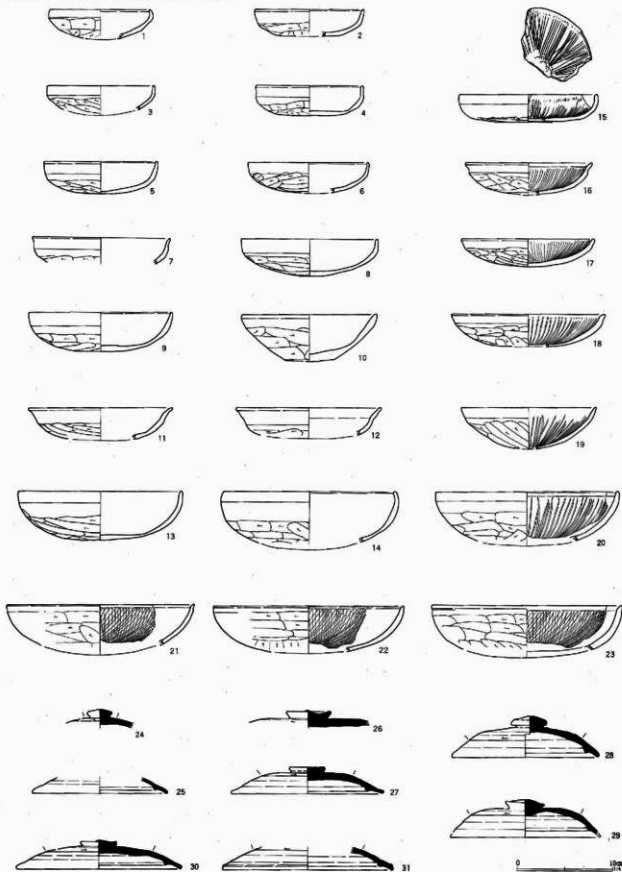
10は非定形的な坏。13・14は大振りで、椀タイプである。11・12は皿。15～23は暗文坏。15は平底暗文坏で、他の暗文坏よりも型的には新しいタイプである。16～20は丸底で、内面に放射暗文が施文される。21～23は大振りで、内面斜格子暗文が施文されている。

24～31は須恵器蓋。擬宝珠またはボタン状のつまみで、内面にかえりをもつ。32・33は須恵器坏。底面

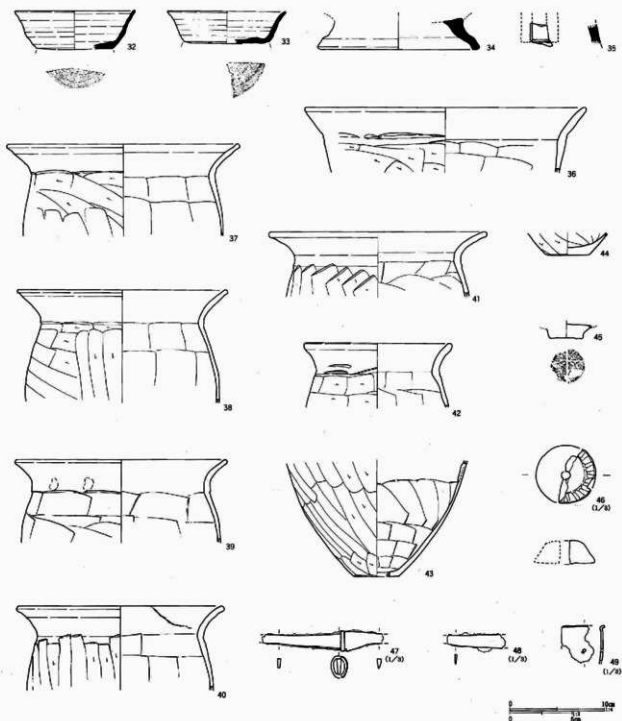
は全面回転ヘラケズリ調整されている。34は壺脚部か。35は片面視脚部片であろう。方形透かしと平行沈線がある。36は土師器瓶と思われる。37～44は甕。42は小型甕である。45は器種不明。底面に木葉痕が残る。46は石製紡錘車。47・48は刀子。49は不明鉄製品である。小孔が穿たれている。

土壌の性格は不明確であるが、廃絶住居の床面を

第318图 A区第4号特殊遗物出土文物(1)



第319図 A区第4号特殊遺構出土遺物(2)



掘り抜いて、粘土探掘壕として再利用した可能性が考えられる。とは言うものの、底面は黒色帯で止まっており粘土はない。土取り穴とした方が正確であろう。廃絶住居を利用したのは地表面から掘削する労力を削減するためであろう。土取り後の窪地は廃棄土壌として人為的に埋め戻されたものと推定され

る。出土遺物の時期は比較的近くまとっており、大半は熊野Ⅱ期に属する。古い様相を示すものは1の土師器坏でⅠ期、新しい様相を示すものは15の平底暗文坏で、出現がⅡ期にあると見るのは難しく、Ⅲ期が相当であろう。Ⅰ期に遡る遺物が少ないことから、Ⅱ期に廃絶した住居跡をその直後に土取り穴として

第122表 A区第4号特殊遺構出土遺物観察表 (第318-319図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(10.4)	3.1		AB	A	褐色	25%	覆土
2	土師環	(11.4)	2.8		AB	A	褐色	35%	覆土上層
3	土師環	(11.2)	2.5		AG	B	褐色	35%	覆土上層
4	土師環	(11.0)	3.2		AB	A	橙褐色	30%	覆土上層
5	土師環	(11.8)	3.3		AB	B	褐色	35%	覆土
6	土師環	12.6	3.2		BG	A	橙褐色	60%	No.46. 上層
7	土師環	(14.4)	2.7		AB	B	褐色	30%	覆土
8	土師環	14.3	3.9		AB	A	褐色	75%	No.18. 上層
9	土師環	(15.0)	4.2		AB	A	橙褐色	50%	覆土下層
10	土師環	13.8	5.0	(5.2)	BC	B	黄褐色	45%	覆土。雑なつくり。黒斑あり。内底面風化
11	土師皿	(15.0)	3.3		AB	B	褐色	35%	覆土
12	土師皿	(15.0)	2.9		AB	B	褐色	20%	覆土
13	土師環	17.1	5.2		AB	A	褐色	75%	No.28. 中層
14	土師環	18.0	5.4		ABG	A	褐色	65%	No.31. 中層。同一個体2片あり接合しない
15	土師陶文環	(14.4)	2.8		AG	A	明褐色	20%	覆土。内面放射+ラセン暗文
16	土師陶文環	(13.2)	3.3		AB	A	橙褐色	35%	覆土上層
17	土師陶文皿	(13.8)	2.9		AC	A	明褐色	35%	No.51. 下層
18	土師陶文環	(16.0)	3.4		AC	B	淡褐色	20%	覆土上層
19	土師陶文環	(14.2)	4.4		ACG	A	明褐色	30%	覆土上層
20	土師陶文環	(19.0)	5.2		AB	A	淡褐色	20%	No.34. 中層
21	土師陶文環	(19.7)	4.3		AB	A	橙褐色	10%	No.4. 中層
22	土師陶文環	(20.0)	4.8		AB	A	橙褐色	10%	No.22. 上層
23	土師陶文環	(20.0)	4.7		AB	A	橙褐色	20%	覆土下層。内面斜格子暗文、黒斑あり
24	須恵蓋		2.0		片	A	灰色	70%	覆土下層。未野産
25	須恵蓋	(14.0)	1.7		BC	A	青灰色	20%	覆土上層。未野産か
26	須恵蓋		1.7		B片	A	灰色	15%	覆土下層。未野産
27	須恵蓋	(15.7)	2.9		C片	A	青灰色	20%	覆土。未野産。つまみ完存
28	須恵蓋	15.3	4.4		C片	C	灰褐色	55%	No.8. 中層。未野産。ロクロ逆時計回り
29	須恵蓋		3.7		C片	C	灰褐色	20%	覆土上層。未野産。ロクロ逆時計回り
30	須恵蓋	(17.2)	3.0		C片	A	青灰色	60%	No.10. 中層。未野産
31	須恵蓋	(17.7)	2.3		C片	B	灰色	20%	覆土上層。未野産
32	須恵環	(12.5)	4.0	(8.0)	C片	B	灰色	20%	覆土上層。未野産
33	須恵環	(12.3)	3.3	(9.0)	A片	C	灰褐色	20%	覆土下層。未野産
34	須恵壺		3.3	(16.0)	B片	A	灰色	20%	覆土上層。未野産。壺脚部片か
35	須恵円面鏡				BE	B	青灰色		覆土。未野産か。円面鏡脚部。両端に方形透孔
36	土師瓶	(29.3)	6.9		AG	A	褐色	15%	覆土
37	土師甕	(24.0)	9.6		BG	A	淡褐色	15%	No.5. 上層
38	土師甕	(21.8)	12.0		AB	A	褐色	15%	覆土
39	土師甕	(21.7)	8.8		AB	A	明褐色	20%	No.38. 下層
40	土師甕	(21.4)	8.9		ABH	A	褐色	20%	No.45. 下層
41	土師甕	(22.3)	7.0		AB	A	褐色	20%	覆土
42	土師小型甕	(14.8)	6.9		ABG	B	褐色	30%	覆土
43	土師甕		12.3	(4.8)	AG	A	明褐色	25%	覆土
44	土師甕		2.4	4.6	AB	B	暗褐色	80%	覆土
45	土師小型甕?		1.5	3.5	AB	B	褐色	80%	覆土
46	石製紡錘車	覆土上層。推定径4.7cm。高さ1.8cm。孔径0.7cm。重さ21.0g							
47	刀子	No.9. 中層。残長9.5cm。縫装着							
48	刀子	No.2. 中層。残長4.3cm。刃部片							
49	不明鉄製品	No.32. 中層。残長2.9cm。小孔あり							

使用し、更に同期中にはほぼ埋没したと想定しておきたい。

A区第5号特殊遺構 (第320図)

A区第5号特殊遺構は、43・44-11グリッドに位置する。重複する第6号特殊遺構及び第132号土壌に切られている。第6号特殊遺構は形態や埋土の状態が酷似しており、本遺構と時期的にも性格的にも関連するものと考えられる。

平面形態は不整形長方形で、規模は長径4.50m、短径3.60m、深さ1.14mである。

掘込みは不規則で、底面は凹凸が激しい。埋土はロームブロックと焼土粒子が多量に含まれており、明らかに人為的に埋め戻されたものである。

遺物は比較的多いがすべて破片である。器種的には土師器・皿・暗文杯・甕・壺・台付甕、須恵器・壺・長頸瓶・甕・盤・壺、鉄製品がある(第321～323図)。

1～11は土師器。1は暗文杯系の杯であるが、暗文は施文されない。2～11は丸底形態の北武蔵型杯である。12～14は皿。14は系譜がよくわからない。15～24は暗文杯である。15～20は丸底形態で、内面放射暗文が施文される。21・22は斜格子暗文が施文されている。23・24は扁平な器形で、24は平底化している。放射暗文+螺旋暗文が施され、体部ヘラケズリ

調整。第6号特殊遺構に帰属するものか。

25～33は須恵器蓋。内面にはかえりが付き、流量差がある。34～39は須恵器杯・碗である。36は碗タイプである。底部は手持ちヘラケズリ調整。40は盤。41～44は須恵器壺・瓶類である。41・44はきめ細かい胎土で湖西産か。42は砂っぽく肌目もやや粗い。秋間産か。43はきめ細かい胎土で、胴部外面は銀化している。東海産であろう。45～47は甕・壺類。48～50・52は土師器壺、51・53は土師器甕である。58は鉄製の鉄の可能性はある。

出土遺物の時期は熊野Ⅱ期が主体となる。遺構の性格は不明確であるが、第4号特殊遺構と同様、土取り塚と考えられ、証拠はないが、本来住居跡であった可能性は否定できない。埋土や出土遺物の時期も第4号特殊遺構とほぼ一致している。

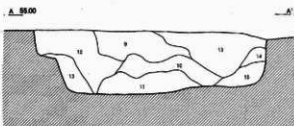
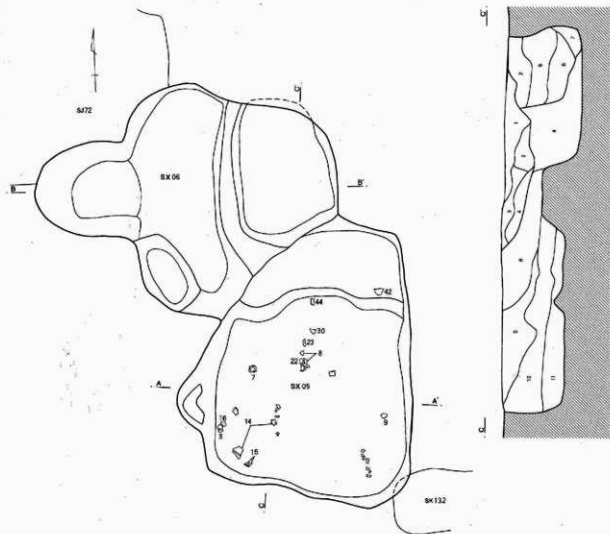
A区第6号特殊遺構 (第320図)

A区第6号特殊遺構は、43・44-11グリッドに位置する。第5号特殊遺構を切り、第72号住居跡に上面を削平されていた。平面形態は不整形長方形で、西側に円形土壌が付設されている。規模は長径4.80m、短径3.66m、深さ1.22mである。

第123表 A区第5号特殊遺構出土遺物観察表 (第321～323図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師杯	11.8	3.2		ABCD	A	褐色	60%	上層・下層。口縁内面端部段をもつ
2	土師杯	(11.7)	3.4		AC	A	淡褐色	20%	上層・下層
3	土師杯	(12.0)	3.4		ABCD	A	褐色	25%	No.19, 中層
4	土師杯	12.4	3.4		ABC	A	明褐色	30%	覆土
5	土師杯	(12.0)	3.2		ABC	A	明褐色	35%	覆土
6	土師杯	(13.0)	4.2		ABCD	A	淡褐色	20%	覆土
7	土師杯	13.3	3.0		ABC	A	淡褐色	70%	No.14, 中層
8	土師杯	14.5	3.8		ABC	A	褐色	90%	No.6・8, 下層+中層
9	土師杯	(14.0)	4.0		ABCD	A	明褐色	25%	No.30, 中層
10	土師杯	(14.0)	4.1		ABC	A	明褐色	20%	覆土
11	土師杯	15.4	3.1		ABC	A	暗褐色	25%	下層
12	土師皿	(13.2)	3.2		ABC	A	明褐色	25%	覆土
13	土師皿	(14.5)	3.4		ABCD	A	淡褐色	30%	下層
14	土師皿	21.2	3.0		CG	A	褐色	65%	No.20・26, 中層+上層
15	土師暗文杯	10.8	3.3		ABC	A	褐色	85%	No.22・23, 中層。内面放射暗文
16	土師暗文杯	12.6	3.1		ABD	A	褐色	80%	No.17, 中層。内面放射暗文
17	土師暗文杯	12.0	3.7		ABG	B	淡褐色	20%	下層。内面放射暗文
18	土師暗文杯	(13.4)	4.1		BCD	A	褐色	30%	上層。内面放射暗文
19	土師暗文杯	(14.4)	4.2		ABD	A	淡褐色	35%	覆土。内面放射暗文
20	土師暗文杯	(15.6)	4.4		BCD	B	暗褐色	20%	上層・下層。外面体部横ヘラミガキ。内面放射暗文

第320図 A区第5・6号特殊遺構

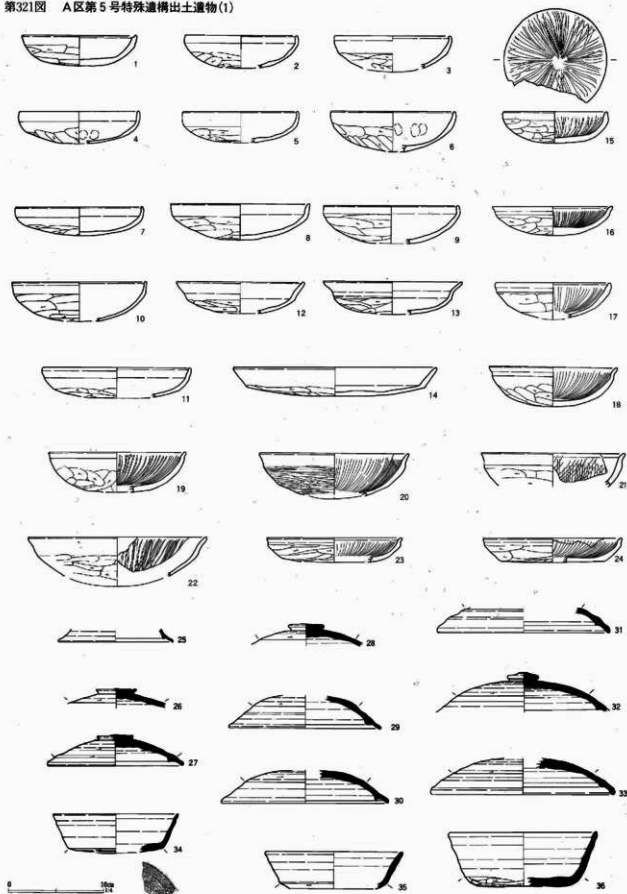


SX05・06

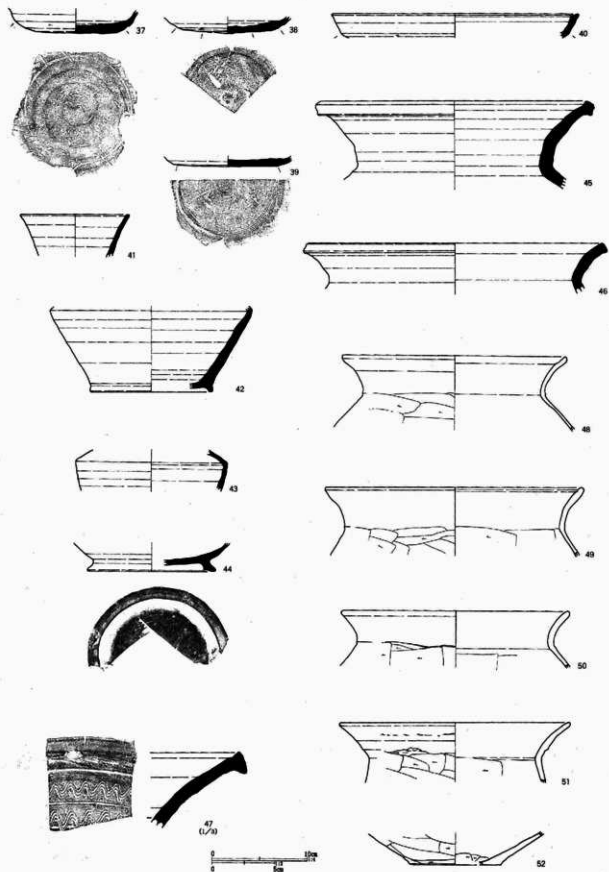
- | | | |
|----|------|--------------------------|
| 1 | 灰褐色土 | 浅層A多量 |
| 2 | 褐色土 | ロームブロック多量 |
| 3 | 褐色土 | ロームブロック少量 |
| 4 | 明褐色土 | ロームブロック極めて多量 |
| 5 | 明褐色土 | ロームや少量 |
| 6 | 明褐色土 | ローム少量 |
| 7 | 暗褐色土 | 大粒のロームブロック多量 |
| 8 | 暗褐色土 | 焼土粒子多量・ロームブロック少量 |
| 9 | 褐色土 | 焼土粒子・ロームブロック多量 |
| 10 | 黒褐色土 | 焼土粒子・ロームブロック多量
灰少量 |
| 11 | 明褐色土 | ローム主体・黒色土・灰・焼土混入 |
| 12 | 褐色土 | 焼土・灰・ロームブロック多量 |
| 13 | 暗褐色土 | 灰・炭化物多量、ロームブロック
極めて多量 |
| 14 | 褐色土 | 焼土粒子・ローム粒子少量 |
| 15 | 褐色土 | 焼土・灰極めて多量 |

0 2m

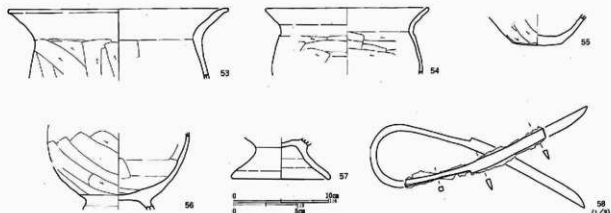
第321图 A区第5号特殊遗物出土物(1)



第322图 A区第5号特殊道槽出土遗物(2)

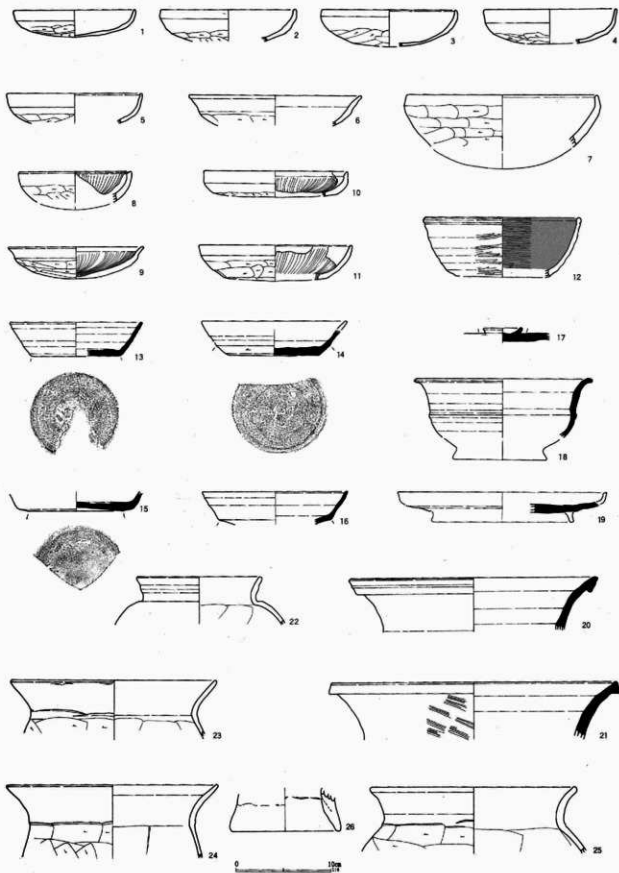


第323図 A区第5号特殊遺構出土遺物(3)

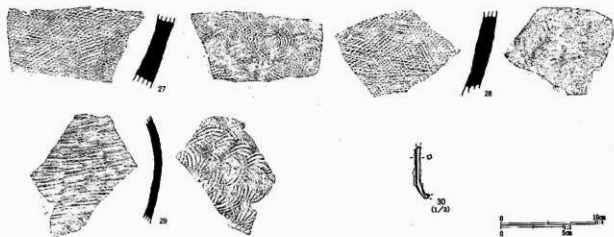


番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
21	土師暗文环	15.0	3.5		BC	A	褐色	15%	覆土。内面放射暗文
22	土師暗文环	(18.7)	4.1		BCD	A	黄褐色	10%	No.7。中層。内面放射暗文
23	土師暗文环	14.2	2.5		AC	A	淡褐色	25%	No.5。下層。内面放射暗文
24	土師暗文环	(14.4)	2.5		BCD	A	淡褐色	30%	覆土。内面放射暗文
25	須恵壺	12.0	1.3		B片	A	灰色	15%	覆土。末野産。かえり径9.7cm
26	須恵壺		1.9		BC	B	灰褐色	25%	上層。末野産
27	須恵壺	(14.1)	3.7		BC片	A	灰色	35%	上層。末野産。かえり径11.5cm
28	須恵壺		2.4		BC片	A	灰色	40%	覆土。末野産
29	須恵壺	16.0	3.4		BC片	B	暗灰褐色	15%	下層。末野産。かえり径13.0cm
30	須恵壺	17.5	3.4		C片	B	灰白色	20%	No.4。中層。末野産。かえり径15cm
31	須恵壺	17.8	2.6		BC片	B	灰白色	30%	上層。末野産。かえり径15.3cm
32	須恵壺		4.1		CG片	B	暗灰褐色	50%	覆土。末野産。かえり径15.4cm
33	須恵壺	19.0	3.8		BC片	A	灰色	20%	上層・下層。末野産
34	須恵环	(13.2)	4.0	10.0	BC片	A	灰色	10%	下層。末野産。底部回転ヘラケズリ
35	須恵环	(14.3)	3.8		B片	A	灰色	30%	下層。末野産。体部下端回転ヘラケズリ
36	須恵無台輪	(15.4)	5.7		BC片	A	灰色	35%	下層。末野産。底部ヘラ切り後手持ちヘラケズリ
37	須恵环		2.5		CE片	A	灰色	70%	覆土。末野産。底部3a手法
38	須恵环		1.8	(9.4)	BCE片	A	灰色	35%	下層。末野産。底部A3b手法
39	須恵环		1.2	10.6	BC片	A	灰色	60%	上層・下層。末野産。底部3a手法
40	須恵甕	(25.8)	2.5		BC片	B	灰白色	5%	覆土。末野産。口縁端部に面を持つ
41	須恵長頸壺	(11.3)	4.5		BF	A	灰白色	10%	下層。湖西産か
42	須恵長頸壺		9.1	(12.8)	BC	A	灰色	25%	No.1。秋間産か
43	須恵長頸壺		4.4		CD	A	銀黑色	10%	下層。東海産。肩部自然輪付着
44	須恵短頸壺		3.0	13.4	BCF	A	灰色	45%	No.2。湖西産か。内面自然輪付着 底部回転ヘラケズリ
45	須恵壺	(28.0)	9.4		BC片	B	灰白色	5%	下層。末野産
46	須恵大型壺	(31.0)	5.4		BCD片	D	暗灰褐色	5%	下層。末野産
47	須恵壺		5.5		BC片	A	灰色	5%	覆土。末野産
48	土師壺	(23.4)	7.9		ABC	A	褐色	15%	上層・下層
49	土師壺	(26.8)	7.2		AC	A	明褐色	25%	下層
50	土師壺	23.7	6.0		ABCD	A	褐色	15%	覆土
51	土師壺	24.0	6.3		BC	A	褐色	15%	覆土
52	土師壺		3.5	(9.7)	AC	A	褐色	20%	覆土
53	土師壺	(23.0)	7.5		ADG	A	褐色	15%	覆土
54	土師小型壺	(17.0)	7.0		AB	A	淡褐色	10%	上層
55	土師壺		3.3	(5.2)	BG	A	淡褐色	40%	覆土
56	土師小型台付壺		8.0		AC	A	褐色	75%	下層
57	土師台付壺		4.2	10.3	CG	A	褐色	50%	下層
58	鉄製鏡	覆土上層+No.3(覆土中層)。残長11.7cm。クロス式							

第324图 A区第6号特殊遗物出土物(1)



第325図 A区第6号特殊遺構出土遺物(2)



第124表 A区第6号特殊遺構出土遺物観察表 (第324・325図)

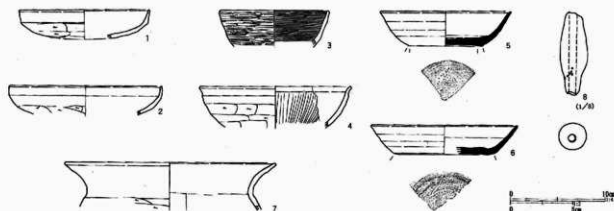
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(12.7)	2.9		AB	B	褐色	30%	最上層
2	土師環	(14.0)	3.4		AB	A	黄褐色	20%	覆土
3	土師環	(14.0)	3.8		AG	A	褐色	25%	最上層
4	土師環	(13.8)	3.6		BG	B	褐色	20%	覆土
5	土師環	(14.0)	3.2		G	A	淡褐色	25%	最上層。粉っぽい素地土
6	土師皿	(18.0)	3.2		AB	A	橙褐色	25%	覆土
7	土師環	(20.0)	5.5		AB	B	橙褐色	20%	覆土
8	土師暗文環	(11.7)	3.2		AB	A	茶褐色	20%	覆土。内面放射暗文。口唇部沈線
9	土師暗文環	(14.1)	3.4		AB	A	橙褐色	30%	覆土。内面放射暗文
10	土師暗文環	(15.0)	2.6	(13.2)	G	A	淡茶褐色	20%	覆土。内面放射暗文
11	土師暗文環	(16.0)	3.7	(11.0)	BG	A	茶褐色	20%	覆土。内面放射暗文
12	土師内黒縄	(16.0)	6.4		AB	A	黄褐色	15%	覆土。口外周沈線1条
13	須恵環	(13.8)	3.6	9.3	C片	B	黄褐色	35%	最上層。末野産。底部ケズリ後ナデ
14	須恵環		2.6	9.5	C片	B	灰色	70%	覆土。末野産。体部下端+底部回転ヘラケズリ
15	須恵環		2.0	(10.0)	C片	A	青灰色	25%	覆土。末野産。底部回転ヘラケズリ後口ロナデ
16	須恵環	(15.2)	3.5		BC	B	黄灰色	15%	最上層。産地不明
17	須恵壺		1.4		B片	A	灰色	75%	覆土。末野産。つまみ径3.8cm
18	須恵精縄	(18.0)	6.3		BC針	A	灰色	15%	覆土。南比企産。佐波理横散縄
19	須恵高台盤		(1.1)		BC片	A	灰色	25%	覆土。末野産。高台径15cm前後
20	須恵壺	(25.5)	5.7		B片	A	暗灰色	10%	覆土。末野産
21	須恵壺	(30.0)	6.0		B	B	黒灰色	10%	覆土。末野産?白色粒子多量
22	土師小壺	13.0	5.0		AB	B	褐色	70%	最上層
23	土師壺	(21.5)	6.3		AB	A	黄褐色	15%	最上層
24	土師壺	(22.0)	7.7		AB	B	明褐色	15%	最上層
25	土師壺	(21.2)	7.0		BG	A	明褐色	25%	覆土
26	土製支脚		4.5		AG	B	黄褐色	70%	覆土
27	須恵壺				C片	B	淡灰色		覆土。末野産
28	須恵壺				C片	B	淡灰色		最上層。末野産
29	須恵鉢				C片	B	暗灰色		覆土。末野産。他に同一個体破片7点あり
30	不明鉄製品	覆土上層。残長4.0cm。棒状							

側壁はオーバーハングする部分が見られ、底面も凹凸が激しい。埋土は上面に近世以降の攪乱土が被る(第1層)が、その下部はロームブロックが多量に含まれ、人為的に埋め戻された様相が窺われる。第

5号特殊遺構との相違は、本遺構には焼土の混入が少ない点である。

遺物は比較的多いが、全て破片である(第324・325図)。1～5は土師器片、6は皿である。7は大振り

第326図 A区第5・6号特殊遺構出土遺物



第125表 A区第5・6号特殊遺構出土遺物観察表 (第326図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(13.6)	3.0		AB	A	茶褐色	10%	確認面
2	土師環	(15.8)	3.1		A	B	褐色	10%	確認面
3	土師内黒環	(11.2)	3.8		A	A	黄褐色	20%	確認面
4	土師暗文環	(15.8)	4.4		B	A	淡褐色	10%	確認面。内面放射状暗文
5	須恵環	(13.7)	3.6	(8.0)	B片	A	灰色	15%	確認面。末野産。底部両手持ちヘラケズリ
6	須恵環	(15.4)	3.1	(9.4)	B片	A	灰色	15%	確認面。末野産。底部回転ヘラケズリ
7	土師甕	(22.0)	4.9		ABC	A	褐色	10%	確認面
8	土盤	長さ6.5cm, 最大径2.2cm, 孔径0.5cm, 重さ24.7g,			胎土B, 焼成A, 淡褐色, 残存ほぼ100%				

で碗器形であるが、口唇部が内屈しており混入の可能性が高い。8～11は暗文環。10・11は平底暗文環である。12は土師器内黒碗。口縁部外面に沈線が1条巡る。内面はヘラミガキ+黒色処理。外面はロクロ整形され、一部ミガキが加わる。底部を欠く。

13～16は須恵器環である。13は底部ヘラ切り後回転ヘラケズリ、更にナデているようである。末野産。14は体部下端と底部が回転ヘラケズリ調整されている。17は須恵器蓋。18は須恵器佐波理模倣碗で体部中位に凸帯が巡る。末野産。19は高台盤である。20・21・27～29は須恵器甕。22・25は土師器壺、23・24は土師器甕である。30は不明鉄製品である。

出土遺物の時期は熊野Ⅱ期～Ⅲ期のものがあり、主体は後者と考えられる。遺構の性格は土取り跡と考えてよからう。第5号特殊遺構掘削後、本遺構を掘り下げたものと推定される。西側に付設された円形土壌は採掘の一つの単位を示すものであろう。

A区第5・6号特殊遺構出土遺物 (第326図)

第326図1～8は第5・6号特殊遺構確認面から出

土した遺物である。3はロクロ土師器の内黒碗である。内外面ヘラミガキで、内面黒色処理される。帰属は不明であるが、第6号特殊遺構に内黒碗が出土している。4は丸底の暗文環で、第5号特殊遺構に伴うであろう。5・6の須恵器環は平底で5は底部手持ちヘラケズリ、6は回転ヘラケズリ調整されている。第6号特殊遺構に帰属するものと推定される。

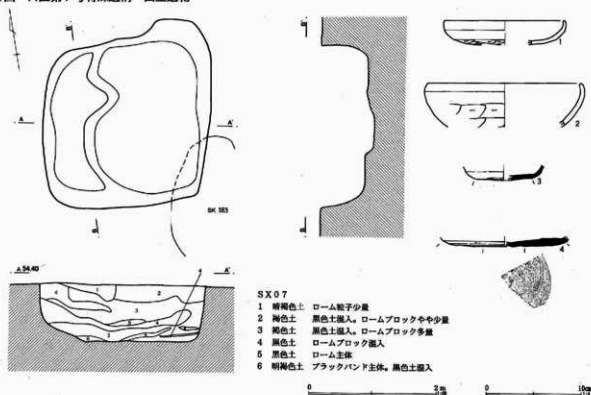
A区第7号特殊遺構 (第327図)

A区第7号特殊遺構は44～13グリッドに位置する。第183号土壌に切られていると捉えたが、不明確である。

平面形態は不整形で、規模は長径2.82m、短径2.64m、深さ0.90mである。底面は凹凸があり一定しない。埋土はローム混じりの土が不規則に堆積しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物は少なく、土師器環、須恵器環が検出された(第327図)。1は弱い丸底の環で扁平化している。2は丸底環。大振りで口縁部は内彎する。3は小型環(環Gか)で底部は手持ちヘラケズリ。4は大振り

第327図 A区第7号特殊遺構・出土遺物



- SX 07
- 1 明褐色土 ローム粒子少量
 - 2 褐色土 黒色土混入。ロームブロックやや少量
 - 3 褐色土 黒色土混入。ロームブロック少量
 - 4 黒色土 ロームブロック混入
 - 5 黒色土 ローム主体
 - 6 明褐色土 ブラックバンド主体。黒色土混入

第126表 A区第7号特殊遺構出土遺物観察表 (第327図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師杯	(12.5)	2.5		AB	B	褐色	20%	覆土
2	土師杯	(16.0)	4.5		AB	B	褐色	15%	覆土
3	須恵杯	1.6	(6.0)		B片	A	灰色	20%	覆土。末野産。底部手持りヘラケズリ
4	須恵杯	1.1	(10.0)		B D片	D	灰褐色	20%	覆土。末野産。底部ヘラ切り後回転ヘラケズリ

の杯で底部はヘラ切り後回転ヘラケズリ調整される。

出土遺物の時期は熊野Ⅰ期～Ⅱ期のものを含んでいる。遺構の性格は不明確であるが、第4～6号特殊遺構との共通点が多く、土取りのための採掘坑と考えるのが妥当と思われる。

A区第8号特殊遺構 (第328図)

A区第8号特殊遺構は35-11グリッドに位置する。調査区際であり、第1号道路跡の西側に隣接している。確認面で土師器甕の口縁部が散乱していたため精査したところ、甕が1個体単独で埋設されていることが判明した。口縁部の破片の一部は甕内部に落ち込んでいたことから、当初は内部に土が充填していなかったものと考えられる。

埋設された甕は正位でやや北西に傾いていた。一部欠けているがほぼ完形で埋設されていたものと思

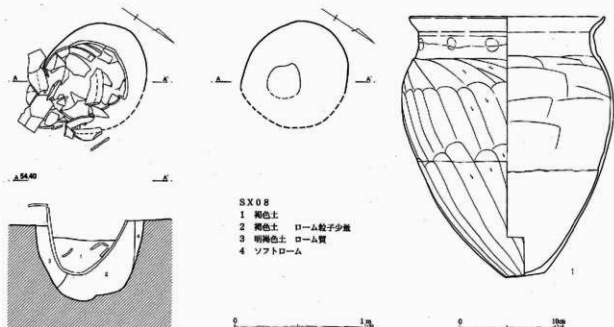
われる。掘り方は円形で、規模は直径0.70m、深さ0.60mである。埋土は砂質の強い褐色土で、内容は確認されなかった。

甕(第328図1)はいわゆる「コ」の字状口縁甕で、口径20.3cm、器高27.3cm、底径4.3cm。胎土に角閃石・白色粒子・赤色粒子を含み、焼成は良好である。色調は明褐色で、95%残存する。

甕胴部下半の内外面には剥離痕が認められた。甕上部に蓋がなく、開放されたままであれば内面に剥離痕が附くことは想定できても、外面に付くのは不自然である。埋設以前に剥離したものか、あるいは埋設後、ネズミなどの動物によって囁られた可能性もあろう。

遺構の性格は不明確ながら、甕棺墓の可能性が最も強いものとする。但し、蓋の存否は不明である。

第328図 A区第8号特殊遺構・出土遺物



また骨片も検出されなかった。隣接する道路跡との
関連性が注目される。時期は熊野V期～VI期頃と考
えられる。

(11) A区ピット出土遺物

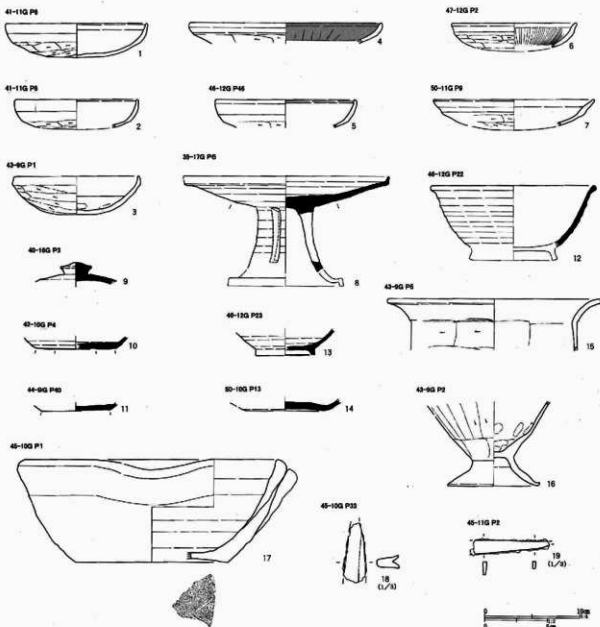
単独ピットから出土した遺物を掲載した(第329
図)。特徴的な遺物に関して述べると、8は須恵器高
盤である。第40号掘立柱建物跡の南側に位置するピ
ットから出土した。脚裾を欠く。脚部は3方透かし

である。末野産。17は須恵質の片口鉢である。45-
10グリッド、中世掘立柱建物跡の集中する一角のピ
ットから出土した。内面は磨滅しており、底部は糸
切り痕が残る。13世紀後半頃のものとして推定される。

第127表 A区ピット出土遺物観察表 (第329図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(14.8)	3.5		B DG	A	橙褐色	20%	41-11G Pit6
2	土師環	(12.7)	2.9		AB	B	淡褐色	20%	41-11G Pit8
3	土師環	(13.0)	4.0		AB	A	橙褐色	35%	43-9G Pit1 No1
4	土師陶文皿	(20.0)	2.1		AB	A	茶褐色	10%	43-9G Pit1 No3, 内面黒色処理か
5	土師環	(14.6)	2.9		G	A	褐色	10%	46-12G Pit46
6	土師陶文環	(13.0)	2.5		B	A	明褐色	20%	47-12G Pit2, 内面放射状文
7	土師皿	(16.8)	2.7		AB	B	橙褐色	10%	50-11G Pit9
8	須恵高盤	(21.4)	10.1		C D片	B	淡青灰色	50%	39-17G Pit6 末野産 脚部3方透し
9	須恵蓋		2.3		B D	B	黄灰色	40%	40-16G Pit3, 末野産
10	須恵環		1.4	(8.2)	B	A	淡灰色	35%	42-10G Pit4, 南北企産, 底部B3a手法
11	須恵環		0.8	7.2	B	A	紫灰色	75%	44-9G Pit40, 南北企産, 底部B3a手法
12	須恵高台碗	(17.0)	6.5		C D片	C	灰褐色	10%	46-12G Pit22, 末野産
13	須恵高台碗		2.8	(6.2)	B片	A	青灰色	20%	46-12G Pit23, 末野産
14	須恵環		1.2	8.0	B	A	灰色	80%	50-10G Pit13, 末野産か 底部A1手法か
15	土師甕	(22.0)	5.5		AB	A	淡褐色	15%	43-9G Pit5
16	土師台付甕		9.0	9.4	AB	B	褐色	70%	43-9G Pit2 Na1, 外面二次被熱
17	須恵質片口鉢	(26.4)	10.8	(16.0)	B	A	灰色	20%	45-10G Pit1, 内面磨滅, 須恵質
18	鉄製鍬先	45-10G Pit33, 残長4.7cm, 鍬先耳部							
19	刀子	45-11G Pit2, 残長5.8cm, 柄部							

第329図 A区ピット出土遺物



18は鉄製鍔先の耳部である。45-10グリッドPit33

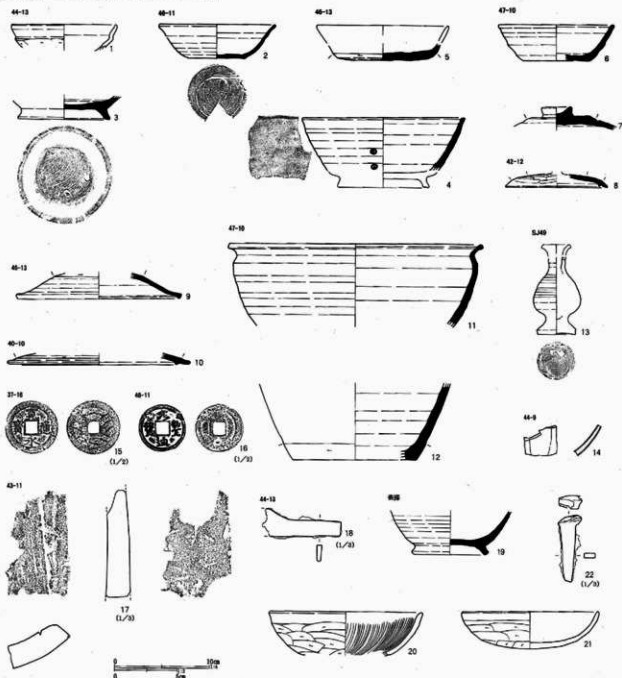
から出土した。

(12) A区グリッド・表探出土遺物

ここでは、A区のグリッドから遺構に伴わずに出土した遺物、表面採集で出土した遺物を掲載した(第330図)。4は須恵器高台椀で、底部を欠く。体部には二重円のスタンプが縦に2個押されている。46-11グリッドから出土しているが、同一グリッドにある第45号住居跡から出土した須恵器蓋(第71図10)に同一のスタンプ文が押捺されていた。焼きも類似し

ており椀と蓋のセット関係を示す合印と考えられる。末野産である。8は天井部手持ちヘラケズリ調整の須恵器かえり蓋。つまみを欠くが乳頭状となるであろう。末野産。13は瀬戸の灰軸花瓶である。第49号住居跡から検出されたが、もちろん遺構に伴うものではない。15世紀頃の所産であろう。14は44-9グリッドから出土した同安窯系の青磁碗である。

第330図 A区グリッド・表採・出土遺物



第128表 A区グリッド・表採出土遺物観察表 (第330図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師環	(11.0)	2.8		A B	A	褐色	30%	44-13G
2	須恵環	(12.1)	3.5	6.0	B片	A	青灰色	45%	46-11G確認面。未野産
3	須恵高台碗		2.5	9.4	B C片	C	灰黑色	80%	46-11G。未野産
4	須恵高台碗	(17.0)	5.5		D片	D	黄灰褐色	10%	46-11G。未野産。体部外面二重円状のスタンプ文
5	須恵環		1.8	9.5	B片	A	灰色	50%	46-13G。未野産
6	須恵環	(12.0)	3.7	(7.0)	片	B	黄灰色	30%	47-10G。未野産。底部回転糸切り
7	須恵蓋		2.4		片	A	淡灰色	75%	46-11G。未野産。つまみは中心からはずれている
8	須恵蓋	(10.7)	1.3		D片	B	黄灰色	20%	42-12G。未野産か
9	須恵蓋	(17.0)	2.8		片	C	灰色	25%	46-13G。未野産

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
10	須惠壺	(18.8)	1.2		B	A	青灰色	15%	40-10G。秋田産。素地土比較的緻密
11	須惠鉢	(26.6)	8.7		B片	A	青灰色	10%	47-10G。未野産
12	須惠壺		8.1	(13.0)	B	B	暗青灰色	20%	47-10G。南比企産
13	瀬戸灰釉花瓶		8.3	4.0	F	A	灰白色	100%	覆土。底部回転糸切り
14	青磁碗					A			44-9G。蓮弁文。同安福系
15	古銭	37-16G。寛永通寶							
16	古銭	46-11G。元豐通寶(北宋銭 1078年初鑄)							
17	平瓦				B D片	C	灰褐色		43-11G。凹面布目。縦方向切込痕。凸面ナデ
18	不明鉄製品	44-13G。残長6.2cm。鋸板状。柄部小							
19	須惠高台輪	(16.0)	4.6	7.3	C片	A	淡黄灰色	80%	表探。未野産
20	土師繪文坏	(14.2)	4.5		A C D	A	明褐色	25%	表探。内面放射繪文
21	土師坏	(14.2)	3.9		B D	B	橙褐色	35%	表探。全体に風化外面黒斑
22	鉄釘	表探。残長5.3cm。方頭							

V 熊野遺跡C区の調査

C区の概要

熊野遺跡C区は、当事業団調査区の中で最も北に位置する。南側にはD区が道路部分を隔てて隣接する。ほぼ平坦な地形で、標高は約53.5mである。調査区は東西に長い不整形で、調査面積は約2800㎡である。

検出された遺構は、竪穴住居跡が45軒、掘立柱建物跡が23棟、溝跡が10条、土壌が72基、特殊遺構が2基、墓塚が1基である。

竪穴住居跡は古代のものが43軒、中世のいわゆる竪穴状遺構が2軒である。古代の住居跡は調査区西端に少ない傾向にあるが、中央から東側にかけては稠密に分布する。A区で検出された1号道路跡はC区の西側を北上する可能性がある。A区でも道路跡の周囲には古代の住居跡の分布が極めて薄かったが、C区西端に古代の住居跡が少ない背景には同様な事情が存在したのかもしれない。その当否は周囲の調査によって解決されるであろう。住居跡の時期は7世紀後半～9世紀末葉乃至10世紀初頭段階まででA区と変わりはない。全体的な傾向とすれば、7世紀後半～8世紀前半代の古い段階の住居跡がA区よりも多い傾向にある。

掘立柱建物跡はほぼ住居跡の占地と重なるが、東側と西側に比較的多くまとまり、中央部に少ない。古代の建物跡が18棟、中世のそれが5棟存在する。主体は古代の建物で、最大規模は5×2間の側柱建物跡で2棟検出された。最小は1×1間のものが確認された。

溝跡は中世段階のものがほとんどである。第7号溝跡は幅5m、深さ1.7m、調査区内で直角に屈曲するもので、館跡を構成する堀跡と考えられる。北側延長部分は町教育委員会によって調査されており、方形館になるものと考えられる。調査区際の断面観察からは土塁の痕跡は認められなかった。また、調査区東端にある第5号溝跡からは角閃石安山岩の円

礫が多量に検出されている。

土壌は72基検出されたが、大半は中世以降の所産と推定される。第1号墓は掘り込みが不明瞭であったが、人骨が遺存していた。

特殊遺構としたものは2基検出された。性格は不明瞭であるが、A区で見られたものと同様、土取りのための採掘の可能性がある。

出土遺物は土師器・須恵器が主体で、中世の溝跡などからは中世陶磁器が検出されている。特徴的な遺物としては、第10号住居跡から視面の一隅を窪ませた凹面甕が検出されている。また、第18号住居跡から「弓成」と刻まれた刻字紡錘車出土した。そのほか、第26号住居跡からは「神主内」と記された墨書土器が検出されている。意味に関しては不明であるが、古代の宗教関係遺物としても注目される。

(1) 竪穴住居跡(古代)

C区第1号住居跡 (第335図)

C区第1号住居跡は28-15グリッドに位置する。北部は調査区外に延びている。重複する第2号住居跡に切られ、遺構の遺存状態は悪い。

平面形態は方形と推定され、規模は一辺2.70m、深さ0.24mである。主軸方位はN-30°-Wを指す。

床面は中央に向かってやや傾斜しており、全体に軟質である。埋土はローム粒子とロームブロックが多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性が高い。

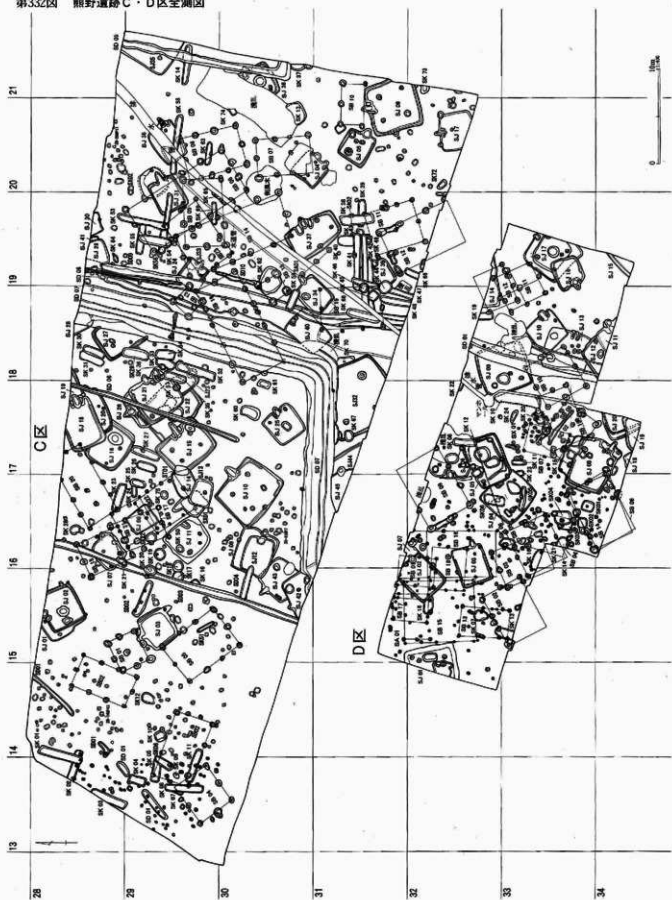
カマドは検出されなかった。第2号住居跡に破壊されたものであろう。

ピットは2基検出されたが、いずれも浅く主柱穴

第331図 C区第1号住居跡出土遺物



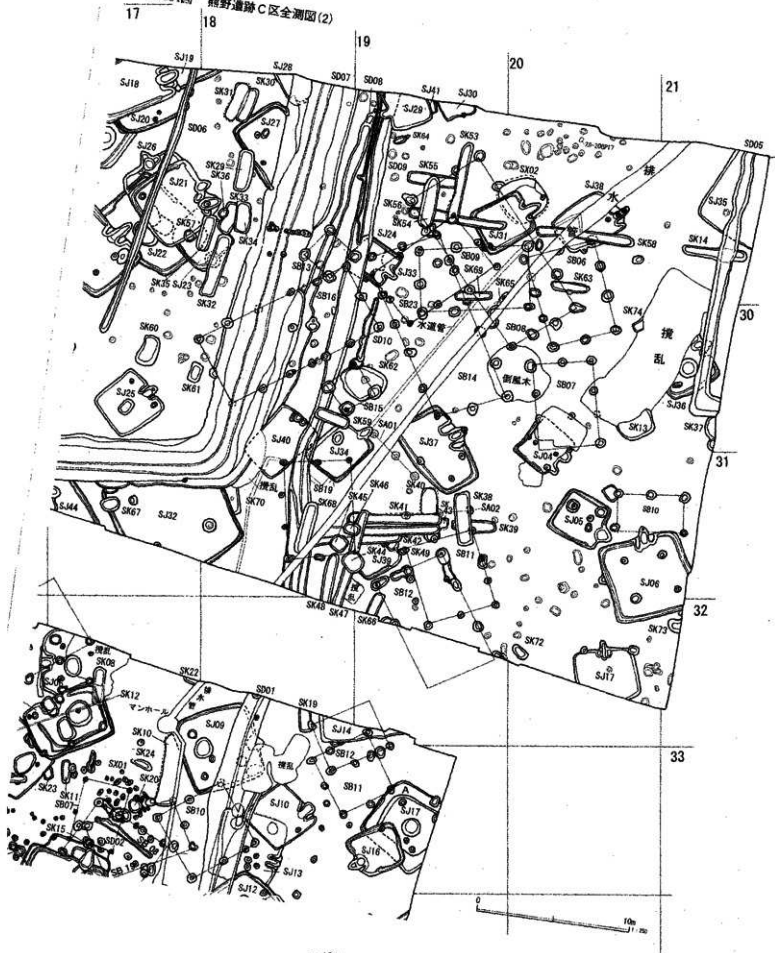
第332図 熊野遺跡C・D区全測図



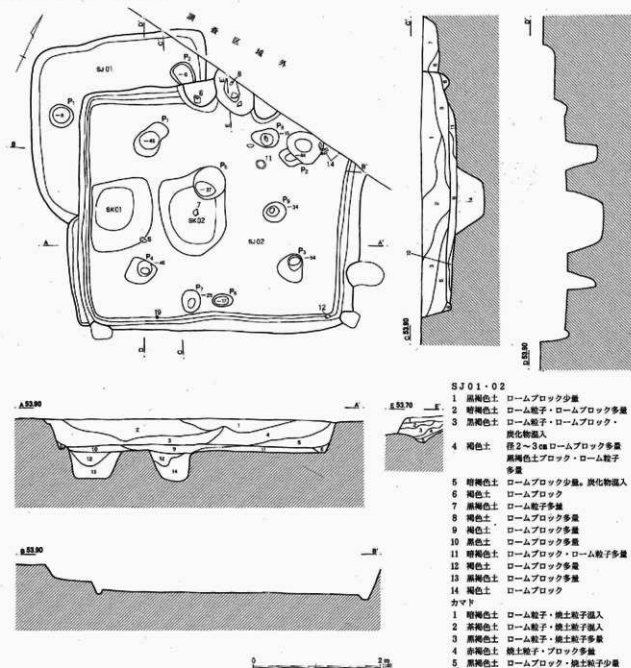
第333図 熊野遺跡C区全測図(1)



第334图 野野道跡C区全測图(2)



第335図 C区第1・2号住居跡



第129表 C区第1号住居跡出土遺物観察表 (第331図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器環	(9.2)	2.7		BCF	A	灰色	10%	覆土。末野産か。黒色粒子吹き出しあり
2	土鉢	覆土。長さ5.5cm。最大径1.2cm。孔径0.25-0.35cm。重さ5.0g。胎土A。焼成B。淡褐色							

とはなり得ない。

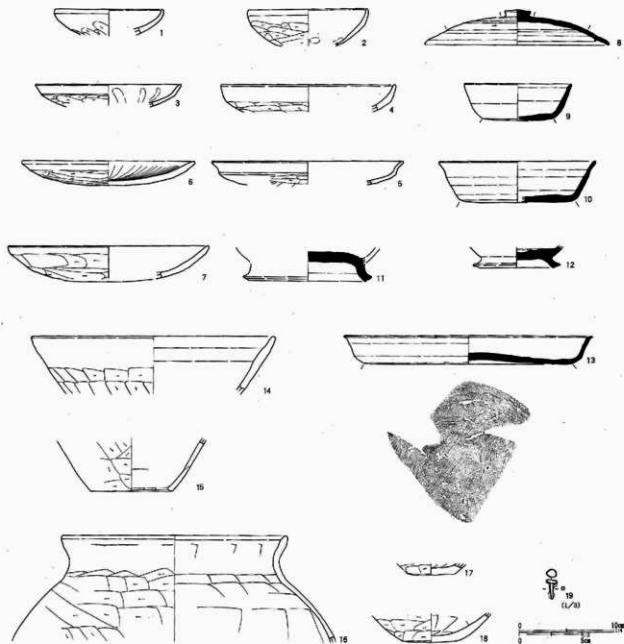
出土遺物は非常に少なく須恵器環と土鉢が検出されたのみである(第331図)。1は須恵器環。小振りの環Gと考えられる。末野産か。2は土鉢である。時期は不明確であるが、出土須恵器及び第2号住居跡

との関係から熊野I期と考えられる。

C区第2号住居跡 (第335図)

C区第2号住居跡は28-15グリッドに位置し、北端部は調査区外に延びている。第1号住居跡が重複し、本住居跡の方が新しい。

第336図 C区第2号住居跡出土遺物



平面形態は方形と推定され、規模は長軸長4.44m、短軸長3.90m、深さ0.26mである。主軸方位はN-29° -Wを指す。

床面は概ね平坦で全体に堅く踏み固められていた。埋土にはロームの混入が目立ち、特に第3・4層に多量に含まれていた。第9～11層は掘り方埋土である。

カマドは北西壁に設けられているが、燃焼部先端は調査区外にあり全容は不明である。燃焼部は壁を切り込み、底面は浅く皿状に掘り込まれていた。左

側壁から袖部には白色粘土が貼られていた。右袖も白色粘土を積み上げて構築されているが、かなり削平されており遺存状態は悪い。

埋土は第3・4層が天井部崩落土、第5層は掘り方埋土と考えられる。火床面は第4層下面であろう。

ピットは住居内から9本検出されている。Pit 1～4は住居に伴う主柱穴と考えられる。他のピットの帰属は不明であるが、Pit 5・8は床面を完全に切っており、住居よりも新しい可能性が高い。また、住

第130表 C区第2号住居跡出土遺物観察表(第336図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師杯	(11.2)	2.7		B	B	褐色	20%	覆土
2	土師杯	(12.4)	3.9		AB	B	褐色	45%	覆土
3	土師皿	(15.2)	2.4		AB	B	橙褐色	20%	覆土。底部陥凹あり
4	土師皿	(18.2)	2.9		B	B	橙褐色	15%	覆土
5	土師皿	(20.0)	2.5		AB	B	明褐色	5%	覆土
6	土師暗文皿	(18.0)	2.6		AB	A	明褐色	30%	カマド内No.4。内面放射暗文
7	土師皿	(21.0)	3.5		AB	A	橙褐色	20%	No.3。覆土下層
8	須恵蓋	(19.2)	3.7		B片	C	灰色	25%	カマド内No.3。末野産
9	須恵環	(11.2)	3.9	(7.4)	B片	B	黒灰色	25%	覆土。末野産。底部3a手法
10	須恵環	(16.3)	4.3	(12.0)	B C F	A	灰色	20%	カマド。末野または群馬産。底部3a手法
11	須恵瓶		3.1	12.0	B C片	A	青灰色	100%	No.1。床面。末野産。脚部外面窯壁付着
12	須恵瓶		2.2	(7.6)	B C片	A	青灰色	50%	No.8。覆土中層。末野産
13	須恵壺	(26.0)	3.0	(21.8)	B C片	B	青灰色	20%	覆土。末野産。底部手持ちヘラケズリ
14	土師瓶	(25.3)	6.1		AB	B	褐色	30%	No.6-7, Pit.2。床面+Pit.埋土
15	土師瓶		5.4	(8.6)	AB	B	褐色	10%	覆土
16	土師壺	(23.4)	11.2		AB	B	褐色	15%	覆土
17	土師壺		1.2	5.0	AB	B	黒褐色	75%	SK1
18	土師壺		3.0	(6.0)	AB	B	褐色	25%	覆土
19	釘	長さ1.0cmほどの小さな釘がおよそ50本固まって腐っている。混入であろう							

居内から土壌が2基検出された(SK01-02)。いずれも貼床が上面を覆っており、床下土壌と考えられる。

壁溝は全周する。深さ5-10cm程度である。

出土遺物は土師器杯・皿・暗文皿・壺・瓶・甕、須恵器杯・盤・蓋・壺がある(第336図)。土師器杯は口縁部が短く内彎している(1・2)。皿は3タイプある。6の内面には放射暗文が施文されている。須恵器蓋は小さい擬宝珠つまみをもち、内面のかえりはやや貧弱である。薄手であるが均整のとれたつくりである(8)。末野産。須恵器杯は大小2種ある(9・10)。いずれも底部は回転ヘラケズリ調整。9は小型品で、末野産。10は大型で、末野または群馬産か。11-12は須恵器台付瓶の脚部である。いずれも踵立ち状の脚部である。11は脚部外面に窯壁が付着し、横向きで焼成されたことを示している。13は無台盤。口唇部は面をもっている。底部は手持ちヘラケズリ。末野産と思われる。須恵器は21点出土し、内訳は杯が11点、壺が4点、蓋が2点、蓋が3点、盤が1点である。

住居の時期は出土遺物から熊野Ⅱ期古段階と考えられる。

C区第1・2号住居跡出土遺物(第337図)

第337図には第1号住居跡が第2号住居跡、いずれ

に帰属するか不明な遺物を掲載した。1は末野産のかえり蓋。2は末野産の杯で、体部下端を回転ヘラケズリ調整している。3は壺で、やはり末野産。4は土師器壺である。1・2については第2号住居跡に帰属する可能性が高いであろう。

C区第3号住居跡(第338図)

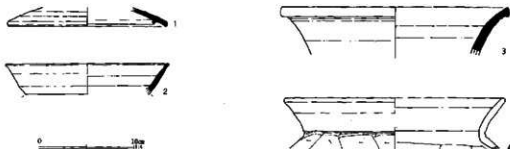
C区第3号住居跡は29-15グリッドに位置する。第1・5号掘立柱建物跡が重複し、断面観察により本住居跡の方が新しいことが判明した。

平面形態は方形で、規模は一辺3.78m、深さ0.60mである。主軸方位はN-33°-Wを指す。

床面は平坦であるが、特に硬化した部分は見られなかった。壁は立ち上がり角度が緩やかで、特に上部は外側に大きく開いていた。崩落したのか。埋土は3層に分かれ、ローム粒子の混入が目立つ。

カマドは北西壁に設けられていた。燃焼部は壁を切り込み、底面は僅かに掘り込まれていた。埋土は2-6層が天井部崩落土、5層は天井部崩落土と灰層が混じっているものであろう。7層は側壁の被熱焼土である。袖は灰色から灰白色の粘土を積み上げて構築されていた。また、カマド右脇の壁外には浅いテラスが設けられていた。棚状施設であろうか。

第337図 C区第1・2号住居跡出土遺物



第131表 C区第1・2号住居跡出土遺物観察表 (第337図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵壺	(16.6)	2.0		B D片	B	灰褐色	5%	覆土。末野産
2	須恵杯	(17.0)	3.2		B片	B	黒灰色	10%	覆土。末野産
3	須恵壺	(23.8)	4.9		B C片	B	灰色	20%	覆土。末野産
4	土師壺	(23.0)	5.5		AB	B	褐色	15%	覆土。

ピット・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器環・暗文環・甕・小型甕・壺、須恵器環・碗・蓋・高盤・甕、土鍾、鉄製品がある(第339・340図)。1～11は土師器環。口縁部を内彎気味に納め、扁平な丸底器形である。12～18は平底暗文環である。内面は放射暗文と螺旋暗文が施文される。19は斜格子暗文を施す大型暗文環。混入の疑いがある。

20・21は須恵器蓋。いずれも無かえり蓋である。20は末野産の可能性もあるが、素地上が細かく産地は不明確である。坏蓋にしては大きく碗蓋か。22は盤の可能性もあるが、やや小さく、蓋としておきたい。24・25は杯。口径は14.3～14.4cm。24は内底面の周縁は沈線状に区画され立ち上がりは鋭い。底部周辺から体部下端は回転ヘラケズリ調整。中心部は撫でられており、不明確であるが糸切り痕の可能性もある。内外面火傷と重ね焼き痕がみられる。25はやや深身で、底部は回転糸切り後、周辺部と体部下端が回転ヘラケズリ調整されている。いずれも末野産。26は無台碗。底部から体部下端は回転ヘラケズリ調整。28は高盤と思われる。脚部を接合するための円形の切り込みがある。33・34の土師器甕は長胴気味である。37・38は鉄製刀子。同一個体の可能性がある。

須恵器は30片出土し、内訳は坏が13点(末野産11・南比企産2)、碗3点(末野)、甕6点(末野)、蓋7点

(末野6・不明1)、高盤1(末野)である。

住居の時期は、出土遺物から熊野Ⅲ期に位置付けられる。

C区第4号住居跡 (第341図)

C区第4号住居跡は30・31～20グリッドに位置し、北半と南壁上面を攪乱されているため全容は不明である。第7号掘立柱建物跡が重複し、南妻側の柱穴が検出されないことから本住居跡の方が新しいものと判断した。

平面形態は方形または長方形で、残存規模は長軸長3.16m、短軸長2.52m、深さ0.24mである。主軸方位はN-132°-Eを指す。

床面は平坦で非常に堅く踏み固められていた。埋土はローム粒子を少量含む暗褐色土を基調としており、概ね自然堆積と見ても良いであろう。

カマドは南東壁に2基設けられていた。いずれも燃焼部は壁外に突出している。埋土断面観察及び遺物の遺存状態から、第2号カマドから第1号カマドに付け替えられたものと考えられる。第1号カマドは燃焼部側壁の両側に小ピットが穿たれており、袖石を埋め込んだ穴と推定される。埋土は6層に分かれ、底面は被熱していた。第2・4・5層が天井部崩落土、第6層が灰層である。第2号カマドも第1号カマドと同一構造である。粘土を使用した袖は検出